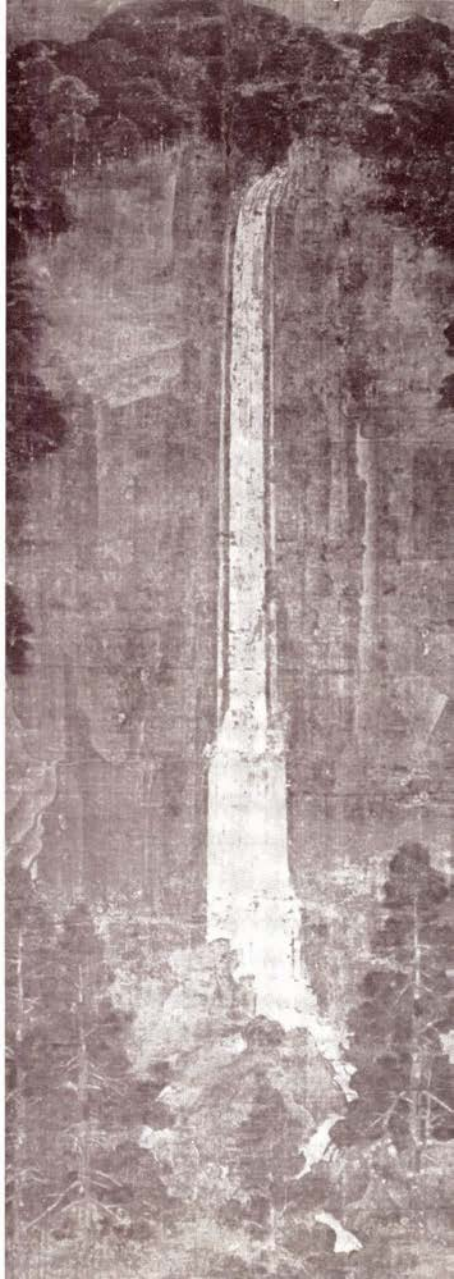


続 日本精神史鈔

—花山院とその系譜—

桑原暁一著

国文研叢書11



国文研叢書
No. 11

社団法人 国民文化研究会

続
日本精神史鈔

— 花山院とその系譜 —

桑原 暁 一 著

はしがき

拙著が、再度国文叢書の一部として出ることになった。ぼくは拙稿が、国文叢書の名に値しないということを痛切に知っているので遠慮したのであるが、国文研理事長・小田村寅二郎学兄の情理を尽くしての勸奨の前に頭を下げるほかはなかつた。副島羊吉学兄（教育学博士・佐賀大学教授）に懇請して、国文研の淵源・黒上正一郎先生と梅木紹男氏くろかみまさいちろうの思い出の記を寄せていただいたのも、この拙著を、できるだけ国文叢書の名に恥じないものにしたかったからである。

「東大寺炎上」と「富士山記」とは、戦後の流浪の日に書いた。心の空虚を紛らわそうと、一心不乱に書いた。これらを書き上げたとき、副島学兄が、わが事のように、いや、それ以上喜んでくださったことは、つい昨日のことのように覚えていいる。「東大寺炎上」は、小田村学兄たちの出していた、ある雑誌に発表された。ぼくは、「わが稿を活字にて見る青葉かな」とよんだのであった。本書に収めるに当って、かなり削除の手を入れた。「富士山記」は、「東大寺炎上」と同巧異曲で、わが父祖の富士山観を通して、時代感情の移り変わりとらえようとしたものである。今度、二十年ぶりに取り出してみると、「東大寺炎上」以上

に、内容雑駁・文章冗漫で、このまま人前に出せるものではない。全面的に書き改めるほかはないが、その気にはなれない。さりとて全部を廃棄するに忍びないので、そのおわりの部分だけ生かすことにして、書き直してここに収録した。

ぼくは昭和二十六年春に教職に就いた。そのあと十年近く、何も書けなかった。教職の上にあぐらをかいていたのであろう。久しぶりに書いたものの一つが「花山院物語」である。それは戸田義雄学兄（文学博士・国学院大学講師）の斡旋で、「宗教公論」誌に載せてもらった。そのころ、同兄はアメリカ留学の途に上ぼった。ぼくはうらやましくてならなかった。そして、ひそかに、「よし、ぼくは日本そのものに留学しよう」と思った。その貧しい成果が、前著の諸論稿であり、本書の「配所の月」「花山の跡を追うもの」「陽成院について」の三篇である。この三篇はいずれも花山院の系譜を探求したものである。

「峠と岬と」は、長い間、考えていた題目であるが、なかなか構想がまとまらなかった。今度思いきって書き出したところ、前に考えていたものとはまったく別のものになっていった。峠と岬とは単なる背景になって、それ自身の性格を描き出すことはできなかった。それは別にして、これを書きつつ痛感するものがあった。そこで木曾義仲や名和長年のことを書いたが、それは彼等を冒瀆するものではないか、という気がしてきて、たまたまなくなった。生れて五十余年、のんびんだらりと生きてきただけのぼくに、一体彼等の何がわかるという

のであろうか。ただ彼等を材料にして、こざかしい言辞を弄しているにすぎない。しかし恥をおそれて、すべてを撤去するよりも、むしろ恥を晒すことさらによって、慚愧ざんきのあかしとするのである。

ぼくが前著をおくった教え子（いやなことばだが、ほかに適當の語が思いつかない）からの本年の年賀状に――

昨年は私の学校（国際キリスト教大学）も紛争に巻き込まれ、十月末にやっと第一学期が始まりました。紛争の方は、解決も何もあったものではなく、人間と人間との溝は深まるばかりです。その間、お送りいただいた御本がどれほど私の心の支えになったかは、先生の想像外のことと思います。

とあった。このあいさつは、まさにぼくの「想像外」であった。これを臆面もなく持ち出したのは、拙著刊行のために苦勞せられる「国文研」の方々への、この上なきお礼のしるしだと思ふからである。

写真を引き受けて下さった田中邦幸氏、資料を提供して下さい下さった北野克氏、岩佐貫三氏、金子彰吾氏、磯貝保博氏に心からお礼を申しあげる。

昭和四十五年五月十五日

著者

目次

表紙写真 那智滝図(根津美術館蔵)

はしがき

第一編 東大寺炎上……………1

はじめに……………3

一 東大寺建立……………4

二 大佛のみ首落つ……………8

三 炎上……………15

四 再建(その一)……………18

五 再建(その二)……………24

六 再建(その三)……………31

七 鎌倉の大佛……………39

八 再度の炎上……………44

九 方廣寺の大佛……………52

十 再度の復興……………58

むすび

第二編 富士山記……………65

はじめに……………67

一 北村透谷「富嶽の詩神を思ふ」……………70

二 内村鑑三「信仰座談」……………74

三 野中至夫妻のこと……………77

四 富岡鉄斎「富士山図」……………82

五 徳富蘆花「富士」……………87

六 夏目漱石「三四郎」……………90

七 谷川徹三「感傷と反省」……………94

八 (戦後) 出隆と・S・カンド……………97

第三編 花山院とその系譜……………101

はじめに・一 血縁・二 側近の女性・三 政治的環境・四 出家(その一)・五 出家(その二)・六 遍歴(その一)・七 遍歴(その二)・八 転落(その一)・九 転落(その二)・十 肉親(その一)・十一 肉親(その二)・十二 狂気と天才と(その一)・十三 狂気と天才(その二)・補遺

配所の月……………166

花山の跡を追うもの——高倉院と光厳院と……………189

前編 高倉院のこと……………189

後編 光厳院のこと……………202

陽成院について……………221

第四編

峠とうげと岬みさきと……………23

はじめに……………233

一 「古事記」における……………234

二 「平家物語」における……………241

三 「太平記」における……………250

附編一 民族生活の体験と内心の表現……………261

附編二 回帰と前進と……………270

(寄稿)

わが生涯のともしび(黒上正一郎先生の思い出)

佐賀大学教授 副島羊吉郎…277
310

第一編 東大寺炎上



伝 聖武天皇宸筆

第一迎 東大寺炎上

はじめに

ここでは東大寺そのものの歴史を描こうとするのではない。それが同時に我国の歴史のうつりかわりとからみ合っているところ、すなわちカメラを東大寺に向けながら、その背景である国史そのものの変化を写しとりたいのが主意なのである。――

南都東大寺大仏殿が建立された聖武朝は、大化改新に発足した律令政治の絶頂期である。大化以前の時代を一言にして何と呼んでいいかわからないが、(仮に臣連政治の時代と名づけてもいいが)その時代は、応神仁徳朝より雄略朝に至るころが最盛期であった。それは巨大な応神、仁徳帝の墳墓をモニュメントとして我々に遺している。しかし、それより凡そ百年にして国情はいちじるしく変貌をとげた。欽明朝に於いて任那みまな日本府亡びて、我が国が半島に足場を失って後退したことから、仏教が半島から公式に伝えられ受容したことは、偶然の出来事ではなくして不可分の関係に於いて考えられねばならない。幕末に黒船の威力に閉口してヨーロッパ文明をむかえ入れたと同じことである。それ故に、それからの我国の大陸文明移

入の努力は国威の恢復とつねに結びつけられた。律令制度の整備につくすところ甚だ多かった。天智帝が、同時に半島に対して積極的に出られたことは当然であった。しかし、白村江の海戦に敗北したことは、半島へカムバックするのぞみに終止符を打ったに等しかった。大陸の唐を背後に持つ新羅には到底歯がたたぬことを身にしみて知った。この日からであった、我々日本人に宿命的な民族劣等感がうえつけられたのは、三国一の大伽藍を誇称した大仏殿造営の事由は、この歴史的背景なしには理解されない。つまり自己劣等感の反発として、世界に於ける自己の優位をかちえる何か偉大なものを自己の内に打ち立てたかったにほかならない。

一 東大寺建立

東大寺大仏の開眼供養は天平勝宝四年（七五二）四月であるが、延暦八年三月に造東大寺司が廃されるまで四十年間たえず造作がつづけられ、その間一日平均三百余人の職人がここに働いた勘定になるといふ。これ丈の大がかりな事業を可能ならしめたものは、もとより天皇を頂点とする律令制全体主義国家体制であった。そして、この律令制そのものを産み出し強行させたのは、当時の国際関係であった。ところが、この全体主義国家体制は軍国主義的意

凶から一転して、それとはまるで正反対のものを目指したようだが、事實は、当時の国際情勢に適應した一種の国防措置として為されたものであった。

天平廿一年（天平感宝元年）二月に、陸奥国から始めて黄金を貢進したよろこびの祝典を、ルシヤナ仏の前に挙げたときの詔に

「種々の法のの中には仏の大御言し國家を護るがた（ため）には勝れたりときこしめして、食す国の天下の諸國に最勝王經を坐しめ、ルシヤナ仏を造り奉る」

とあり、又古来より武を以って仕えて来た大伴、佐伯両氏の名を特にあげて此上の忠勤を期待する旨を述べていることによつても、国分寺を国々に配して最勝王經を讀誦させ、総国分寺ともいうべき東大寺に本殿として大仏殿を造立した真意が何にあつたかはうかがえる。特にかの宇佐八幡がここに絡んできていることは、その有力な証拠となるように思われる。天平宝元年十二月、宇佐八幡大神の託宣あつて、その禰宜たちが入京、折から造営中の大仏を拝したことがあつた。此の時の詔に去る天平十二年に河内国知識寺のルシヤナ仏を拝した節、朕も之を造り奉りたい念願を抱いたが、果しえないでいたところ、宇佐八幡の託宣があつて必ず助力して成就せしめんとおぼしめしを拝したが、今やその通りになつたことは感激にたえない旨を述べている。國家非常の際にこの神が國を護るといふ信仰は、すでにあつたものと考えられるのである。そして大仏造立がこの神に祝福されたといふことは、取りも直

さず、この仕事が国家守護ということとその本義としていたことを物語るものではないか。

要するに聖武帝の大仏造立の事業は、主として当時の国際関係に於ける我が国の地位という点から理解されなければならぬのである。外からの圧力に反発して自己の優位をかちえたい一心からそのような効験を与えてくれるものとして、怨敵退治のコーランとして最勝王経を掲げ、守護神として自己を障礙するものなき光明の主体たるルシヤナ仏を仰いだのである。つまり大仏の大きさは異朝の脅威に対する反発の大きさなのであった。一般に奈良仏教の特色として国家的色調のつよいことが言われているが、それは対外関係に由来するところが大きいのである。帝都が平安京にうつってからは、叡山や東寺が鎮護国家の道場として東大寺と併存するようになり、むしろそのお株をうばうこととなったが、仏教に国家的任務が結びつけられたのは、この対外的緊張がまだ継続していたことを示すものである。大正以来の空気に育った我々には意外なほど、我々の父祖は、半島に対する妄念にたえずつかれていた。それは実に明治のはじめまでつづいたのである。いま奈良朝から平安朝にかけての二、三の例をあげると――

天平二年二月に遣新羅使が帰ってきての報告に、「新羅国、常例を失ひ使旨を受けず」とあった。そして朝廷では緊急会議を召集して諸臣の意見を徴した。そして四月には、使を伊勢神宮、大神社、筑紫の住吉、八幡二社及び香椎宮に差遣して「新羅無礼之状」を奉告させ

ている。無念で仕方がなかったらしい。天平勝宝六年帰朝した第九回遣唐使大伴古麻呂は、彼地に於て正月朝賀の際に、新羅と席次を争って、辛くも上位を占めた苦心談を報告している。平安朝になってからも、仁明天皇の承和九年九月（八四二）に、大宰大貳藤原衛の呈出した上奏文によると、

「新羅の朝貢はその由来久しいが、聖武帝の代から聖朝（当代）に至るまで旧例を用いず、常に奸心をいだいて居り、商賈に事寄せては国内の様子を探って居る。方今民窮し食乏しいとき、万一の事あらば如何にして之を防ごうか」

と言つて、この際思ひ切つて鎖国すべきことを提言している。之に対して、政府はそれは「不仁」あるとして許諾は与えなかつたが、新羅に対して戦々兢兢たる当路者の内心をつたえている。

又清和天皇の貞観八年（八六六）には、肥前国の擬大領山春永なるものが新羅人某と結托して対馬を占領しようとして計画したという。このような不安の日々がつづいて、翌九年の五月廿六日には、四天王像一体宛を伯耆、出雲、石見、隱岐、長門の国々に下し、これらの国々は新羅に近いから他国にましてきびしく警戒せねばならぬによつて、この尊像をまつり最勝王護国品を供養して賊心を調伏し災変を消却するように、と国司に下知した。このように、新羅に対してすらすらたえずおびえていたものが、大陸の唐に対してどれほどの威圧を感じていた

かは、いうまでもあるまい。こうした国際的な感覚をぬきにしては、東大寺大仏造立の意図は、正当には了解されないことは、くどくど言わなくてもよいであろう。丁度、聖武天皇のころがこの国際関係の緊張していた絶頂でもあったのだ。それは平安までつづいたが、実はすでに奈良朝の終り頃から漸く国際情勢に変化が起きていたのである。それがはっきりとした形をとったのが、延喜七年（九〇七）の唐朝の滅亡（五代の世となる。）であり、聖武朝以来交渉のあった渤海国（ぼくわく）の、延喜四年に於ける滅亡であり、そして承平五年（九三五）の新羅の滅亡（高麗之に代る）であった。すなわち、平安朝の初期僅か三十年に足らぬ期間に、それまで我国と関係した三国みな亡んで、我が国は、長い緊張状態から一気に解放され弛緩してしまつた。そしてこの時期は、国内においては丁度藤原全盛時代に移行する時期に一致する。そして藤原氏の全盛が数百年の長きにわたつたのは、この国際的な条件が多く与あずかっていることは、徳川三百年の泰平と同じである。

二 大佛のみ首落つ

このような時代の転機を身をもって暗示するかのようには、文徳天皇の斉衡二年（八五五）五月二十三日、大仏の首が自ら落下した。天平勝宝四年に開眼供養が行なわれてから、凡そ

百年目である。「愚管抄」は

「此御時、東大寺大仏の首すずろに地に落ちたりけり」

と記している。後年「方丈記」には、

「昔齊衡のころとか、おほなみふりて、東大寺の仏のみぐし落ちなど、いみじき事どもはべりけれど、なほこのたびにしかずとぞ」

とあって、大地震で落ちたように記しているが、当時の記録にはその事実は見えない。たえず地震のある国柄だから、それ以前の度々の地震がこの結果を招いたといえよそれまでだが、現象的には「すずろに」落ちたわけである。そして丁度此のころに歴史上の転機を見出すことは、すでに常識であって、新井白石が、文徳帝、幼年の皇子（清和帝）を皇太子に立ててより政權下に移るに至った、と述べた（読史余論）ように、藤原氏のヘゲモニー掌握の基礎が置かれたのが、このころであった。そして律令政治はようやくその実を失い、莊園が、その地歩を固めてきていた。「三代実録」元慶二年（八七八）二月十五日の条に、五畿内に於てすら去る天長五年（八二八）以来五十年に及んで校班の事は行わず、従って死後の人徒らに口分田を受ける反面、壯丁は少しも田を受けない、と見えている。天長五年は、齊衡二年より二十七年前であり、元慶二年は二十四年後である。

又、承和六年（八三九）九月に出た詔によると、諸国国分寺に於いて毎年正月に行われるこ

とになっていた最勝王経読誦等の行事が近來なおざりにされているので自今以後は、国分寺にて行なうを停めて、政廳にて之を修することにすると云っているのは、聖武朝以来の国家的重要行事がその精神を失って、朝廷の年中行事に形式化されたことを示すものではないか。時代のうつりかわりは、今や何人の目にもおおいがたい。藤原氏の氏神たる春日神社に勅使を差遣するならわしも、此頃にはじまったという。そしてその氏寺たる興福寺のいわゆる寺法師は、叡山の山法師と共に、天下を我がもの顔に左右する勢力となつて行つた。東大寺も亦この勢いの外に在るものではなかつた。鎮護国家を任とするものが、挙げて派閥的勢力と化したわけである。——こうした時勢を前ぶれるかのように、大仏の首は自ら地に落ちたのである。

「日本靈異記」には、聖武天皇の御代に奈良の或る寺の観音像の首が故なくして落ちたが、翌日になって見るといつの間にか元におさまっていた、と云う話を伝えているが、この大事の場合にはこの奇蹟は起らなかつた。この不祥事は、聖武帝の鎮まります佐保山陵及び宇佐八幡に奉告され、直ちに修理を加えるべき由誓約された。この修理工事の最高責任者たる修理東大寺大仏司檢校に就任されたのは、真如法親王であつた。この方は、平城天皇の第三皇子高岳親王と云われた方で、後年印度に赴かんとして今のシンガポール附近で中途にたおれた。天平の日の「若し人の一枝の草一把の土を持ちても、像を助け造らんと請願する者あら

ば恣ほしいままに之をゆるせ」との精神をうけついで、今度も、国家の支出する経費だけで事をすませるのは弘済の本願に背くから、天下に命じて一文銭一合米を論ぜず、各人の力の多少にしたがって協力さすべきである、との方針ですすんだが、これに応ずるものは少なかつたらしい。翌年五月に再び使を佐保山陵につかわして工事のはかどらないことをお詫びせねばならなかつた。ようやく出来上つたのは、これより五年目の貞観三年正月のことであつた。そしてこの三月十四日に開眼供養がいとなまれた。この日、大仏殿第一層の上にステージを設け、舞人が天人天女を模して衣裳をひるがえして舞いおどり「音伎空をさわがした」といふのは、伝来の伎楽雅楽などとちがつた、一種のレビューが新規に演出興行されたのであろう。観覧の貴賤士女あたりにみちて、身動きもならない盛況であつた。又、大仏の首をもと通りに直したのは、齋部文山という「寒素より出で巧芸を以て知られ」た者であつた。この仕事はむずかしい技術を必要とするので適任者がなかつたが、彼はロクロの術を究めていて、雲梯の機を構え断頭を引揚げ、胴体に継いだが、ピタリとおさまつて寸分の狂いもなかつた。この時彼は年三十であつた。(以上「文徳、三代実録」による。)

大仏の首はもとにおさまつた。しかし世は昔にはかえらなかつた。貞観のころより約百五十年、藤原氏の全盛は道長に至つて極点に達した。そして藤原時代の栄華を集中的に具象化

したものと、道長の法成寺がまばゆい光をほしいますまにした。そのかがやきの前には、さしもの東大寺大仏も圧倒されるように思われた。「大鏡」に

「あめのみかどの造り給へる東大寺も仏ばかりこそは大きにおはしますめれど、なほこの無量光院にはならび給はず、まして他の寺々はいふべきにあらず」

といっている。御本尊の図体が大きいだけで立派さは比べものにならないというのである。法成寺がはじめ無量光院と称されたのは、その阿弥陀堂たる無量光院がまず建てられたからで、これは寛仁四年（一〇二〇）三月二十二日に落慶供養が行なわれたものである。そして金堂は仲々の大工事で、それより大分おくれで、治安二年（一〇三三）七月十四日に落慶供養がいとなまれた。阿弥陀堂は、自己の現当二世の安樂を祈願するためのものであるろうし、金堂の本尊は大日如来で、それを取りまく仏菩薩の像と共にいずれも大仏師定朝の作にかかるものであるが、これによって仏法を住持し、国家を鎮護せしめんとするものであった。ここで道長個人と国家そのものとは、いずれが主で、いずれが従であるかのけじめはなかった。自己即国家であり、自己の安樂と国家のそれとは、全く混同されてしまっていた。実のところ法成寺本尊は大日如来でもなく、阿弥陀仏でもなく、道長自身であったのだ。彼は事実、阿弥陀堂を自己の起居の場所としたが故に、御堂関白とも法成寺入道ともいわれた。

このころ天下の莊園のなかばは、藤原氏の手の中にあつたといわれている。東大寺が律令制

の上を立てられたとすれば、これは莊園制をふまえて立っているのである。「榮華物語」に描かれているその造営ぶりによくそのありさまがうかがわれる。

「さるべき殿原とのぼをはじめ奉りて宮々の御封御庄どもより一日に五、六百人、千人の夫ごどもを奉る……只今は此の御堂の夫役、材木檜皮瓦かわちなど多くまゐらするわざを我も我もと、きほひ仕うまつる。おほかた近きも遠きも参りこみて品々かたがたあたりあたりに仕うまつる……」。

国司郡司も、官貢は怠つてもこの役にはおくれではならぬときびしく督促し、甚だしいのは、宮中の庭石を運び出して流用したといわれる。大仏の首を継ぐだけの事が円滑には行かなかつたのにくらべて、何という旺盛な動員力であろう。後年、兼好法師は無常のことわりを実物教示するものとして、この法成寺を例にとつて、

「御堂殿の作りなびかせ給ひて庄園どもおほく寄せられ、我が御族のみ御門の御うしろみ世のかためにて、行末までとおほしおきし時いかならん世にもかばかりあせ果てんとおぼしてんや、大門金堂など近くまでありしかど正和のころやけぬ。金堂はその後たふれ伏したるままに取りたてるわざもなし。無量光院ばかりぞそのかたとて残りたる。丈六の仏九体いと尊くて並びおはします。行成大納言の額、兼行が書ける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。法花堂なんどもいまだ侍るめり。これも亦いつまでかあらん。かばかりの名残

だになき所々はおのづから礎ばかり残るもあれど、さだかに知れる人もなし。さればよろづに見ざらん世までを思ひおきてんこそはかなかるべけれ……」

とのべている。前後凡そ三百年にわたる藤原氏の全盛は、無常の法則の例外でもあるかのよう思われたであろう。しかし、そこでも、矢張りこの法則は緩漫であっただけで、確実に己をつらぬいてやまなかつたのである。それにしても、藤原氏がとにかく長い間その地位を維持させたのは、主として国際関係が然らしめたことはずでに指摘したとおりである。外からの刺戟の欠除は、自己を分裂させ、新生命を生れ出させる機会を乏しくした。しかし徐々にはあるが、新しき要素は、内部から力づよくおのれを押し出して来た。すなわちそれは、武士の抬頭である。それは、ローマにとってのゲルマンであり、平清盛はいわばアラリツクであった。ルシヤナ仏、すなわち大日如来の象徴するいわゆるカソリシズムの世界は破綻して異端的な要素が露骨にうごき出してきたのである。彼等が歴史の本舞台に重要な役割を演じたのは、いうまでもなく保元の乱（一一五六）であった。そしてこの内からの新しいうごきと共に、外からも再び門戸をノックする音が次第につよくきこえ出した。それは、大陸の宋からのよびかけであった。内外からのショックを受けて、歴史のながれは大きな曲折を描かなくてはならなくなつた。かくして、南都炎上の日は来たのである。それは治承四年（一一七七）十二月二十八日のことで、天平開眼の日からおよそ四百三十年である。

三 炎 上

保元の乱を契機として時代の寵児となった平氏の天下は久しくなかった。それは二十年とはもたなかつた。高倉宮以仁王もちひとをいただいた源三位頼政をはじめ、諸国に反乱軍が蜂起した。まず手近のところから片附けてくれようというので、平氏は、高倉宮に味方した三井寺と南都興福寺に弾圧の手を下した。まず三井寺がその手によって炎上したのは、治承四年五月廿七日であつた。ついで南都も同じ目を見るべく予想された。しかし南都に対してはその勢威を憚つたか、その由緒に敬意を表してか、弾圧には手加減が加えられた。すなわち、清盛はまず瀬尾兼康をつかわして平和交渉をさせた。しかしきはい立つ南都大衆の、兼康の部下六十余人をとらえて頭をはねて猿沢の池のほとりにならべるなどの暴挙に、入道相国は勘忍袋の緒を切り、されば目にも見せてくれんとて、頭中将重衡を大将に、四万余騎の勢を南都にさしむけた。日頃大言壮語してみても、新鋭の武力には抗すべくもなく、奈良坂、般若寺二ヶ所の防禦陣地は苦もなく蹴ちらされ、平家勢は都内に突入せんとしたが、丁度夜になつて行動の自由がきかないので、照明のために、大将重衡の命令で在家に火が放たれた。吹きまよう風にあおられて猛りたけ狂う火焰に追い立てられ、力あるものは血路をひらいて逃亡し、

力なき老幼婦女は、大仏殿や山階寺（興福寺）に逃げ込んで焼け死んだ。

かくして名にし負う興福寺も、大仏殿も、一夜にして灰燼となった。三国にその威容をほこった大仏殿の焼けおちる壯観は、平家物語に目に見えるようにあざやかに描かれている。み頭は焼け落ちて地にころがり、御身は熔けくずれて山を為した。それは英雄の最後にも似て凄壯をきわめた。——南都全滅の報を受けた藤原兼実は、これをもって仏法王法滅尽しおわるかと歎き、天を仰いで泣き、地に伏してな哭く、と日記に書きつけている。藤原氏の氏寺たる興福寺をもこの戦災に失った兼実にとっては、悲しみは一重であった。かの道長が、寛仁元年に興福寺の焼亡したときに「若し命、明年に及ばば本金堂を作り奉るべしてへれば僧侶喜を成す」と大きいところを見せている（御堂閔白日記）のに較べれば、兼実の悲歎は、傾いてすでに久しいわゆる斜陽族の歎きを代表しているものにほかならない。そして王法も仏法も、民衆の内部にたちかえって再生しなければならなかった。それが鎌倉以降の歴史のながれを形づくっている。

話を事件の本筋にもどそう。——南都焼亡の張本人平重衡は、そののち一の谷合戦で捕虜となつて鎌倉に送られ、処分決定までの日を狩野介宗茂の保護監視の下に送っていたが、南都から戦犯の身柄引渡しへの要求があつて、その手に渡された。南都では、仏敵法敵として

鋸^{のこぎり}引きか堀首の極刑にも処すべきだとの強硬論が多かったが、老僧になだめられて、守護の武士に委^{まか}せて木津川のほとりで首を切った。南都大衆はじめ無数の人々が之を取り巻いて見物した。そしてその首は、かつて彼が放火を下知した般若寺の大鳥居に釘附けにかけられ、胴体は彼の妻が引きとって葬ったが、のちにその首も、東大寺再建の勸進に当った重源が中に入って、同じく妻の手にかえったという。一体南都炎上のことは、重衡が直接の責任者であるとはいえ、もとを質せば自業自得というべきである。仏に最も近いものが実は仏に最も遠かったのである。鎌倉に於ける幽囚の日に、えらばれて重衡の身のまわりの世話をした千手という女こそ、その名の示すとおり仏・菩薩が彼をすくうために形をかえてあらわれてきたのかも知れない。彼女は、まごころをつくして彼に仕えたが、彼の処刑後三年ほどして、彼のあとを追うように死んでいった。「吾妻鏡」文治四年四月廿五日の条に

「今暁千手前卒去（年廿四）其性大に穩便にして人々の惜しむ所なり。前故三位中将重衡参向の時不慮に相馴れ、彼の上洛の後恋慕の思朝夕休まず、憶念の積む所若し発病の因と為るかの由、人之を疑ふ」

とあるのは、心にしみるくだりである。重衡は殺されたとき廿九歳であった。（尊卑分脈）

四 再 建（その一）

南都の再建は間もなく計画された。東大寺に關しては、藤原行隆が造寺造仏長官となり、上醍醐の俊乘房重源が特に請われて勸進役に当ることになった。これは治承五年六月のことであつた。大勸進の職は、天平の時は行基がこれをつとめた。「源平盛衰記」によると、初め法然上人に白羽の矢が立ったが、上人が辞退したので、その推せんする重源にお鉢が廻つたのだという。重源は、自ら「南無阿弥陀仏」と名乗つたほどの念仏者であつたことが「玉葉」や「愚管抄」に見えるから、法然よりも年長ではあつたが、その熱心なファンであつたにちがいない。この念仏者が東大寺勸進職に就任することは、筋違いの観があるが、東大寺は一応華嚴宗の本山ではあつても、その特質上、超宗派的存在でもあつたからであらうし、特に仕事の仕事であるだけに、宗派とか、地位とかにかかわらず適任者がえらばれる必要があつたからでもある。 「玉葉」に、彼が洛中の諸家を廻つて奉加を請い、法皇をはじめ貴賤を論じないとあり、女院からは銅十斤、他の所では錢一千貫、或は黄金六兩という寄附を受けている記事が見えている（養和元年十月九日）し、又大仏殿の半作の屋根の下で大勸進説法を行ったとも云う（法然上人行狀繪図）。このように貴賤のわかちなく広く世間に呼びかけて寄進をつのるには、人心

に訴えるだけの力をもった人格が求められたわけである。天平の時に、かつては異端邪説をふれまわって民心をまどわす者として弾圧された行基が、大仏勸進にえらばれたのも、その感化力と実践力とが買われたからであらう。重源の人柄をつたえる話はいくつかあるが、「玉葉」に出ているところを紹介する。(寿永二年正月廿四日の条 兼実は、重源を招いて大仏鑄造工事の経過を聴取したついでに、かねて上人は三度も渡唐して(彼の旺盛な意力が察せられる)彼地の事情に精通していると聞いていたので、彼に種々彼地の様子をきいたこともあった。兼実は重源について「此の聖人の体飭詞なく尤も貴敬するに足るべし」と人物評をも誌しているが、これで見ると、ざっくばらんな男らしい人物を思わせる。東大寺はじめ彼の建立した寺院は少なくなく、又摂津の魚住・大輪田の両泊の修復をしているなど、社会的な実践力に富んでいたことがわかる。このような人物なくしては、東大寺再建は覚束なかつたであらう。

大仏そのものは、かなり早く出来上った。普通の史書には「吾妻鏡」にしたがつて、寿永二年四月十九日から同五月廿五日まで首尾三十余日で鑄造しおわったというが、「玉葉」を見ると、この翌年の寿永三年六月廿三日の条に、造仏長官の行隆が来訪しての話に、既に仏身(胴体の部分)は鑄終ったから来月中には完成するであらう、その後で減金を塗り、開眼のはこびに至る予定である、とある。之は「玉葉」の方を取るべきではないかと思う。——この大仏鑄造に宋人陳和卿が与つたことはよく知られているが、この人を引張り出したのは、あちら帰りの

重源で、この者は以前から我国に来ておって、南都炎上の頃には折しも帰国するつもりで九州に行っていたが、乗船の破損のため、度々渡航中止を余儀なくされて滞在していたのを、たまたま此度の事が持上ったので、重源に頼まれてその腕をふるうことになったのである。兼実はこのことを「神の助け、天の力なり」といたく喜び「世滅亡せんとなす、憑む所は只ここに在り、いよいよ勤慎を致して教化の淳素に反るをこひねがふべし」と云って、之を世直しの好機として期待している。（『玉葉』寿永二年七月廿四日の条）

その昔大仏の首が落ちたときには、大陸との交通も稀で、彼地から力をかりるわけにはいかなかったせいも、適当な技術者がいなくて困った。幸に隠れた有能の職人を見出してどうやら功を成したが、今は本場の技術者が乗出してきてくれたのだから、重源はじめ関係者が歓喜したのは無理がない。ところがこの翌年（三年）の正月五日に行隆が兼実を訪ねての話では、先頃重源上人のはからいで宋朝鑄師の外に河内国の鑄師を加えたのに対して、かの宋人は不快の色を示した。彼是なだめて今では気持を直した、という。完成を急ぐ心から、応援のつもりでしたほか他意はないことであろうが、この措置を不快がったのは、和卿が日本の職人風情（よせい）と肩をならべて仕事をするのをいさぎよしとしなかった気位の高さを語るものと、解して差支えあるまい。このような事例は、明治年間に欧米から来た各方面の指導者に

於いても多く見られたところである。一体に彼は仲々の見識を以って我方に臨んだらしく、再建成った供養の日（建久六年三月）に、彼を招いて感謝の意を表そうとした源頼朝に、「国敵対治の時多く人命を断ち罪惡深重なり、謁に及ばざるの由固辞再三す」という手厳しい挨拶をしたなど徹底したものであった。両者の中に立った重源は、之が為に立場がなくなつて一時姿をくらましてしまった。これほど氣位の高い人物が用が済んでも依然として東大寺に留り、その二十年後には、將軍実朝に会いに来て実朝の顔を見るや感涙を流し、「貴下は昔宋朝医王山の長老で、私はその時の門下生であった」と云い、あげ句の果に、実朝を宋まで連れ出そうとした後日談をのこしている。

少しく余談にわたつたが、さて、大仏の鑄造は完了した。それは、前に述べたように、「玉葉」の記事から推して寿永三年中のことであつたと思われる。この翌年文治元年三月七日に、頼朝が沙金一千兩を米一万石、上絹一千疋と共に重源に送りとどけ、東大寺修造の事に対しては殊に丹誠を抽んずべき旨の書状を南都に送つたことが「吾妻鏡」に出ている。「玉葉」によると、前に引いた寿永三年六月廿三日の条の行隆談話のつづきに、

「大仏の減金に使ふ金は諸人の施入が少々ある上に、頼朝一千兩、秀平（衡）五千兩奉加の由を承つてゐる」

と言つてゐるのを見ると、前々から重源あたりからの依頼があつて、頼朝も助力を約束して

いたであろうが、文治に入ってから、その三月には平家を壇浦に亡ぼして、彼の天下が確實になったので、進んで協力の手を差し延べて来たものと思われる。平家がひどい目にあわせた南都の復興に一肌ぬぐことは、天下の人心をうる所以であった。しかし、元来彼は平氏とちがって、院をはじめ南都北嶺などの既存勢力とはなるべく妥協する方針をとり、自己の脚下をまず固めるのに専念した。鎌倉時代は公武並立のデュアリズムの時代と云われるが、そのことが丁度この東大寺再建に於いて具象的にあらわれた。再建東大寺は公武合作であったわけである。

—話を前に戻そう。大仏はすでに出来上ったので、この文治三年（一一八五）八月廿八日にいよいよ開眼供養がいとなまれることになった。これには頼朝は顔を出さなかった。それどころではなかったのだ。平家はすでに亡んだが、今は義経や行家のことで頭が一杯であった。義経等の背後には後白河院がいるらしい。後白河院は東大寺再建の発願人であらせられる。頼朝は鎌倉から動かなかつた。又、かねてからこの仕事に深い関心をもち種々配慮していた兼実も、この日は顔を出していない。彼は後白河院とは何かにつけて意見があわなかった。摂関家をついだ者として、自家のお株をうばった院政そのものが第一面白くなかつたであろう。彼の弟で天台座主の慈円も、「愚管抄」で院政を目の仇にしている。それに院のよう

なエビキュリアンとは、性格的に肌が合わないということもあつたらう。彼と院とのこの間隙に目を附けて、頼朝は彼を京都操縦の手がかりとしようとした。それで文治二年三月には、頼朝の口ぞえで、彼は近衛基通に代つて摂政となり、氏の長者となつたのである。今度も、兼実はまだ塗金もすまないのに何もあわてて開眼することはないだらう、との異論を提出した。それが通らないで予定通り決行されたことが、彼の不参の理由ではなかつたらうか。

当日は雨が降つた。之について兼実は、「半作の供養、中間の開眼」が大仏の御意にかなわぬからだらうかと一応けちをつけながらも、儀式終了後に降り出した雨なので、「或はかえつて効験があつたとも言えようか、どちらともきめかねる」と、つまらぬ思案をしている。随分感情的になつたものだ。法皇みずから筆をとつて入眼されたことについても、波羅門僧正がその事に當つた天平の先例を持ち出して問題としている。何故之が問題なのか、その理由はわからないが、とにかく法皇のなされることは何でも気に喰わぬのだらう。なおこの日行つて来た者に様子を問い合せたところ、その人からは「昔にくらべて大仏の御面相は一定劣らしめ給うように拝見された」し又、「御面だけ金色で他の部分には及んでいない。」との返事だつた、と記している。しかし、後年彼は、南都に赴いて親しく拝観するに及んで、聞いた話とはちがひ、仏の相好そごうの神妙なるを見出したのであつた。

五 再 建（その二）

このようにしてどうやら大仏の開眼供養は済ますことが出来た。しかし、これからが大変である。大仏そのものも、まだ塗金が残っていて完成したわけではなく、更に、大仏殿建立という大仕事が全く今後に残されている。まず文治二年三月に、周防国が東大寺造営の料所に充てられ、重源が国務を管することになった。何故遠い周防国が指定されたかは、今は問題外とするが、ここから大きな材木を切出し、瀬戸内海を通じて大和まで運搬する労力は並大低ではない。その上現地の地頭どもは時を得顔に、協力を惜しむだけならまだしも、却つて種々の防害を加えるという有様であった。どうしても頼朝の威光を借りねばすまされぬところである。彼は事情を聞いておどろき、「精勤を致すべき由」を地頭どもに仰せ遣されたが〔吾妻鏡〕文治三年三月四日の条、この戒告は容易に徹底しなかつたようである。月日は流れて行くのに事は一向はかどらない。此の上は関東に泣きつくより手はない。「吾妻鏡」文治四年三月十日の条にのせている重源よりの書状に

「当時修造の事、諸檀那の合力を恃たまずば曾て成り難し、尤も御奉加を仰ぐ所なり、早く諸国に勸進せしめ給ふべし、衆庶たとひ結縁の志無しと雖も定めて御權威の重々に和順し



俊乗坊重源像（東大寺蔵）

奉らむか」

と云っているのが、よくそのことを物語っている。この申し越しに対して幕府は、「東国の分に於ては地頭等に仰せて御沙汰せしむべき由」

を返答した。しかし幕府は、一応のお附合いはするものの、全面的に応援するまでには到らなかった。たとえば材木搬出に関して協力を院から依頼があっても、婉曲にことわっている位である。ただ周防の守護職である佐々木高綱は、職務柄当然でもあろうが、彼の尽力はお役目以上の真

剣なものがあった。それで後に幕府から「汝軍忠を竭すのみにあらず、已に善因に赴かん」と尤も神妙」と表彰された。(文治五年六月廿七日の条)——頼朝の頭は依然義経の上に向けられていた。義経は文治三年の春頃には奥州の秀衡のところに行っていたらしい。これは頼朝にとってゆゆしい事であると同時に、もっけの幸でもあって、目の上のこぶである義経・秀衡を一網打尽にするチャンスを与えたのであった。

当時、白河以北外ヶ浜までほとんど秀衡の支配するところであった。かつて平安朝初期には、坂上田村麿のような英傑が出て、奥州の大部分はやっと中央の号令に服するようになったのだが、さきに述べたように、中期以降国家権力の衰弱するにつれて離反するに至った。それは朝廷の手ではどうにもならなくなったので、かの源義家を煩わさねばならなかったのは、よく人の知る通りである。かくしてその末期に到っては、さながら独立王国を形づくっていた。秀衡はその国王であった。京都と鎌倉と平泉と、いわば三つの世界が存在していた。行隆の談話にあったように、東大寺に寄進する沙金が頼朝一千両に対して、秀衡は五千両とあるのが、其の頃の形勢を端的にあらわしているのではないか。奥州は言うまでもなく沙金の本場であり、天平創建の日には、此の地からはじめて金をもたらしただことが、帝みかどをはじめ上下を歓喜させたものであるが、その沙金も、今は平泉の中尊寺にはふんだんに使われても、京都の自由にはならなかった。

文治二年八月中頃のことである。頼朝が鶴ヶ岡八幡宮に参詣のみぎり、社前をうろつく老僧が目にとまった。呼びとめて素姓を尋ねさせると、それは西行法師であった。彼は重源上人から頼まれて東大寺修造用の沙金を勸進せんが為、奥州に赴く途中であった。彼は、陸奥守入道（秀衡）とは同族関係にあるので、そこを見込まれてこの役目を頼まれたのである。西行はこの時にはもう六十九歳という高齢であったが、いのちあつて二度越ゆべしとも思わなかつた小夜の中山を、再びこえてはるばるみちのくまで出かけていったのである。こういう老体を煩わしてわざわざお願いに上らせなければならなかつたこの奥州は、頼朝の力をもつても簡単には処置できなかった。しかし、是が非でも早晚何とかしなければならぬ。秀衡入道に義経、役者は揃っている。彼が気が気でないのは無理はない。彼は院をつついて、その方から秀衡をとつちめようと図り、そのためには、院に利害関係のある事柄を持出すのでなければならぬと考へた。それで第一には、先に清盛のために奥州に配流された院の近臣、前山城守基兼を秀衡が抑留して京都に帰還させないのに抗議を申込むこと、第二には陸奥からの貢金は年々減る一方で、大仏減金で巨多の金が入用の際、三万両ばかり進上するよう請求すること、この二ヶ条を院に申し遣ると、院庁ではこの通りの下文を陸奥国に下したが、頼朝はこの使者に自家の雑色沢方なる者を同行させ、この機会に彼地の動静を探らせたい。やがて奥州からの回答が、頼朝のこれに対する意見と共に院にもたらされた。頼朝の意

見は

「秀衡は院宣を重んぜず何ら恐れる色もない、仰せ下されたかの両条共承諾しない。此上は重ねて御使を下して貢金等を召されたがよい。」

ということであったが、秀衡の申状は

「基兼はあはれみこそ掛けてやって居れ、抑留ということは決してない。本人に帰還の意志がないから帰さぬまでのこと、又、貢金三万兩の件は過分の請求である、近年商人多く入境し、沙金を売買するので大略堀りつくしてしまった。それで手に入るに随ってお送りするようになりたい」

という趣であった。

——これに対して院では、頼朝の勸告通り再度使者を下した模様である(以上「吾妻鏡」文治三年九月四日、「玉葉」同九月廿九日の条)。この交渉はどういうことになったかはわからぬが、いずれにせよ、秀衡の目の黒い間は、頼朝の思うようにはならなかったらしい。

しかし、この後いくらもたたないで、秀衡は後に心を残して文治三年十月廿九日に死んでしまった。これまでは頼朝は用心して専ら院の方から手をまわしていやがらせをやって時機をはかっているといった態度で、奥州と鎌倉との間は、いわば「冷い戦争」の状態であったのであるが、今は積極的に挑戦した。秀衡の子泰衡は、義経を殺して宥和を請うたが、それ

はかえって頼朝をつけ入らせるに役立つただけだった。彼はしきりに泰衡追討の宣旨を要求した。しかし、朝廷では

「今年は大神宮の上棟、大仏寺（東大寺のこと）の造営、彼是計会す追討の儀猶予あるべし」

との生温い反応しか示してくれない（『吾妻鏡』文治五年六月廿四日の巻）。幕府の古老大庭景能は、こうした朝廷の態度に憤慨して

「軍中は將軍の令を聞いて、天子の詔を聞かず」

と放言したのは、その実は幕府そのものの意中を吐露したものにほかならない。果然頼朝は勅許をまたず、七月十九日に奥州征伐に発向し、九月には遂に泰衡を殺し、凱歌を奏し多年の溜飲を下げた。

こういうわけで、この数ヶ年間頼朝の関心は主にほかに向いていたから、彼の助力はあるにはちがいがなかったが、決定的な力となるには程遠いものであった。依然として困難はつきまとっていた。さすがの重源もサジを投げたくなって、その事を兼実にもらし、兼実が極力之を制止したこともあった（『玉葉』文治五年八月三日）。——それでもどうやら建久元年（一一二〇）の十月十九日に、上棟の儀を行なうまでに漕ぎつけた。此の日、後白河法皇がみずから棟木の

綱を引かれた。丁度この頃、頼朝は上洛の途中にあつた。と云うのは、かねて法皇から、今度の上棟式に参列かたがた上京するよう招待されていたものの、諸国洪水の折柄とて、どうしたものかためらっていた。しかるに、法皇からは非思ひ立って出て来い、との催促があつたので、急に思ひ立って、政子や頼家等を同伴して上洛の途に上つたのであつた〔吾妻鏡〕建久元年九月十五日、二十日の冬。と云うところこの上棟の日にはおくれ十一月七日、天気晴朗なれど風の烈しい日に入洛し、六波羅の宿所に入った。法皇はひそかに御車に召されてこの一行を見物された。頼朝は参内し参院した。〔古今著聞集（卷十二）〕の伝える話はこの際のことであつたらう。すなわち——

「東大寺供養の時鎌倉右大将上洛ありけるに、法皇より宝蔵の御絵共を取出されて、関東にはありがたくこそ侍らめ、見らるべき由仰せつかわされたりけるを、幕下申されけるは、君の御秘藏候御物に、いかで頼朝が眼をあて候べき、とて恐れをなして一見もせず返上せられければ、法皇は定て興に入らんと思召したりけるに、存外にぞ思召されける。」

と云うのであるが、頼朝或いは幕府の京都に対する態度そのものを暗示しているわけで、表面は卑下しているようで、腹では何クソ、とうそぶいている、所謂慫慂無礼いんごんむれいというのである。——彼は又滞京中の一日、兼実と会談した、頼朝は兼実に言つた。

「平素表面では貴方にヨソヨソしくしているが、実は決しておろそかに思っているのでは

ない。法皇に聞えるとうるさいのでそうしているのです。当今（御鳥羽天皇）はまだ幼少で何の事はない。貴方は今盛りのお年だし、私に幸い運があるなら、政の淳素に反る望みのないわけはありますまい。」

と。後白河法皇の目の黒い間は仕方がないが、そのうちに誰憚ることなく二人で大いにやりましょう、と云った所である。兼実は四十三歳、頼朝は一つ上の四十四歳、共に男盛り働きの盛りの、野心勃勃たる年配であった。そして此の時十一才の子供に過ぎなかった後鳥羽天皇が、彼等の今の年配になられるや、かの承久の事変をひきおこすとは、頼朝の予想だにできなかったことであらう。

六 再 建（その三）

大仏殿建立の仕事は引きつづき遅々としてではあるが、た倦まずにつづけられた。この時分には、頼朝も積極的に力を借すようになっていた。院から、地頭の輩を催して柱材を搬出させるべく依頼して来たのに対しても、先には之を断わったが、今度は快く引受けて佐々木高綱を奉行として畿内西海の地頭等に分担させてやらせている。——ところがここに一大事が起った。というのは、後白河法皇がなくなられたのである。それは建久三年三月十三日の朝の

ことであつた。保元三年以来三十有余年の長きにわたつて院政を聴かせられ、世のかわり目の縮図のような生涯であつた。兼実も、さすがに哀悼の意を表しているが、なお「只恨むらくは延喜天曆の古風を忘れたることを」と止めの一言を忘れてはいない。法皇の崩御は、東大寺にとつては再建の支柱を失つたも同然で、さなきだに苦しいこの仕事に一大支障を来たしたわけである。

ここで、かの文覚上人が関係することになる。これで当代知名の士がほぼ出揃つた形である。重源は、頼朝とは別懇の間柄である文覚を、自分の片腕に頼んで大いに馬力をかけてもらおうとしたのである。文覚は、重源の意のある所を幕府に通じその許可を乞うた。それは、故法皇が生前糧米二万石を寄せられたが、国司どもは利潤を貪り、一向に取計らつてくれな。此上は関東より指図してもらはうほかはない。そこで故院の分国の内、備前国を文覚房の管理に委ね、その所済(年貢)を彼の寺の営作の料に充てるようにしたいから、その旨を京都に言つてやつて欲しい、という事なのであつた(吾妻鏡「建久四年正月十四日」)。この願いが頼朝に聴きとどけられたことは、「吾妻鏡」の同年三月十四日の条に見えるが、そこには「文覚上人播摩国を知行して奉行せしむ可きの由」とあつて、前に備前国とあるのと合わない。しかし、これは問題外として、とにかく文覚が一国を管理して重源の仕事を手助けすることになつたわけである。然るに、とかく問題を起しがちな彼が、ここでも一騒動ひき起しているのは、文覚

はどこまでも文覚だといわねばならない。すなわち、右の決定があつていくらも経たぬのに、彼がその所管の国領をば、自分の弟子とか檀那とか称する者どもに勝手にわけ与えていふとの評判が立った。幕府から梶原朝景等をつかわして問責したところ、彼は

「自分は熱心に再興の事につくそうとしているのだが、国領の者共がよこしまを企み、自分の指図に従わぬので、それに対抗するために、自分の親族筋のものを兵士として入り込ませたのを根にもつて、あらぬ事を言い立てたのであろう。そんな手合は今生でも禄なこととはなし、後生には無間地獄におちて永久に浮ばれまい」

と得意の毒舌をふるつた(建久四年六月廿五日及七月廿八日の条)。事の真相は、どうともわかりかねるが、文覚一流の、人を人臭くも思わぬ傍若無人の遣口が人々の反感を挑発し、騒動の種を蒔き易いことはうたがいない。

建久も五年になつた。苦しい長い道中ではあつたが、しかしやがてゴールは目に見えて来た。いま一いきという所まで辿りついた。頼朝は、もう外部からの援助者ではなくて、主催者側に移つたかのようなようであつた。彼は、大仏光背の塗金用に沙金三百三十兩をその製作者大仏師院尊に送つたり、周防国よりの材木切出しについて佐々木高綱を督励したり、大仏を取巻く二菩薩四天王の像を御家人に分担造立させたりした。(観音は宇都宮朝綱、虚空蔵は穀倉院別当親能、増長天は畠山重忠、持国天は武田信義、多聞天は小笠原長清、広目天は梶原景時、又戒壇院の當作は小山朝政

かくしていよいよ落成供養の日は建久六年（一一九五）三月十三日と決まった。そこで二月十四日に頼朝は部下の精銳を引きつれ、夫人政子及び令息、令嬢同伴にて威風堂々上洛の途についた。彼は大仏開眼供養には参加しなかつたし、又大仏殿上棟の日は、再度の催促でやつと腰を上げたが間に合わなかつた。それなのに、今度は大きな顔をして乗込んで行つた。そしてこの時が、彼の「生涯の最良の日」であつた。——三月四日に近江の瀬田橋に差しかかつた。橋の近辺には叡山の衆徒が群集して待ち受けていた。頼朝は、このうるさ方にどう挨拶をしたものかとしばし迷つた。が、やがて橋公業を召してその応待を命じた。公業は衆徒の前にひざまず跪き、

「鎌倉將軍東大寺供養結縁のため上洛する所であるが、このように各位が群集して出迎えられるとはどうしたわけか、甚だ恐縮に存ずる。但し武将の法として斯様の場合に下馬の例はないによって乗打御免を蒙むる。お咎め下さるな」

と言ひ捨て、先方の返答も待たずに、さつきと行列をやり過してしまつた。頼朝が彼等の前を通過する折「弓を取直し聊かいささ気色す」と、皆平伏したという。建久元年上洛の節には、叡山の連中が頼朝一行を出迎えたことは、別に記されていないのに今日此の事あるのは、こ

の時には、頼朝は征夷大將軍になっていたので、一応の礼儀としてここまで出張って来たものと思われる、ただ頼朝の顔見たさに弥次馬的にあつまっていたのではなからう。頼朝が彼等への応待に気を使っていることによつても、そのことは察せられる。そして何かあらでもあれば、物笑いの種にしようとの期待もあつたろうが、それを裏切つて、その応待が格にはまつて、立派であつたのに、すっかり兜をぬいだのであつた。——三月十二日、供養の当日は朝のうちは晴れていたが、午後になつて雨が降り出し、その上に地震さえ襲つた。「愚管抄」に

「武士等我は雨にぬるとだに思はぬけしきにて、ひしと居かたまりけるこそ、中々物見せられん人の為にはおどろかしきほどの事なりけれ」

とあるが、いわば敵地に乗り込んだ武士どもの緊張した面持をあざやかに写し出している。さて、この式場でも瀬田橋に於けると同様の事態が生じた。——頼朝が堂前の庇ひさしに著座したあと、拝観の衆徒等がドヤドヤ門内に入つて来た。その際、警固の随兵との間にイザコザが起つた。梶原景時が之を取鎮めに出かけたところ、彼の態度が無礼だといふので衆徒等はいきり立ち、あわや相互の間に乱闘がはじまりそうになつた。これを見ていた頼朝は、小山朝光を召して鎮定方を命ずる。朝光は手を大床の端にかけ、立ったままの姿勢で主人の命をうけたまわつたのに、衆徒に対しては、その前に跪いて敬礼し、「前右大将家の使者」と称

した。その礼儀の鄭重さに氣をよくした衆徒は、とにかく彼の言い分を聞こうと、ガヤガヤいうのをやめた。朝光は、供養の日をむかえるまでの頼朝の功勞や、今日こうして遠路馳せつけたその志を述べた末に、

「我々何もわからぬ田舎武士すらこの日に遭ったことを喜んでゐるのに、物のわかつたあなた方僧侶が好んで騒ぎをひきおこすとは何事であるか、わけがあるなら承りましょう」と、すかしたりおどしたり、寸分のすきもない口上に閉口して、数千の大衆はすっかり静かになった。田舎武士のさばっているのを面白からず思っている者共が、小姑こむすこの嫁いびりのように、些細の事に言いがかりをつけてうっ憤晴しをしようとしても、正面から堂々と出て来られると一言もない。結局実力の前には、過去の權威も空威張りにすぎないことを暴露しているが、一方から考えると、今を時めく頼朝も、まだまだ南都北嶺等の旧勢力には相当氣兼ねもし、その扱い方には苦勞していることも注意すべき点であろう。――

このような意外なブローグはあったが、やがて天皇の行幸をむかえ、兼実以下の月卿雲客参列して供養の儀はとどこおりなく済んだ。――謡曲の「大仏供養」では、この日、悪七兵衛景清が頼朝をねらい、群集の中に紛れ込んでいたのを見咎められて逐電したことになるが、何に取材したものかは知らない。ただ、「平家」に同じような事件が見えているが、それは平家の侍まむら、薩摩中務家資という事になっている。或はこの話を景清に附会したのかも知

れない。「吾妻鏡」では、当日はこの種の事件はなく、再び京都に引上げて参内さんだいした所、御所の門前をうろつく怪しい人物をつかまえたことが出ています。平家が滅亡して丁度十年、彼の命をつけねらう平家の生き残りが出没するのは、あやしむに足りない。鎌倉に行つてまでは手が出せないが、いわば平家のホームグラウンドであった京洛附近には、平家の残党が世をしのんでいて、こういう機会に動き出すことは当然予想される所で、嚴重な警戒陣が張られて、彼等の行動を完全に封じてしまったのである。後年、將軍実朝が鶴ヶ岡社頭に暗殺された日の朝、大江広元がしきりに不吉な予感がするので、建久の昔東大寺供養に臨んだ頼朝の例にならつて、束帯の下に腹巻を著けたらどうか、と注意したというが、それなら警固を嚴重にして万一に備えたかといえばそういう形跡はなく、苦もなく実朝を殺さしてしまつた上に犯人を取逃しているのだから、話が全然合わない。頼朝をねらうものは外部にあつたのだが、実朝の仇は内部にいたのだつた。

頼朝此度の上洛は、後白河法皇という煙たい存在がなくなつていたので、すこぶるのびのびしたものであつたらしい。法皇在世中は、征夷大將軍になれなかつた位で、彼にとつて、法皇は頭の上のオモシであつた。兼実とも勿論会谈しているが、数年前兩人の間でひそかに話したことが意外に早く実現したことを喜び合つたことだろう。このごろは兼実も得意の絶頂にあつた。しかし、この翌年十一月には、源通親一派にしてやられて、一族失脚を余儀な

くされた。その年八月に、彼の女子である中宮宣秋門院の産みまいらせたのが皇女であったのにひきかえ、通親の養女、承明門院が十一月に皇子（後の土御門天皇）をあげられたのに勢づいた通親派は、この好機に、兼実一門を急に政界から追放してしまったのである。頼朝も結局之を何とも出来なかつたわけで、この事がすでに彼の威令の京都に徹底していないことを証示しているが、その後の京都の動きは、彼の意に反することばかりで、彼も三度上洛して何とかはつきり処置したいと考えているうちに、急に死んでしまった。それで、若しも東大寺供養がもう少し少しくれたとしたら、通親一派のうごきを看破して、上洛の機会に兼実とも相談して適当な手を打つたであらうが、併し此の時は、頼朝も兼実もこのような暗流には気づかず、いい気持ちで我が世の春を語りあつたにとどまるようである。

話は変わるが、任地にあつて終始再建事業のため熱心に奔走し、その功績は幕府の表彰するところとなつたほどの佐々木高綱が、出家をとげたのは実にこの建久六年のことであつた（堀田璋左右氏に負う）。彼の三人の兄（定綱、経高、盛綱）は、いずれも頼朝に随つて晴れの盛儀に参列していることは「吾妻鏡」にあきらかであるのに、此の日を最も待ちわびた筈の彼の場合には、却つてその点不明であるし、彼の出家は此の日の前か後かは判らないが、いずれにしても、東大寺完成を機会に出家したということだけは言えるように思われる。何故の出家か、

「源平盛衰記」には、頼朝が緒戦の石橋山の戦に敗れて逃走する際、高綱兄弟に危いところを助けられた嬉しさに、「今に天下を取ったら半分はお前にやる」と約束したのに、事成った後は、備前、安芸、周防、因幡、伯耆、日向、出雲七箇国を給ったに過ぎない。この違約に憤慨して頭を丸めて高野に入った、「善にも悪にも猛かりけるなり」とあるが、そのまま信用するわけにはいかない。しかしこの問題は主題から外れるのでこれ以上深入りはしない。

七 鎌倉の大佛

東大寺は兎も角立派に形は取戻した。しかしそれは既に積極的な使命の自覚は持たなかった。いわば東夷の輸血によって命脈をつないだのにすぎなかった。無論東大寺だけの事ではない。堂塔建立・經典誦誦そのものに意義が感ぜられなくなって行く世の中だった。鎌倉末期から南北朝の頃にかけてそれは、顕著な社会的事実となった。「沙石集」にも、はっきりこうした思想があらわれている。無住はこんなことを書いている。

——昔、三井寺が山門のために焼はらわれて没落した時、寺僧の一人が新羅明神（神仏習合で、これが三井寺の鎮護の神になっていたのだらう）に参って通夜したその夢に、明神がいかにも心地よげなのを見て、寺がこの悲境にあるのに、その守護神たるものが一体何としたことか、

といぶかしく思うと、いやそうではない、かような事のために真実の菩提心を起した寺僧一人あるのがうれしいのだ、堂塔仏経は財宝あらばつくりぬべし、菩提心をおこせる人は千万人の中にもありがたくこそ——こう仰せられるのをたしかに聞いて、この僧も発心するに至ったと。

それは無住に先立ってすでに実朝が

塔をくみ堂をつくるも人なげきざんげにまさる功德やはある

と率直に歌った新しい時代感情である。東大寺及びそれとほぼ同じ頃、落成した興福寺のため腕をふるった運慶一門の作品が、飛鳥以来の我が仏像彫刻（それは同時に我が彫刻のすべてであるが）の最後の光輝であったことも、決して偶然ではない。彼等のあと、伝統久しいわが仏像彫刻は生命を失ってしまった。彼等の作品自体に於いても、東大寺南大門の金剛力士像や興福寺北円堂の無著世親像などは、それまでに見られぬ新生面を示している。それは仏菩薩ではなくして人間そのものである。金剛力士は、風雨に打たれながら平然と部署についていた鎌倉武士そのもののシンボルであり、無著世親像の沈着剛毅の面魂は、熊谷直実や、佐々木高綱の出家姿をしのぼせる。歴史の動きは決して性急ではない。しかし確実に自己をつらぬくことを忘れない。人々はなお当分堂塔建立や仏経読誦からはなれられない。南都北嶺も根づよく生きつづける。けれども歴史の古い衣は一枚々々ぬぎ捨てられて行く。そしてつ

いに再び東大寺の炎上する日が来るのである。それまでには、しかし、まだ大分間^まがある。

建久六年三月に落成供養は行なわれたが、まだ全部が完成したわけではなかった。廊、門や、戒壇院、鎮守八幡宮等は、その後次々に造立された。そして建仁三年十一月二十一日、後鳥羽上皇親臨の下に総供養がいとなされた。治承炎上の日より廿三年目である。八年前の落成供養には威風四辺を圧して之に臨んだ頼朝は、すでにこの世の人ではなかった。「吾妻鏡」にも総供養に関しては何の記事も載っていない。頼朝在世中はまだ子供で彼の眼中になかった上皇も、今は廿四才の青年になっておられた。又、鎌倉においては、二代將軍頼家が伊豆修善寺に幽閉され、実朝が將軍職をついだのがこの年であった。——幕府の実権は北条氏の手に移りつつあったのである。この後鳥羽上皇と北条氏との抗争、それがいわゆる承久の変（二三二）となって破裂したのである。この結果については、述べるまでもあるまい。この時代はすでに言ったように、デュアリズムの世の中であった。公武併立、いわば二つの世界が、各々自己の存在を主張しつつ互にからみ合っていた。しかし、どちらかと言えば鎌倉は京都に対して下手^{したて}に出ていた。

この事情にいちじるしい変化があらわれて来たのである。鎌倉は最早や京都に気兼ねする必要はなかった。自己一存で何事も処理出来るようになった。北条泰時の貞永式目の制定は、

正にこの事実を公然天下に発表したものにほかならない。武家の世——これが歴史のすすんで行つた方向であつた。それは、北条政権がたおれても何ら変更されなかつた。承久より百年後の、かの元弘建武の朝権恢復運動は、その実は、武家同士の勢力争いに利用されたにすぎなかつた。——それはさて置き、泰時に至つて鎌倉は京都に対してはつきり自己の主体性をうち立てるに至つた。丁度そのことを象徴するかのように、鎌倉に大仏が立てられた。之は暦仁元年造営に着手し、五年後の寛元元年（二四七）の六月に出来上つたと云われる。この時は、阿弥陀の木像であつたが、その後十年を経て建長四年に、金銅の釈迦像に鑄直した。之が今日のこる鎌倉の大仏である（吾妻鏡）には釈迦像とあるが実は矢張り阿弥陀像である。「東関記行」に——

「由比の浦といふ所に阿弥陀仏の大仏をつくり奉るよしかたる人あり。やがていざなひてまゐりたれば、たふとくありがたし。事のおこりをたづぬるに、もとは遠江とよとうみの国の人、定光上人といふ者あり。過ぎにし延応の頃より関東のたかきいやしきをすすめて仏像をつくり堂舎をたてたり。その功すでに三か二におよぶ。」と云い、更に

「仏はすなはち兩三年の功すみやかなり。堂は又十二楼のかまへ望むにたかし。彼の東大寺の本尊は聖武天皇の製作、金銅十丈余の舎那仏なり。天竺震旦にもたぐひなき仏像とこ

そ聞ゆれ。此の阿弥陀仏は八丈の御丈なれば、かの大仏のなかばよりもすすめり。金銅、木像のかはりめこそあれども、末代にとりてはこれも不思議といひつべし。仏法東漸の砌みきりに当りて権化力をくはふるかとありがたくおぼゆ。」

と拝観の感想をむすんでいる。この文の作者は仁治三年に鎌倉をたずね、折から造営中の木像の大仏を拝したのであった。「吾妻鏡」には、この大仏建造についてはくわしい事は何も記していないが、この旅行者の感想は、幕府の意図そのものを代弁しているように思われる。即ち、東大寺大仏を念頭に置いて、それは他所のもの、こちらはこちらで「我が仏」を押し立てようとの魂胆なのであらう。仏法東漸——大陸より東漸せる仏教は奈良のルシヤナ仏となって天下崇敬の焦点に坐ったが、更に東漸の歩をすすめて、今は鎌倉深沢の里に阿弥陀仏と応現して衆生渴仰の標的となった。我々に親しい鎌倉の大仏は露坐しておられるが、「東関紀行」にあるように、当初は立派な堂舎に住まっていたが、幕府の滅亡と共に荒廢にまかせられたものであらう。応安二年（二三六九）九月三日の大風や、明応四年（二四九五）八月の津波によって大仏殿は破壊されて、今日見るような露仏となったのである。

八 再度の炎上

鎌倉幕府に代った足利幕府の世となって武家一統の世となった。幕府そのものが、歴代中央政府の所在地であった京都に置かれた。京都と鎌倉との対立は消え、京都と鎌倉とは武家に於て一つとなった。二つの世界は解消してしまった。三代將軍義満は伊勢參宮をし、又しばしば南都北嶺をたずねているが、之は朝廷はじめ南都北嶺の歛心を買うためではあつたが、他面から言えば、これらはすでに足利將軍のふところに完全に抱き込まれてしまつたのであつた。——しかし、足利幕府そのものは初めから安定したものではなかつた。と云つても、その不安定は、朝廷や南都北嶺によつてもたらされたものではなくて、それとは全く別のところに起因していた。すなわち、それはたえず下からの勢力に押しゆるがされてきた。いわゆる下剋上の時勢が到来したのである。それは、特に応仁の乱を契機として普遍的になつた。全国到るところ、春になつて草木の萌えいであるような新しいエネルギーが、地下からあふれ出た。そしてこの勢いの極まるところ、我が東大寺は、再度炎上の運命に見舞われなければならなかつた。

その前に、東大寺が碧眼紅毛のお客さんを迎えたことを記しておかねばならぬ。そのお客さんというのはルイス・ダルメイダである。彼は永禄八年すなわち一五六五年の復活祭のあと、京都を出て奈良の地を踏んだ。奈良に着くとすぐに松永久秀の志貴山城を訪れた。そして翌日興福寺を訪ね、春日神社を見たあとで大仏殿へ出た。以下和辻哲郎博士の記述（『鎖国』）による。――

「これは寿永修築の大仏で、今のとは形も大きさも違うものである。ダルメイダは、日本の建築が一目で寸法の解るものであることを説いたあとで、大仏殿を間口四十プラサ（約二九〇尺）奥行三十プラサ（約二八尺）と記している。しかしこの堂は天平尺で間口二九〇尺、奥行一七〇尺であったのであるから、間口のほうは精確であるが、奥行のほうが合わない。おそらく十一間七面の柱間を各四プラサと見積り、正面の柱間を十としたのに対し、側面の柱間を七と数え誤まったのでもあろうか。いずれにしてもこの堂は、唐招提寺の金堂を重層にして拡大したような、壮大なものであったはずである。ダルメイダはこの堂を取り巻く廻廊と、それに取り巻かれた庭との美しさを特筆しているが、この美しさの印象に大仏殿の印象が籠っていないはずはないであろう。大仏の大きさはさほど彼を驚かさなかつたが、立ち並ぶ九十八本の太い柱は彼に強い刺戟を与えた。日本のように開けた、思慮のある国民が、こんな壮大な殿堂を築くほどに悪魔に欺かれて、実は驚くほか

はない、と彼は感じたのである。」

さて東大寺の再度炎上は、永禄十年（一五六二）十月十日のことで、建久再建の時より三百七十年ばかり経過していた。下剋上というとき、そのチャンピオンとしてまず指を屈せられる三好・松永の徒の手によって、この炎上はひき起されたのである。すでに足利幕府が無力の存在となつて久しかった。將軍はあれどもなきが如くで、万事は幕府の重臣細川氏の支配にまかせられたが、それもやがて、その家臣三好長慶によつて棚上げされねばならなくなつた。將軍義藤（後、義輝と改む）は長慶によつて一時京都を追放されるありさまであつた。永禄七年にこの長慶が死んだ。そのあとは、いわゆる三好三人衆（三好日向守長逸、同下野守政康、岩城主税頭友通）及び三好家の長老松永弾正久秀が幅をきかせた。——彼等が親分長慶の遺志を貫徹させるべく、將軍義輝を室町御所に襲つて殺したのは、永禄八年五月のことであつた。將軍に弟が二人あつた。一人は北山鹿苑寺にあつた周髡で、これも同じ手に欺き殺された。もう一人は、後日將軍義昭となつた覚慶で、当時南都一乗院の門主であつた。彼の命もあぶなかつたが、家臣細川藤孝（幽齋）のはからいに危難を脱し、身を寄せる陰を求めて転々した末に、織田信長に取りついたことは人のよく知るところ。

三好・松永等は、義輝のあとに阿波公方義榮をもつて来る考えであつた。義榮は、義輝と

はマタイトコの間柄である。以下「足利季世記」によると、こうした仕事は事實的にはみな三人衆や松永のやったことにはちがいないが、一応長慶の養子義継（次）を主と仰いでやっているわけであるのに、義榮はそんな名義など頓着せず、ひたすら三人衆や、一族の三好笑岩（康長）等を徳として、彼等にばかり頭を下げ、若輩の義継など問題にしない。それが義継には面白くなくて仕方がない。そこで、いきおい三人衆と勢力を競う地位にある松永の力を借りて自分の存在を確かなものにしようとした。ここに於て、永禄十年卯月（四月）の頃から松永等は、公然三人衆に敵対行動を開始した。之に応じて三人衆は松永の執る大和多聞城を退治すべく、奈良に打ち入り、東大寺大仏殿に本陣を構えた。久秀は多聞城から打って出て、三好勢との間に毎日鉄砲の打合いが行なわれたが、ついに十月十日夜寅の刻、松永方から三好の本陣に夜討をかけたのが奏効して、三好方の敗北に帰した。この際、三好方で大仏殿のまわりに小屋を建て並べ、孤（こ）を張りめぐらしていたのに火が燃えついたが、急場の事とて火を消すことも出来ず、大仏殿に燃え移って焼いてしまった。「季世記」は、この顛末を――

「此のがらんは平家の悪行にて焼亡しけるを後白河院の御願にて頼朝公の再興なり、二百（二百のあやまり）余歳後今更兵火のために焼け失せける。此上は世も治ることなく乱れ乱れて建立する人もあるまじと歎かぬ人もなかりけり。」

と結んでいる。一説には、松永方に於いて故意に東大寺に火を放ち、其の火の明りを利して

敵を追い伐ちした、とも言われ（『南海通記』）、丁度平重衡が南部を焼いた事情そのままになっている。「季世記」の記事の方が信用されるにしても、結局同じようなものである。「南海通記」に「永禄の十の十月十日の夜奈良の大仏焼ける寅の時」という歌を記しているのは、寅の刻は午後の十時であるから、十の数字がならぶのに興じているのであろうが、たしかに記憶するに値する日時であったにちがいない。——久秀が奈良多聞城によつていた、と云うことが、東大寺焼亡を引きおこすに至つた直接の機縁であるが、このことは、南都そのものならずで彼のような新興の勢力に喰ひ荒されていた事実をまざまざと示しているものにほかならない。頼朝も大和には手をつけず守護を置かなかつた。北条泰時の時しばらく守護を置いたのは、さきに述べたように、承久の乱後幕府が他の世界に優位を示すようになったからであるが、それもしばらくして讓歩して廢止したのであつた。ところが今では長い特權に馴れたこの地方も、伝統や由緒など眼中にない、地下から盛り上つて来た連中にかかつてはたまらない。東大寺炎上に先立つて、既に元興寺、興福寺、西大寺等が、夫々土民の徳政一揆や一向一揆や土豪の合戦などのために、程度の差こそあれ、焼かれていたのであつた。南都ないし大和国は、もう衆徒のものではなくなつていた。法隆寺関係の永禄九年の文書によると、先頃多聞公（久秀）が法隆寺管下の市場商人を成敗し、その資財家宅を掠奪させ、市場は彼の配下の足輕によつてふみにじられた。にも拘らず衆徒は呆然と拱手しているばかりであつ

た、と云うことである（原田伴彦「中世に於ける都市の研究」）。久秀はこの時代のチャンピオンの随一であったのだ。

——この久秀は昔から史家の間には不評であった。主を殺し東大寺を焼いた逆賊であり、仏敵であると云うのである。後年彼が、臣従を契った信長に叛いたのは、或る時徳川家康が安土城に信長をたずねて来た折、久秀もそこに来合せたが、信長は家康に彼を紹介した上

「この翁は三好を毒し（長慶の子義興を毒殺したとの意か）、義輝を殺し、大仏殿を焼いた、この三事は古来人の為しがたいことだが、久秀ひとり之を兼ね行った」

と、臆面もなくその旧悪をあげたので、彼は赤面し、額に汗し頭から湯気を立てて憤慨し、このことを根にもったからである（と云う（『本朝通鑑』による））。しかしこれは、史家が信長の口をかりて彼の行動に批判を加えたと見るのが至当である。強いて信長の言とするならば、悪口というよりはむしろ、久秀に一目置いている口吻とでも解さねば、信長の口から出たものらしくない。信長に久秀をこの点で批難する資格があるうとは何人も思わぬであろう。むしろ久秀は信長の露払いの役をつとめた、いわば信長のこの道の先輩にはかならない。久秀に対する史家の評は、社会が安定してきた慶長元和後の意識の反映であろう。新井白石が口をきわめて彼に論難を加えているのも、それと変わりはない（『読史余論』）。山路愛山が、主従のみならず親子、兄弟、親族縁者が互に血で血をあらうのは、応仁以後の「力の世」のなら

いであるとして、「久秀が義輝、三好を亡し、南都を焼きたるは一身を以てかかる人心を代表したものと評したのは、正にその通りといわねばならない（愛山「徳川家康」）。——久秀の履歴を語ることは、近世日本の前夜そのものを語ることであって、信長や秀吉については多くの研究はあるが、彼についてまとまったものがあるかどうか知らない。彼は微賤より身を起し、壮年に至るまで衣食に奔走し、身を立てることもなかったが、三十四、五の頃から手習などして三好長慶の右筆となり、次第に登用されて其の帷幕に参与するようになり、天文二十一年に、京都の政務が主人の長慶に帰してから永禄十一年信長の入洛まで足掛十五年の間、常に国の中央に居て將軍家の政事に参与し畿内の棟梁と称せられたのであった。この簡単な履歴をながめても、彼が信長や秀吉の先駆をなしたものであることは明らかである。彼の南都焼打ちだけを取ってみても、このことは了解されるので、南都に対する北方の雄叡山を焼打ちしたのは、外ならぬ信長であった。しかもこの場合は、久秀の場合とはちがって積極的であり、徹底的なものであった。——それは叡山そのものが頑強な実力をもっていたからであるが——元亀二年（二五七二）の九月、信長は浅井朝倉と結んで彼に仇なす叡山を攻め、火を放って全山ほとんど焦土と化し、死屍累々として山谷にみちたといわれる。しかも、この叡山の焼打ちをもって中世にピリオドを打ち、近世の始点とするのが、今日史家の通説にまでなっているほどに、この事件の歴史的意義は確定されている。してみれば、南都

において我がもの顔に振舞い、結局その焼失の因をなした久秀の行為にも、同様の評価を加えねば公平を失することになる。

天正五年八月、彼が再度信長に叛いて居城信貴山城（多聞城）にかこまれ、ついに天主閣にのぼり、火を放ち、謡曲「野の宮」の末尾の句を口ずさんだのち自殺したのは、十月十日であった。東大寺を焼いたのと同じ日附けであることが史書に必ず指摘されている。彼の子弟はそろって立派だったように史書が伝えていることは、即ち彼自身ならざる人物であったことを問わず語りしていることではないか。子供等はあるいは殺され、あるいは自殺した。

一代の傑物松永久秀は、織田信長に亡ぼされた。それはしかし、決して久秀の行為そのものを修正したり、否定したものでなかった。むしろ信長はその上を行ったものであった。この信長の東大寺に対する態度はもうわかり切っていると云っていい。彼は第二の頼朝ではなかった。——まだ久秀も存生していた天正二年の二月に、信長は上洛して相国寺に寄宿したことがあった。この折彼は東大寺正倉院（之は再度焼失をまぬがれた）の蘭奢待を所望の旨、内裏に奏聞して許された。そこで三月廿八日、大和に出かけて行って多聞山に落着いた。正倉院秘蔵の名香は一寸八分切り取られて彼の許に持参された（信長公記）。彼は王者の豪華を味い、いい気持であったろうが、灰燼となっていた東大寺そのものには、さして関心はなかつ

た。そして新來の天主教の方に心をひかれて何かと世話をした。松永は、京都の天主堂を破壊しピレラフロイスを追放したが、この点では、信長は久秀とちがっていた。東大寺復興に關心の乏しかったのは、信長だけではなかった。永祿炎上後再建の資を助けるようにと、毛利元就、武田信玄、徳川家康等国々の領主に朝廷から依頼されたが、彼等が之に応じた様子はない。——歴史的にいつて南都北嶺の運命は、皇室のそれと不可分にむすびついている。治承炎上のとときの兼実の「仏法王法共に滅尽しおはるか」の述懐はそのことを示すが、同じなげきは、今度も「多聞院日記」にくりかえされている。

九 方廣寺の大佛

たしかに南都北嶺に代表される仏法はほろんだ。しかし、南都の復興にさしたる關心を示さず叡山をひどい目にあわせた信長は、皇室に対してはそれとはちがった態度に出た。信長以外の戦国諸侯も、皇室のことには夫々相当熱心に尽力したが、天下統一運動に於いて群雄をしのいだ信長は、この点においても立ちまざっていた。この二つの事實は必然的な関連をもつものであって、時代の生み出した英雄として、民心のむかうところを敏感にとらえていたことが、この二つの事實となってあらわれたと云うべきである。彼の父信秀が伊勢神宮造營

に志を運び、彼がその志をうけついでことは、足利末期に急速に全国民的となった神宮崇拜の事実と切りはなしては考えられない。彼は永禄十二年に伊勢国を征服したとき、「当国の諸関取分け往還旅人の悩みたる間」これを徹廃させたという（信長記）。この頃の関所は、関錢すなわち通行税をとるためのものであって、伊勢街道では特にこの関所が多く、桑名から日永までの五里に足りない間に六十箇所もあったということは、如何に庶民の参宮が頻繁であつたかを物語るものであり、そして信長が逸早く之を徹廃したことは、彼が民衆の動きに応ずるのに機敏であつたことを実証しているものである。又天正十年（この年に彼は本能寺で自殺した）の正月に、伊勢神宮に於いて三百年來絶えていた正遷宮を再興するについて、その費用として信長から千貫出して貰えばあとは勸進によつてまかなう、と神宮が言つて来たが、彼は勸進などして民百姓に負担をかけてはならぬから、取敢えず三千貫用立て、あとは入用次第出そう、と返事しているが（信長記）、こういう所に気前を見せるのは、矢張りそれだけの効果があつたからである。

彼は又、永禄十二年に内裏が「正体なき」までにこわれていたのを修理しているが、彼のこれらの仕事は民衆の意志を代表して行なわれたものであって、皇室の存在が力づくよく民衆の間に意識されていたことはうたがない。しかし、ここで注意されなければならぬのは、皇室が再び力づくよく再生した、といつても、昔のままの形に於いてではないということ

だ。伊勢神宮の正遷宮が信長らの心尽しで再興した、ということとは、反面からいえば、皇室にとつての重大事が皇室自身の力では出来なかつた、ということである。天平に三国一の大伽藍を造り上げたのは一つに聖武帝と光明皇后の御意志であり、その意志を通すだけの物的支配力がそこにはあつた。頼朝の時には、東大寺復興は彼の力に大いにたよつたが、内裏の修造や大神宮造営までその助力なくしては出来ないということを決してなかつた。今では、東大寺復興など思いもよらぬ事、ただ皇居や大神宮だけは、信長の支持で建て直つたのである。つまり皇室は、民衆のなかに引き下されながら、そこに地盤をえて、かえつてあたらしく生きかへつた、といふべきである。仏法にしても同じである。南都北嶺のものは、そのまま立ち枯れてしまつたが、鎌倉このかたの新仏教、特に一向宗や日蓮宗は、夫々庶民の素晴しい支持を受けた。南都北嶺にくらべて国土の土の匂いがする。親鸞にしる、日蓮にしる、いずれも海外に留学した経験をもたないのは、一宗の開祖としては前例のないことである。

このように民衆が歴史の前面にせり出して来た時分——南北朝頃からは、同時に半島や大陸に対する感情も、以前とは大變ちがつてきた。欽明朝に半島から敗退したことと、仏教文化を受け入れたこととは、離すことの出来ない因果關係に結ばれている、と前に述べた。旧仏教の栄えた陰には、いつも異朝の威圧感がつきまといつていたが、今では半島に対する警戒

心も大陸への畏怖感もうすらいだ。わけもなくビクビクしたり、オドオドしたりすることは少なくなった。日本人は、どしどし海外の各地に押しかけて行った。この流れは、豊臣秀吉の一見無暴な対外行動にまで発展して行った。それと共に、今度は海の彼方から全く新しい世界が顔を出してきたことも、旧世界の束縛から人心をさらって行く有力な刺戟となった。こうなつては、大仏様も顔負けである。

秀吉はあらゆる点で信長の継承者である。秀吉は信長が思い切りいためたつけた叡山の再興を許し、信長が攻略の手を下しかけて急死したため中止した高野山を宥免、信長が半生死闘した相手の本願寺にも後援の手を差押べる、という具合で、これだけ取ってみると、両者はまるでちがった方策に立っているように思われるが、そうではなくして、いわば存分になぐりつけた頭を後で一寸なでてやったにすぎない。この点、頼朝の社寺に対する態度と秀吉のそれと形はよく似ているようであっても、その内容はまるでかけはなれている。——だからまだなぐり方が足りないか、全然なぐっていない相手には、秀吉も信長と同じ強硬な態度でのぞんでいる。高野山は今言ったように、信長が、荒木村重の余党をかくまったのを咎めてその子信孝を將として之を攻めさせたが、途中で本能寺の変が突発し、信孝が急に囲みを解いて去るや、衆徒は之に追い討ちをかける、という不始末に終った。だから秀吉は、天正十

三年三月に使者を送って降伏を勧告し、若し聴かなければ一山を破却せんとおどしつけた。高野山はあわてふためき対策を評定したが、誰一人として秀吉との交渉に当ろうと云うものもない。そこで客僧の応供（木食上人）がその任を買って出たのを渡りに舟と頼んで、全権大使として秀吉との間に話をつけてもらった。

応供は近江佐々木氏の一族で、佐々木氏が信長に亡ぼされたのち高野山に入った人で、例の佐々木高綱との間に糸を引いているのも、心にふれる事である。一体に高野山は、南都北嶺とは大分その性質を異にしてアジール（そこに逃げ込めば外部から遮断される一種の治外法権を認められた場所）的性格の顕著な靈域として自他共に許していた。いわば政治的中立地帯であった。西行もここに居たことがあり、直実も高綱もここに入山した。荒木村重の余党もここに身を寄せた。この高野山さえ今やその特殊性をうばわれたのであった。秀吉は、こうして徹底的に高野山をきめつけて、自分の意に従わせた上で、その再興を応供の手に委せたまでのことである。そして一方では、あくまで彼に楯つく紀伊の根来寺などには武力を加えて完全に打ちのめし、残存寺院勢力に最後のとどめをさしたので、まさしく彼は信長の始めた事業の継承者であり、完成者であった。今や伝統の武力と経済力とを奪われ完全に去勢され、骨抜きにされた彼等に、ただその形だけの存続を許したというにすぎない。彼が、弟の秀長を大和の地に封じて南都諸社寺に援護を与えさせたのも、この宥和政策のあらわれにほかならぬ。

彼自身、天正十七年に南都に遊んだことがある。東大寺興福寺に宿泊したが、諸寺彼をむかえて歓待これつとめたという。東大寺供養に大檀那として臨みながら、頼朝が南都衆徒にどんな心遣いをしたかを回想すれば、「今昔の感」にたえないというところだ。

この秀吉は、奈良の大仏の再興はしないで、その代り京都東山に別の大仏を立てた。いうまでもなく方広寺の大仏である。方広寺の名称は、大方広仏華嚴經から来ているので、東大寺大仏にならって立てたことは明らかである。どうせ大仏を立てるなら由緒ある南都大仏の復興を計ったらよさそうなものなのに、わざわざこんな奇抜なことをやるのは秀吉式といえばそれまでだが、何だか皮肉な仕打ちで、奈良の大仏様が気の毒な気がする。彼がこの仕事をはじめたのは天正十四年で、彼の天下をにぎった大きな手から洩れているのは、目ぼしい所では東の小田原北条氏と、西の島津氏だけであったので、この辺で大いに平和気分をふりまこうとしたものであろう。いわゆる刀狩をやって民間の武器を取上げ、之を大仏殿建立用に振当て、名実共に和平の具に供した。尤もこの刀狩は彼の創意ではなく、北条泰時が仁治三年に禁令を出して、鎌倉中の主なる寺院に向って、僧徒の従類たる児童、供侍、中間、童部力者等の雄剣を横たえ腰刀を帯するのを禁じ、小舎人をして見るに随ってこれを没収し、鎌倉の大仏に施入させた先例があり、秀吉はこの故智に学んだのであろう（三浦周行「鎌倉時代史」）。——もともと平和気分をあおり立て民心を転換させるのが主な目的であつたらうか

ら、精々お祭騒ぎを演じて景気をつけた。三井寺山中から大石を引出すのに、傾城十数人に拍子をとらせ、秀吉自身も木遣りの声を放つとか(氏郷記)、細川忠興が大石を引出した折には秀吉は石にあがって、それ引け、やれ引けと音頭をとったとかいう(千利休書簡)。工事の大げさな割には、丹誠をこらすと云うことはなく、でかくさえあればよいと云った、ヤッツケ仕事の気味があつたようである。御本尊の大仏そのものも、昔のように唐かねでは手間どるとて、しつこいでこしらえた(甫庵太閤記)。それで、慶長元年七月十二夜の大地震にあつてなくこわれてしまった、と川角太閤記はつたえている。——この方広寺は慶長七年に炎上したので、のちに、秀頼が家康にすすめられて再建し大仏も銅で鑄造した。ところが、大仏の鐘の銘文について家康から言いがかりをつけられ、豊家滅亡の端緒を開いたことはあまりに有名な話である。こうして東大寺大仏殿は、秀吉によつてもついに復興されなかつた。それを尻目にかけて、しつこいの大仏があらわれた。そしてこの大仏も豊家の運命そのものの如く、一夜にしてはかなく崩れ去つた。南都の大仏は世間から忘れられていた。

十 再度の復興

信長、秀吉の時代を経て徳川の天下となつたが、事情は依然かわりがなかつた。五代將軍

綱吉の時になって、公慶上人が出て、熱心に勧進してどうやら本格的な修造に着手し、元禄五年（一六九七）三月八日に大仏の開眼供養が執行された。この頃は天下泰平で、上人の熱心な勧進に応ずるだけの余裕が社会に出来ていたのである。其の後直ちに大仏殿の建立に取りかかった。上人は江戸本所に勧進所を置き、せわしなく南都との間を往復した。之には幕府も直接資金を出し、諸大名にも応分の寄進につくよう下知し、かつ奈良奉行に工事を監督させた。工事は手間どり、その完成を見ない宝永二年七月に公慶は江戸でなくなった。幕府にこの仕事で世話になるお礼の挨拶に行っていた際のことである。彼の歿後は、門弟の公慶上人らが遺志を受けついで経営に当り、同六年（一七〇九）三月廿一日に落慶供養がいとなまされた。永禄の炎上の年より百五十年近くたっている。なおこの後日談が、新井白石の「折たく柴の記」に出ているが、それによると――

享保元年二月十三日附京都所司代水野和泉守忠之からの書状に「昨十二日伝奏の人々が上皇（靈元）の仰せをつたえて言ふよう、東大寺勧進上人公盛の申すには、東大寺は聖武皇帝の御草創、鎮護国家の霊場である。されば治承回祿の後、後白河法皇の御願にて諸国に院宣をなされて御再興あり、其の後また永禄の回祿にも正親町院綸旨を諸国に下されしが、時至らずして功ならず、わが先師公慶の時に及んで関東の許可を申受け諸国に勧進して大仏殿を建立した。公盛之を継いで楼中門を造ったが、廻廊以下の所々は其の功未だ成就し

ない。伏して願くば、建久永祿の例によられて院宣をなし下されむことを請うと。斯のよ
うに公盛が申すので、先例もあることなので、この請願を無下に捨去ることも出来ない
が、院宣を下していいものかどうか、との上皇の御内意があった。」

とあり、且建久、永正、永祿、元龜の度々に下された綸旨・院宣の写しを参考書類として副
へて給わった由が附言してあった。側用人間部詮房から、この事如何取計らったら宜しいか
ときかれ、自分（白石）が回答の草案を作ってやった、その要旨は

「公盛上人の奏請にかかる院宣下賜の件は一向差支えないことである。但し建久の例の如
きは、まづ院宣を鎌倉につかわされて、それに基いて鎌倉から諸国に下知したのである。
然るに公慶上人は、院宣を望み請うことはせず、直接関東に話を持って来て諸国に課役
したので、建久の例とは違う。而してその際も、諸国は財政が苦しいので未だに課役に従
わぬ国々もあると聞いている。既に大仏殿廊中門等は出来上っているのであるから、今更
わずか廻廊のために院宣を出されて、それでなお催促に従わぬ国でもあったら、朝命が行
われがたい印象を与え、いかがなものであらうか。先師の志を承けつぐ公盛上人の意志が
ある以上、あと僅かの所を成就するのに何程のことがあろうか。然し斯く言うのは当方だ
けの内々の意見で、院宣を下される場合は、所司代に於いて速かに諸国に下知せられるこ
とは申すまでもないことである。」

と云うことであつた。この趣旨を以て京都に回答した処、法皇は

「初めから出来ることとは思つていなかった。ただかの上人の懇望するのを一概に聞き捨てるにもできないので一応言い出して見たまでのこと。江戸の意見を聞いて見れば、まことにその通りで、院宣など出すべきことではない。」

と仰せがあつたとのことである。――

幕府にしてみれば、この仕事に朝廷のいきのかかるのを好まないのだ。東大寺と皇室との不可分の歴史的因縁を切断して、この仕事を自分の恩恵の下にだけ置きたかつたのである。そう言えば、元禄の開眼供養にも、宝永の落慶供養にも、天皇なり上皇なりが親臨する前例を破つて、勅使だけを差遣しているのも、幕府を憚はばつてのことにはちがいあるまい。この東大寺復興にあらわれた朝幕関係は、幕府の朝廷に対する基本的な態度がここにも顔を出しているのにほかならない。幕府は、皇室を京都という籠の中の鳥たらしめんと欲した。この鳥が自由に外界を飛びまわったり、外界からこの籠に手をふれたりすることを極度にきらつた。皇室はいわば「格子なき牢獄」にとじこめられた。幕府は、世界に対して鎖国して、実は国民そのものをも籠の中の鳥にしたのであつた。しかし、この籠は否応なしに外からの手によつて引き開けられねばならぬときが来た。それと共に内に於いても、幕府の禁を犯して京都に接近しようとするものがふえて行つた。これが、東大寺復興成つてから凡そ百五十年後の

時代の大勢であった。

元禄宝永にこの寺の再興から締出された朝廷は、かえって時流の中心に立たされるようになった。歴史のこの動き方は、実はさきに述べたように、信長の出た前後に決定された方向に従ったものであった。それが鎖国政策の維持せられたような客観情勢によって固定して、展開しないかに見えていたのにすぎない。しかし、歴史の流れはその実極めて緩慢ではあったが、矢張り確実に自己をつらぬいて動いていたのであった。——我が東大寺が、歴史の外存在となったのも久しい昔のことである。永禄炎上の頃はすでに全く歴史的生命を喪失していた。それだからその後世間からほとんど忘れられて再興も望みえなかった。今ここに斯うして多年の望みを達したわけであるが、泰平の余徳で博物館的存在として生まれ代った、と云うにすぎない。かの大仏も遊覧客の好奇心をひきつける客寄せの具になってしまった。

むすび

芭蕉は郷国伊賀が奈良に近いので、そこを訪ねるついでではあった。彼の紀行「笈おいの小文こぶみ」によると、貞享四年十月に江戸を発ち東海道を通過して郷里に帰り、それから翌年三月に吉野

・高野山・和歌浦を巡って四月八日灌仏の日に奈良に入った。丁度その日鹿の児を産むのに出つかして、釈迦誕生の日にこの事あるに興じて

灌仏の日に生れあふ鹿の子哉

と即興の句を口づさんだ。——この翌々年の元禄二年には、かの奥の細道の大旅行をやった。そしてこの旅を終わって郷里に帰り、そこで二ヶ月ほど暮して、十一月の末頃奈良を経て京都に帰ったが、おそらくこの際奈良にて詠んだものであろう、

ならにて

雪かなしいつ大仏の瓦葺

と云う句が門人其角の元禄三年に編んだ「花摘」に出ている。元禄八年に支考の出した「笈日記」にも芭蕉の句として

ならにて元禄巳の冬大仏栄興をよろこびて

初雪やいつ大仏の柱立

と云うのが見える。元禄巳の年は二年であるから、同じ時のものであろう。丁度大仏修造がはじめられていた際であった。彼はこの数年後にも又奈良に立寄る機会があった。それは同時に最後の機会でもあった。元禄七年九月八日に郷里伊賀を発って大阪に向ったが、その日の夜奈良に宿り、猿沢の池のほとりで

びいと啼く尻声悲し夜の鹿

と吟じ、翌日重陽の節句に遭って

菊の香や奈良には古き仏達

とよんだ。彼はほぼ出来上った大仏殿を見たと思われる。しかし、彼の見たこの都は、すでに興亡一千年の歴史に終止符を打ち、その始終をつぶさに眺めて来られた古仏達が、事もなげに菊の香に酔い給うている古都にほかならなかつたのである。(昭和二十五年六月稿)

第二編 富士山記



富士宮 浅間神社

第二編 富士山記

はじめに

伊豆いづ韮山にらの代官江川坦庵たんあん（太郎左衛門）の句に

里はまだ夜深し不二の朝日影

とある。四辺いまだ太平の深いねむりの中にある。不二のみひとり目ざめて朝日を浴びている。その富士の姿は先覚者、坦庵自身のそれでもある。坦庵が「朝日影」と云ったのは、太平洋の彼方から射して来る光であった。嘉永六年（一八五三年）七月八日の朝、アメリカの使節ペリーのひきいる黒船が相模湾頭わんに姿を現わした。ペリー遠征記はこの時のことを、

「折から霧が晴れて、相模湾の後に聳そびえる大富士が見られた。その円錐形の頂は、雪か綿雲か判然しない白帽子をかぶって、地上はるかに屹立きつしていた」

と記している。アメリカからの使節を真先に迎えた富士山は、また我国からはじめてアメリカへ赴く使節を見送ることになった。安政仮条約の調印のため、徳川幕府が使節を出したのは、万延元年（一八六〇年）正月のことである。この時の副使・村垣淡路守範正は、その出発

の日のことを左の如く記している。――

正月廿三日……船は寅卯に向ひ、上総の大東岬を遠く見て洋中に馳けりけるまま、神州の地……不二ばかりそれと見えければ

立帰り迎ふ折こそ契らめや不二の高根に別れ行く空

漁する舟ども、あまた漕ぎよせて、異国の船に御国の人の乗りたるを怪しみて見るさま、ことわりなり。――

条約調印の万延元年は、わが富士山に、外人の足跡のはじめて印せられた年でもあった。英国公使オールコック一行の富士登頂がそれである。この年の三月には井伊大老の血が桜田門外の白雪を赤く染めた。攘夷の叫びは嵐のように日本国中に吹きまくっていた。このような日に、オールコックはあえて「神州の霊峰」をその土足にかけようとしたのである。彼はこの年の九月（陽曆）の初め、江戸を発って東海道を富士大宮まで行き、そこから登山して頂上を極わめ、同じ大宮口に下山したのは、九月十三日であった。

天候に恵まれ、何等の障りもなかったのである。彼は「大君の都―滞日三年」の中に富士山のことを、「少しも世界を知らぬ日本人にとって世界に比類なき（matchless）存在」と云っている。日本人の富士自慢は、すでに彼等にも知られていたと見える。オールコックはその後一旦香港に戻ったが、再び日本に帰任した。そして江戸に赴くのに、長崎から陸路をと

る、と云い出した。彼の身の危険を心配した長崎奉行など、これを諫止したが聞き入れぬ。長崎から小倉まで陸行、そこから和船で兵庫に着いた。京都を通過しようものならば攘夷派の激昂を買うは必定とて、幕府は彼をなだめすかして京都は避けて、大阪・奈良を経て桑名に出て、そこから東海道を下って江戸品川東禅寺の英国公使館に着いた。それは、文久元年五月二八日である。ところが、さみだれそぼ降るその夜、水戸浪士十五名が東禅寺を襲った。オールコックの今次の行程が神国を汚した、と云うのである。オールコックは危難を免れたが、書記官ほか一名は負傷した。この東禅寺事件は、世界を我が物顔に押し歩くイギリス人の図々しさと、世界を知らぬ日本人のひとりよがりの共演した活劇であった。

ここで、明治以降の、目ぼしい富士山記を取り上げて、近代日本人の精神の軌跡を辿ってみよう。

一 北村透谷「富嶽の詩神を思ふ」

明治二十年代にロマンティズムの旗をはためかせた北村透谷は、富士山を熱愛した。富士山は彼にとって外なるものではなく、内なるものであった。明治二十六年（彼二十四歳）一月「文学界」創刊号に載せた「富嶽の詩神を思ふ」の一部分を引く――

「朽ちざるものいづくにある、死せざるものいづくにある。われ答を俟ちて躊躇せり、而して答遂に来らず。朽ちざるに近きものいづくにかある、死せざるに近きものいづくにかある。われこの答へを聞かんが為に過去の半生を逍遙黙思に費せり。而して遂にその一部分を聞けると思ふは非か非ならざるか。（ここで山部赤人の長歌を引いているが略す）

白雲、黒雲、積雪、潰雪、閃電、猛雷、是等のものを用役し、是等のものを使僕し、是等のものを制御して而して恒久不変に威靈を保つもの、富嶽よ、それ汝か。渡る日の影も隠るひ、照る月の光も見えず、昼は昼の威を示し、夜は夜の威を示す、富嶽よ、汝こそ不朽不死にちかきものか。汝が山上の浮雲よりも早く消え、汝が山腹の電影よりも速かに滅する浮世の英雄、何の戯れぞ。いさましや汝の山麓を西に馳する風、こころよや汝の山嶺を東に飛ぶ風、流転の力汝に迫らず、無常の権汝ちからを襲はず。『自由』汝と共にあり、国家汝

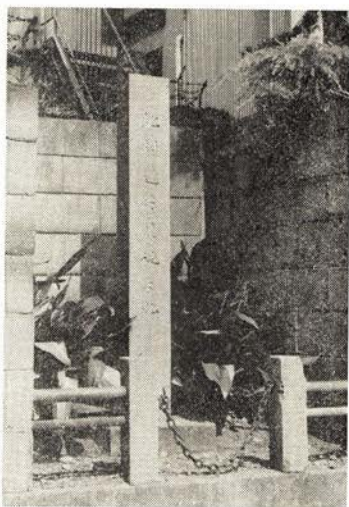
と与ともに樹たてり、何をか畏れとせむ。

遠く望めば美人の如し。近く眺むれば威嚴ある男子なり。アルプス山の大歐文学に於ける、わが富嶽の大和民族に於ける、淵源するところ、関連するところ、豈すな寡なしとせんや。遠く望んで美人の如く、近く眺めて男子の如きは、そも我文学史の証あかしとするところの姿にあらずや。アルプスの崇巖、或は之を欠かん。然れども富嶽の優美、何ぞ大に譲るところあらん。

尽きず朽ちざる詩神、風に乗り雲に御して東西を飄遊し玉へり。富嶽、駿河の国に崛起せしといふ朝、彼は幾億万里の天峴よりその山巔さんてんに急げり、而して富嶽の威容を愛するが故に、その殿居に駐とどまり棲すみて、遂に復た去らず。是より風流の道大に開け、人磨赤人より降って西行芭蕉の徒、この詩神と逍遙するが為に、富嶽の周辺を往返して、形なく像なき記念碑を空中に構設しはじめたり。詩神去らず、この国なほ愛すべし。詩神去らず、人間なほ味あり。――

透谷の富嶽に寄せるただならぬ思いをぼくらは彼の劇詩「蓬萊曲」に見る。これは蓬萊山を舞台とするものであるが、蓬萊山はすなわち富士山にはかならぬ。「明治二十四年晩春」に記されたその「序」の中間の部分を取り出してみよう。――

「蓬萊山は大東に詩の精を迸はう発はつする千古不変の泉源を置けり。田夫も之に対してはインス



北村透谷生誕之地碑（小田原市浜町旧万年町）

し、半狂半真なる柳田素雄（注・この劇詩の主人公）を悲死せしむるに至れるなり。——」

透谷はまさに富嶽に魅せられた人であった。その彼にとって「自由」とは、富嶽の詩神とともにあった。それは外からの借物であってはならなかった。彼は明治二十一年（満十九歳）一月、石坂ミナ（この年十一月に兩人は結婚）宛ての書簡で云っている——

彼等壯士（自由党壯士）の輩をか成さんとする。余は既に彼等の放縦にして共に計るに足らざるを知り、恍然として（我を忘れて）自ら其群を逃れたり。彼等の、暴を制せんとす

ピレイションを感じ、学童も之に対して詩人となる。余も亦た彼等と同じく蓬萊嶽に対する詩人となれること久し。回顧すれば十有六歳（數え年）の夏なりし、弧筈（独り杖を引いて）其絶巔に登りたりし時に余は始めて世に鬼神なりる者の存するを信ぜんとせし事ありし。崎嶇たる人生の行路、遂に余をして彼の瑞雲横たはり仙翁楽しく棲めると言ふ靈嶽を仮り来つて幽冥界に擬

るは好し。然れども暴を以て暴を制せんとするは之れ果して何事ぞ。暴を撃つが為には兵器も提げて起こる可し。然れども其兵器は暴の劍なる可からず。須らく真理の鑓やなる可きなり。真理を以て戦ふ可し。独り吾等の腕を以て戦ふは非なり。將まさに神の力を借りて戦はざる可からず。——

透谷は、ゲーテの「ファウスト」とならべて、バイロンの「マンフレッド」を論評している。彼の「蓬萊曲」には——すでに云われているように——「マンフレッド」の投影がある。しかし、それは借物ということとはできない。蓬萊曲の「柳田素雄」とともに彼自身「悲死」したのである。

二 内村鑑三「信仰座談」

内村鑑三は最高の知識人であると同時に、一箇の自然児であつた。生涯、上州人の土の香を失なわなかつた。彼は日本の国土を熱愛した。その著「伝道の精神」(明治二十七年刊)の中で云っている――

愛国の情、是れ吾人の至誠なり。此の至情、我れ之を分析すること能はずと雖も、我の心思を捕へ、我の生命を縛り、我をして之が為めに生き、之が為めに死するも、尚之に報ゆるに足らざるを感ぜしむ。我の我国に対するは、人のその母に対するの情なり。我は思はずして彼女を愛し、我を围绕する山川に生靈の充滿するが如きありて、沈黙微妙の中に我に^{こた}へ我に^{こた}むるの感あり。誰か云ふ、物質に生命なしと。我の身体髪膚はその細微の分子に至るまで、我国土の变化して我となりしものならずや。我は国土の一部分にして、我の此土に附着するは此の土の化現なればなり。国を愛せざる者は自己を愛せざる者なり。――

この彼にとつて、富士山がわが美しき国土を代表する存在として映じたのは当然である。う。「宗教座談」(明治三十三年刊)で次のごとく告白している――

私は勿論私の愛する日本国のために祈ります。之は実に私の祈禱の大眼目であります。其真正の君子国となりて人類の進歩と改善とに大に貢献する所あらん事は常に私の念頭を離れない祈願で御座います。私は亦た殊に神が私の国人の中より多くの義人を起し給はん事をも熱心に祈ります。さうして私は神は確かに日本を恵み給ふと信じまする故に、夕暮静に西に向つて独り河辺で祈りまする時などは、遙かに富士山の麗はしき姿を見て、私の国の将来に就て失せなんとする私の希望を恢復する事が度々御座います。斯う云ふ美はしい国を我等に授け給ひし天の神は何時か一度は此国を聖き天国のやうな国に為さずしては歎み給はざるべしと密かに思ひます。——

彼が欧米によつて媒介されたキリスト教に甘んじられなかつたのは、これまた当然のことである。彼の信ずるキリスト教は富士山を度外視するものではありえなかつた。「地人論」(明治二十七年刊)で彼は云う——

誰か云ふ、宗教に地理学の要なしと。誰か宗教歴史を読んで地理学の無用を認めしものぞある。……煙霧天を掩つて常に悒鬱なる英国に於て発達せし監督又は清党主義を、山海美麗、桜花爛漫たる我国に其儘輸入せんと勉むるものは未だ地理学を学ばざる人なり。神来つて我等の中に宿り、芙蓉(注・富士山)を以て榮座となし、三保の松原を足台となし、桜花馥郁として彼の胸間にあり、蒼々たる松森、彼の腰を纏ひ、以て帯するに環海の白浪

を以てするに及んで、我国は始めて教化し得るのみ。――

キリスト教そのものが、すでに特殊の地理（風土）と歴史の所産にほかならぬ。しかし普遍は、特殊の中にしか己れをあらわすことはできない。己れこそ普遍である、と云うものは、実は特殊をそのまま普遍にすりかえるものであって、かえってそこには普遍はない。キリスト教がその特殊の中に普遍を持つ以上は、日本の特殊の中におけるそれをあらわさなければならぬ、というのが鑑三の真意であろうか。

鑑三の偉大さは、彼の門下によって、富士山にたとえられた。門下の俊秀江原万里は、あ
る人がカーライルをアルプスの山峯にたとえたのに対して、師鑑三は富士山にたとえられる
と、次の如く云っている――

山麓は遠く関八州に延びて緑野未だ終らず、天に高く聳もはだち、中復なかくには黒風白雨去来し、
山頂は千古の雪を冠きて、朝陽夕日に映ゆる富士の秀嶺こそそれ（鑑三の偉大さ）であろう。

三 野中^{いたる}至夫妻のこと

かつて手許にあった昔の女学校の教科書で、野中千代の富士山頂生活の回想記をよんで感銘を受け、そのことを旧稿に書いたのだが、ほんの一部分しか引用しなかった。その教科書はその後なくしてしまつて、今度稿を改めるについて、もう一度見たくてもそれができないのがいかにも残念であつた。ところが、磯貝保博君が教育研究所に出むいて、その写しを取ってくれて、ほくの渴はいやされた。それは二通りあつて、内容はまったく同じだが、一本のは「富士山の頂上」という題であり、他本のは「富士みやげ」となつてゐる。

橋本英吉の小説「富士山頂」によると、明治二十八年の八月に野中^{いたる}至の手によつて山頂氣象観測所が建設された。その建設のための基地は三合目にあつた。千代は山頂に赴く^{いたる}至に同行することを許されず、そこから追い返された。夫妻の間には女の児があつた。千代はその子を九州の実家にあずけると、夫のもとにとつてかえした。教科書所載の全文は左のとおりである。――

東雲しのぶの空ほのほのと明けゆくままに、うちながめ居れば、箱根・足柄の裾をまとひ、寛永の頂いただきに懸れる白雲はかき消すやうに失せて、やがて中空に紫雲たなびき、海面に漂へる一帯の層雲は、黄金色を帯び、御光燦然として蒼天を貫くかと思見る間に、やをら旭日団ぐんとして天に朝する光景は、さながら天の岩戸の古事も思ひ出でられて、眼眩くらみ、心機天外に馳せて、こよなううるはしく尊く覚ゆ。

頂いただきは風吹かぬ日とてはなし。剩あまつさへその力なみならず強ければ、山の懐ふところを掠かすめて吹きあぐる音、恰あたかも遠雷の如く、観測所の附近に犬牙錯雑せる巖を衝いて、砕け散る声は、さながら裂帛れきに異ならず。余勢、噴火口を襲ひて、坑底に吹きおろす響は、瀑布かたわらの傍わらに立つが如く、怒濤の岸をうつにひとし。かかる折ふし、丑うし三つ時の戸外の観測の怖おそろしさ、いふばかりなし。

風伯の怒れる折の怖ろしさもさることながら、風なき夜半の山頂こそ、物すごき限なれ。突兀とつとつたるあたりの巖は、悪鬼の、われを襲ひ来るかと怪まれ、黒暗々たる大噴火口は、今しもわれを吞まむとて待つもののごとし。かかる折から、下弦の月銅色を放つて岩頭にかかれる光景は、実に、地獄のさまも、かくやとばかりにて、身はさながら剣つるぎの山と

やらむにさまよひぬる心地して凄じともすさまじ。

十月十三日、東西にまします父母の御許に、つつがなう頂上に著きにしよしを認めて、吾を送り給へる義弟清殿にことづて参らせしに、清殿もいつ果つべき名残ならねばとて、何くれと御心を尽し「さらば、滞なう事を遂げさせ給へ。いざ」とて立ち出で給ふ。われは良人と清殿との御心中を察し参らせて、そぞろに涙をしぼりけり。この日は稀なる好天氣なりしが、いつしか御姿もいはほの蔭にかくされて見えなくなりき。真に、物さびしき極なりしが、それよりはさしも広き富士の頂に、良人とわれと二人の外には禽獸すらあらずなりぬるにつけて、「兩人こそ今より富士のあるじなれ」と、互に、思ひ慰めてしことの、心に浸みて、今も富士を見るたびに、わがものの心地ぞせらるる。

名に高き、千島の国の報効義会員兩名、神無月二十八日といふに、郡司(成忠)大人の仰をうけたまはり、御文と数々の贈物とを剛力に負はせ、氷雪を冒して訪ひ給ふ。正午の頃にやありけむ、外面に嘯々と戸を敲く音す。また、例の風にやはからるるとて、うちすましてありけるに、やがてあやしげなる声して、「見舞の者こそ参りつれ。此処、明け給はずや。寒気に、え堪ふべくもあらず」といふに、いたう驚かれて、馳せ出でつれども、

門口は氷に閉されて戸のあくべきやうもなし。せむ方なく、内外力を合せて窓の戸引き放ち、「口狭ければしりへよりいざり給へ。氷に傷つかせ給ふな。徐にせさせ給へ。見給ふごとく、今は、はや七日あまり氷雪にとぢられ、外面に出づることえならねば、年内はもはや下界の音信を得むこと思ひもよらずなど、うち語らふ折から、真に、思ひもかけず、訪はせ給ひつること、こよなきよろこびにこそ候へ。さかしき山路に、さこそ勞れ給ひつらめ。狭くとも今宵は此処に」と、この夜はよもすがら文幾通となく認めて、故郷の方々に贈らむとす。実に思はざる外の便を得つることの嬉しさ、いひ出づべき言の葉もなし。二人の君は遙々の道すがら、御つかれは申すも更なり。されど所がらとて、御もてなしも心にまかせず、方々は明るる日の正午頃にははや、此処を立ち出でたまふと聞きて、郡司大人に文して参らするはしがきに、

わが為に、はるばるとはせ給ひつる心おもへばなみだのみして
方々の姿を見送りて良人も

わが国の北のしづめとなりぬべきますらたけをの身を守れ神

なお小説「富士山頂」に――

十一月三日天長節、彼等は風力計の軸に国旗をしばりつけて、餅ともいえぬ餅といっしょ

に、自作の和歌を供えた。

いただきは人しなければ二柱降りし御代の心地こそすれ 至

ますらをの身にしあらねど国のためつくす心はいかでゆづらむ 千代

とあるのは、千代の手記によったのであろう。橋本氏の小説の附記で、野中至が昭和二十二年現在 八十一歳で健在であることを知った。妻の千代は大正十二年に亡くなったのである。

附記

本書印刷進行中、一日、逗子に野中家をおとずれた。千代子自筆の回想記を見せていただいたがそこには「芙蓉日記」と題されていた。出版されたかどうか知らない、との家人のお話であった。至が昭和三十年二月二十八日に歿したことも承知した。

四 富岡鉄斎「富士山図」

富岡鉄斎は、その随筆「画史登岳」中に――

余は明治八年七月甲州吉田口より登り、絶頂に一泊し、翌日駿河口へ降り、麓を巡覽し、不レ残見めぐり、又富士山眺望の地彼は経歴す。

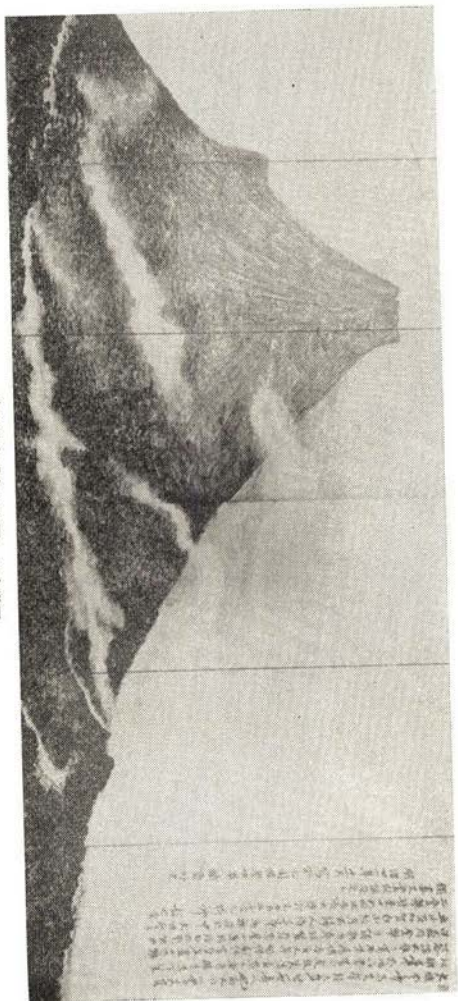
と記している。彼、四十歳であった。彼が富士を画いた代表的な作品は、明治三十一年十一月の六曲屏風の富士山図がある。(明治八年にいっしょに登った紙商柴田治右衛門のために書かれたという。)

正宗得三郎の解説によると――

左半双の題字は篆書てんぶんで不尽山頂全図と書いてある。この図は大雅堂の不二頂上図の感化もあるが鉄斎の実感によるところが多い。鉄斎の筆勢は大雅堂を凌駕する自然感を表現している、気魄の籠った作品である。よく調べると噴火口に雲母が使用してあって、その巧技には驚嘆すべきものがある。

右半双は、富士の全容図である。噴火口を頂点として、左斜面に宝永山を描き、右に富士特有の敵しい斜線が延びて、その末端に甲州登山口の吉田町を写して、広袤富士の威容を表現している。その山容は逆光に浮き出し、流雲は金泥こんでいの空をおもむろに流れている。

富岡鉄斎「富士山図」の右半双



この作の描法は谷文晁の名山図絵に抛るものと私は思っている。この半双の題賛には大雅堂・高芙蓉・韓大年の登山記が記されている。――

鉄斎は、とくに好んで富士を画いたわけではなく、また富士山図は、彼の代表的名作でもない。ここで鉄斎を取り上げたのは、ほかのわけもあつてのことである。それは彼が富士へ登る直前に、信州下伊那郡浪合村に宗良親王むねなが々子尹良親王ただの旧跡を探ったことである。彼はそのついでに宗良親王むねながに縁故深き富山に登る氣になつたのである。この浪合探訪について、これまた正宗氏の解説を借りる――

まず御坂峠を越えて浪合に入り、御墳墓の調査、地内の見取図など、隈なくすませて、根羽街道を北に取り、飯田へ向かった。時將ときまさに炎熱の候、偶々松川出水して、ために橋落ちて渡ること叶わず、鉄斎は衣類所持品を頭上に載せて川を渡って飯田にはいった。――明治三十六年十二月十四日鉄斎は浪合村に尹良親王殉難記念碑除幕式に斎王として参列した。その時の歌

知らざりき幾世の昔しのばれて浪合の里に袖ぬれむとは

浪合にしづみましにし大皇子のみこころくみて袖ぬれむとは

信州伊那は、宗良親王が前後三十余年流寓せられたところである。とくに大河原に多く居

住せられたと思われる。大河原は下伊那大鹿村にある。天竜川をはさんで、浪合はその西に、大河原はその東にある。

信濃国大河原と申し侍りける深山の中に、心うつくしう庵一、二ばかりして住み侍りける、谷あひの空もいくほどならぬに、月をみてよみ侍りし

いづかたも山の端近き柴の戸は月みる空やすくなかるらむ

この詞書の中の「心うつくしう」ということばが光っている。村民が、そまつではあつても、心をこめて造作したさまがしのばれるのである。親王はここを根城としながら、有志を求めて四方を巡歴せられた。

浮島ヶ原（駿河）をとほりて車返しといひし所より甲斐国に入りて信濃へと心ざし侍りしに、

さながら富士の麓すもとを行きめぐり侍りしかば、山の姿いづかたよりも同じやうに見えて、

まことにたぐひなし。すそ野の秋のけしきまめやかに心ことばもおよびがたくおぼえ侍りける

北になし南になしてけふ幾いく日ふじの麓をめぐりきぬらむ

この歌は赤人の「田児の浦ゆ」以来の名歌と申すべきである。鉄斎が、前記したように「麓を巡覽し、不レ残見めぐり」といつているのは、この歌が念頭にあつてのことと察せられる。

小高根太郎氏著「富岡鉄斎」から引用する――

鉄斎はその子謙蔵を内村鑑三につけて英語を学ばせた。キリスト教徒である内村は、天

皇のお写真に敬礼することを拒否して、(注・実は訛伝である)世間一般から国賊呼ばわりされていた。鉄斎はそんなことには頓着しない太っ腹なところがあって、悪名高い内村にわが子の教育を託したのである。鉄斎は国文学者であり儒者ではあったが、決して偏狭でも固陋でもなく、むしろ時勢に一步先がけていたのである。――

ところで、内村に就いて英語を学ばせると同時に、栗田寛に就いて国史学を修めさせたことを記さなければ片手落ちである。

五 徳富蘆花「富士」

徳富蘆花が、彼の自叙伝「富士」の第一巻を出したのは、大正十四年のことであつた。なぜ、その自叙伝を「富士」と題したか。それは彼自ら、この本の広告文で表白している。――

日子ひこ日女ひめを君にささげて今日よりは心のどかに昔語らむ

昨年（大正十四年）一月二十六日、我皇太子殿下良子女王殿下御結婚の吉日に、斯く詠んで書きはじめた小説「富士」の第一巻を、今上両陛下銀婚御式の今日今日、公にするは私共の本懐である。

小説「富士」は、明治天皇皇后両陛下銀婚御式の明治廿七年に始まる。それは私共の結婚生活史である。内容があまりひどいので、出すに気がひける。近辺の迷惑も気の毒に思う。然し今日は審判の日、決算の時、古いものの終、新しいものの始である。過ぎ行くものの懺悔と謝罪と祝福と、永劫に新たな生命の凱歌と感謝と、過去の為にも、未来の為に、小説「富士」は公にせられねばならぬ。すべての為の一、一の為のすべてである。

小説「富士」、いと小さき夫婦の日常生活の記録――然し神と人、歴史と生命、霊と肉、東洋と西洋、而して畢竟男と女、其對抗血闘、苦悩抱擁、融和は端的に其処に現はれる。

斯この新旧雜糅じゅうりゆう、東西混淆、古事記に所謂「くらげなすただよへる」どろどろの混沌の中から一男一女、一夫婦の造り上げられる創造の過程を見んとならば、小説「富士」はまさにそれである。縮写された新日本解脫更生史を其処に読むことも出来得よう。

日露戦争も終近くなつた夏、著者夫妻は富士の絶頂で大風雨に会い、夫は石室いしむろの中に三日三夜人事不省になり、妻の念力で復活した。其思出かたがた、小説を「富士」と名づけた。且我等日本人に、富士は唯「山」ではない。

鎚と鎚、交々こもこも動いて一口の劍が鍛はるるやうに、経たせと緯よことが共に働いて一卷の綾羅が織らるるやうに、小説「富士」は嚴密な意味に於て私共の共著である。(大正十四年五月十日)

彼の富士山頂での仮死の体験は、この第四巻にくわしく描かれているが、それをここに取り出すことはしない。(その刊行を見ないで彼は死んだ。)とこゝろでその翌三十九年正月早々、蘆花夫妻は伊香保に往つて滞在した。そこから在京の友人(注 木下尚江か)にてがみを書いた。その中に――

年として日として天恩にあらざるなきも、昨三十八年程、神の御手の小生の上に加へられたることなかりしを今に及びて痛感す。非戦論の一条、及び家兄に対する態度の一変の如きは、事小なるにあらざるも、小生が身に起りし革命の一端のみ。小生はよい加減の所に踏みとまらんとし切りあげんとしたるも、神は憐こみて姑息こそくの革新を許し玉はず、小生は

追いつめられ、追ひかけられ、揉まれ、たたかれ、水に洗はれ、火にて焼かれ、攻めて攻めて攻めぬかれて、終に全く神のものとなり了んぬ。肉は一たび去年の八月に富士山上に死し、ふるき吾は其十二月に到りて全く死し了りぬ。――

と云っている。この中の「非戦論の一条」とあるのは、日露開戦に当って、非戦論を唱えた内村鑑三、幸徳秋水、堺枯川等が「万朝報」社を連袂辞職したあと、幸徳・堺等の「平民新聞」が堺を通して蘆花に、その非戦号に寄書を求めてきたのに対して、彼が

「非戦号に書けとの来論は甚だ迷惑を感じ候。実を云へば小生は絶対的非戦論者にあらず、吾儘な子供（露国のこと）は其手を引握って一腕の要あるを認むるものに候。何者か兩而なからむ。ナイルの氾濫は埃及の豊饒也。日露戦争は日露和親の唯一手段にあらざらんや。他の点に於て趣味相近しと信ずる諸兄と此点に於て協力する能はざるは小生の遺憾とする所に候」

と返事した事実のほかに、それに該当する事実は見出せない。（小説では内村は外村、幸徳は行徳、堺は佐川となっている。）また「家兄に対する態度の一変」とあるのは、三十八年の十二月に、青山に兄猪一郎（小説では寅一）を訪い、三年間の疎隔をわびた事実を指している。彼は幸徳、堺等とは近いようで実は遠く、兄猪一郎とは遠いようで実は近い、と云わねばならぬ。やはり「血は争えぬ」と云うべきか。彼等兄弟は結局カインとアベルではありえなかつた。

六 夏目漱石「三四郎」

夏目漱石の「三四郎」の中にでてくる話であるが、熊本の高等学校を卒業した小川三四郎は、東京の大学に入るべく、いま上京の汽車の中にいる。そこで顔見知りになった男を、彼はその風体ふうたいからみて中学校の教師だろうと推定した。――

ところへ例の男（中学校の教師と推定した男）が首を後から出して、

「まだ出そうもないのですかね」と言いながら、今行き過ぎた西洋の夫婦を一寸見て、

「ああ美しい」と小声に云って、すぐに生欠伸なまあくびをした。三四郎は自分が如何にも田舎ものらしいのに気が着いて早速首を引き込めて着座した。男もつづいて席に返った。そうして「どうも西洋人は美しいですね」と云った。

三四郎は別段の答も出ないので、只ただはあと受けて笑っていた。すると髭ひげの男は

「御互に憐れだなあ」と云い出した。「こんな顔をして、こんなに弱よわっていては、いくら日露戦争に勝って、一等国になっても駄目ですね。尤も建物を見ても庭園を見ても、いずれも顔相応あつらひの所だが――あなたは東京が始めてなら、まだ富士山を見た事がないでしょう。今に見えるから御覧なさい。あれが日本一の名物だ。あれよりほかに自慢するものは

何もない。ところがその富士山は天然自然に昔からあったものなんだから仕方がない。我々が拵こしらえたものじゃない」と云って又にやにや笑っている。三四郎は日露戦争以後こんな人間に出逢うとは思っても寄らなかつた。どうも日本人じゃない様な気がする。……(三四郎は)相手になるのを已やめて黙もってしまった。すると男が、こう云った。

「熊本より東京は広い、東京より日本は広い、日本より……」で一寸切ったが、三四郎の顔を見ると耳を傾けている。

「日本より頭の中の方が広いでしょう」と云った。「囚とらわれちゃ駄目だ。いくら日本の為を思つたつて、鼠ひい鼠まの引倒しになるばかりだ」

この言葉を聞いた時、三四郎は真実に熊本を出た様な気がした。同時に熊本に居た時の自分は非常に卑怯であつたと悟つた。――

大学へ通うようになった三四郎は、ある日車中の男が広田という「高等学校の先生」であることを知つた。偶然路上で出会つて、先生の所に寄食している学友の与次郎と先生とを案内して、先生の引越先の貸家を見ることになった。先生は彼に話しかける。――

「東京はどうです」

「ええ……」

「広いばかりで汚ない所でしょう」

「ええ……」

「富士山に比較する様なものは何にもないでしょう」

三四郎は富士山のことをまるで忘れていた。広田先生の注意によって汽車の窓から始めて眺めた富士山は、考え出すと、成程崇高なものである。ただ今自分の頭の中にごたごたしている世相とはとても比較にならない。三四郎はあの時の印象を何時の間にか取り落していたのを恥しく思った。すると、

「君、不二山を醜訳して見た事がありますか」と意外な質問を放たれた。

「醜訳とは……」

「自然を醜訳するとみんな人間に化けてしまうから面白い。崇高だとか偉大だとか雄壮だとか」

三四郎は醜訳の意味を了した。

「みんな人格上の言葉になる。人格上の言葉に醜訳する事の出来ない輩もつには、自然がが毫ごうも人格上の感化を与えていない」

三四郎はまだあとが有るかと思つて、黙つて聞いていた。ところが広田さんはそれで已めてしまった。――

広田先生の「富士山のほかに自慢するものがない。しかしそれは天然自然のもので我々がこしらえたものではない」という意見は、漱石自身の意見でもある。「三四郎」は明治四十一年に書かれたが、同四十四年の講演「現代日本の開化」でも同様のことを云っているのである。漱石には歴史感覚が欠けている。だから彼はここで大事なことを見落している。日本人は久しい間富士山を自慢することを知らなかったのである。すべてに於いて異朝に頭が上がらなかった。ようやく、いくらか異朝の前に頭を上げるようになった近世初頭に（注）、日本人は、その頭を雲の上に出している富士山をあらためて見出して、自分等のあるべき姿をそれに託したのである。「万邦無比」と威張ることはないが、日本の象徴として、それを赤人とともに讃えることは然るべきことである。「ドイツに勝るものぞなき」は困るが、ライン河をドイツの象徴として愛することは同感できることである。

（注）「狂言「入間川」に「三国にかくれもない名山」とあり、「慶長見聞録」に、「三国無双の名山」とある。

七 谷川徹三「感傷と反省」

谷川徹三氏のこの本の序は、大正十三年十二月二十六日附である。ぼくは昭和五、六年ごろこの本を手にした、と記憶する。どちらを見てもマルクスのエピゴーネンばかりの殺風景な空気の中で、この本は、ぼくの心に少なからぬ潤^{うる}おいを与えてくれた。それは、マルクシズムを、声を大にして批判するものではなく、低い声でたしなめる、と云ったものである。彼はこの本の中の「夜」というエッセイで云っている。――

我々は結局、次のようにいはねばならぬ。社会主義は一つのウィー（Weie 如何に）である、所謂科学的社会主義は昼のウィーである。我々は昼の一つのウィーとしてその理論の正しさを認める。しかしそれが昼の一つのウィーである限り、その正しさは一面の正しさに過ぎない。我々はそれに対立し、またそれを超越する立場をも有する。観念は観念の独自の原理を有し、内部は内部の独自の世界を有する。「夜」はその自由なる世界を有する。その自由なる世界に対して社会主義は、猿が人間に対して有する権利を有するにすぎない。アミエルは彼にとって「野心や闘争や憎悪など、すべてたましひを分散させ、それを外的事物や目的などの奴隷とさせるものが一種の原始的な恐怖を懐かせた」ことを語って

あるが、かかるたましひに対しては、社会主義はその權威を有しえぬのである。——さて、主題に入ろう。この本の最初のエッセイは、「山—不二を中心とした一考察」である。ぼくはこのエッセイの論旨をていねいに紹介するつもりはない。ぼくの関心事は一つのことである。若い世代は、富士山よりもアルプスに志向しているということである。それは、日本的・伝統的なものよりも、それ以外の、特にヨーロッパ的なものに惹かれていた、明治・大正の一般情勢のあらわれにほかならなかった。その点に触れた氏の言を抽出すること、今は満足しなければならぬ。——

日本の民族的気質の特色として、人々の挙げる単純、温雅、淡泊、潔癖、勇氣等々は、その（不二）天を突く凜乎たる頂と、端正なる輪廓と、四時の白雪と、悠揚たる裾野の傾斜とのうちに、あきらかに看取される。そしてそれと共に、日本人に、深く大いなる思弁と意志と情熱の欠如せることは、不二の孤立に、アルプスやヒマラヤの深さと大きさと変化のないことに類比できるであろう。それ故に近代西欧の文化の影響の下にある人々は、彼等が不二を省みない如くに、伝統の思想と芸術とを省みないのである。彼等はただ、深さ、大きさ、変化、多様を求め、この国に於て新しい文化を開拓しようとする。新時代の人々は不二へは赴かずして、挙つて日本アルプスへ赴くのである。しかし人は、空しい心を以て新たに不二の前に立つとき、必ずやその独自の美しさに驚くであろう。北斎の「凱風快晴」

はこの驚きをやや伝えてゐる。我々は同じ空しい心を以て、新たにこの国の伝統の文化の前に立つとき、それと同じ思ひを抱かないであらうか。日本にはダンテはゐない。カントもゲーテもゐない。しかし日本は世界に類のない短い詩形のうちに宇宙の秘密の心を、おどろくべき深さを以て歌つた人を有し、一枚の紙に数筆をもつて山水の神氣漂渺たるを描いた人を有し、また数十坪の庭に数箇の巖石のみをもつて、よく大海の島嶼を現出せしめた人を有する。ここに日本の文化の独自性があり、そして不二の美の独自性がある。――

谷川氏の言を摘記しつつ思うことは少くない。新らしいものといへば、すぐに飛びつくのもまた日本人の独自性ではないか。氏が日本文化の独自性の例に挙げてゐる、俳句、水墨画、枯山水なども、それまでの日本の伝統の延長ではない。しかもそこにかえて日本的なものがある。不二を離れること遠きものほど、かえて不二に惹きつけられる。富士の全貌をとらえて詩に詠んだ大智祖継（肥後の人）に滞元十一年の経験があることは偶然ではあるまい。

富士山

巍然^{スベテ}独露^テ白雲間。

八面^{スル}総無^ク向背^{スル}処^一。

雪氣^レ誰^カ人^ガ不^レ覺^ユ寒^サ。

從^レ空^{ヨリ}突出^ス与^ニ人^ミ看^ム。

八 戦後Ⅱ出^{いで}隆^{たかし}とS・カンドーⅡ

ペリー提督の黒船を真先にむかえた富士山は、第二の黒船とも云うべきB29の東道の主を余儀なくされた。そしてついに昭和二十年八月十五日をむかえた。国威地に墮ちるとともに、その象徴たるこの山の見方も一変した。それはこの山にとって未曾有の経験であった。果然、コンミニュニスト・出^い隆^{たかし}氏の「富士談義」が発表された。(「新潮」昭和二十三年十一月号・十二月号)その言い分を、一言につづめるならば、支配階級が、それを神聖なものとして祭り上げることが、自分自身を祭り上げることになり、人民支配に役立たせた富士山を、支配階級の手から人民の手に奪い取ることによってのみ、真にその美を美として、これを愛しうる、というのである。富士山は政治的に利用されてきた、というわけだが、そういうこと自体がきわめて政治的である。およそ美というものは政治的な目には映らぬものである。つまり出氏は、富士山を美しとする伝統によりすがりながら、それを政治的に利用しているのにはかならぬ。これと対照的なのが、S・カンドー師の「富士山の話―自殺志願の大学生と語る―」(朝日新聞・昭和二十五年九月二十七日号)である。そのあちこちに省略の手を加えて(師の文章をそこなうことを惧れつつ)、左に書き出す。

この夏休み、十八年ぶりて下吉田から河口湖、精進湖の方へ行く道を景色にうたれながらドライブした。吉田あたりから鳴沢村あたりまでの富士山は実にすばらしい。どこからみても富士山は立派だが吉田から河口への道から見上げる姿ほど心を動かされるものはない。圧倒的な高さなのに、その傾斜は、人間の弱さのために出来たかのように、やわらかく、楽々とつぺんまで行けそうな気がするからだと思った。

美しい本立に囲まれた小さなお宮の前で車をとめて、そのすばらしい富士を眺めていると、深くうなだれて歩いてくる大学生がいる。「これから登山するの？」と聞くと、「登山なんかする勇氣はない」という。そこへ腰を下していろいろ語った末に「実は自殺しようと思つてすぐそばの滝で水を浴びて来たところだ」とどもりがちに打明けた。「なぜ自殺しようという純虚無的な心境で、滝の水など浴びたのです」ときくと、「死ぬ前に清めの水が浴びたかった」というのである。死んで後に残るのは骨ばかりだと考える青年だから自殺しようというのである。水を浴びることが魂を清めるといふ象徴的な意味なら、ともかく唯物論者にふさわしくない態度だ——と思つたが、もちろんそう口には出さなかつた。……私はただ富士山の荘嚴な美しさだけを語り、彼の心をそっちに向けさせようと試みた。そしてはからずも第一次大戦で体験した出来事を思い出した。(少年保護監察所を出たばかりの若い兵士を大尉としての自分があずかることになった。その兵士は生まれてから今日までバリのツイオレ通

りの六階より上を見たことがなかった。ある日歩哨に立って見上げる空のすばらしさに打たれてから、見違えるように人がかわり、やがて立派な美しい最期を遂げた。―要約)

このことを思い出しながら、私は青年の目を荘厳な紫の富士山に向けさせようと努めた。彼の面には思いなしに感動の色が浮んでくるようであった。「君、こうやって黙って見ていると、いい俳句でも作れそうじゃないか」などいっているうちに、じつと富士をみつめている彼の目に次第に強く自分をとりもどす力がわいてくることが判った。五分、十分―青年は非常に静かになり、ほとんど落ついた様子を取り返したように見えた。私は青年と友だちになって別れた。数日後彼は次のような俳句を送ってきた。

うるわしく裾引く峰や雲涼し

秀嶺のせまりて崇^{たか}く風冷ゆる

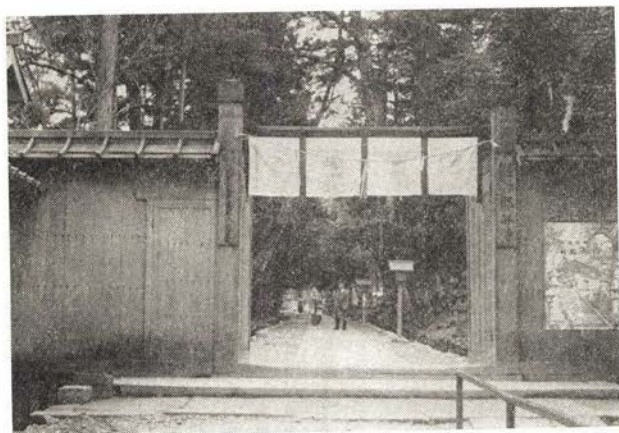
秀嶺や湖水の朝の權^か遠し

現代の多くの若い日本人は一種の劣等感の犠牲者となっているのではあるまいか。今まで尊重していたすべてが急に無価値になったかのように考えることは本当に嘆かわしい。なるほど昔の人は与えられた境遇のなかに、わけなく統一ある生活を営むことが出来たろう。そして終戦後の日本ではいろんな苦しみや矛盾がおし寄せて、日本人に与えられた運を操ることがむずかしくなって来たことに違いなからう。……今まで価値あるものとされ

たすべてが、敗戦によって無価値になったという考えは改めなければならぬ。日本人の美点は依然して美点である。人間の世界では時代によっていくらか変化するものがあるが、人間そのものが本質的に変えることは決してない。——
異国人にしてこの言あり。ぼくは喜ぶべきか悲しむべきかを知らない。

(昭和二十五年十月稿・四十五年三月改稿)

第三編
花山院とその系譜



那谷寺参道

第三編 花山院とその系譜

はじめに

花山院といつても今は知る人も少ないであろうが、かつては西国三十三所順礼の創始者として、また順礼の御詠歌の作者として、民衆にはなつかしい存在であった。むろん院が三十三所をきめたわけでもなく、御詠歌は院の御製ではないが、皇位を退いてから諸所方々の霊場を巡歴し、そこで歌をよんでいるから、このような伝えの附会されるだけの理由はあるわけである。奥の細道にも

「山中のいでゆに行くほど、白根が嶽後にみなしてあゆむ。左の山際に観音堂あり。花山の法皇三十三所の順礼とげさせ給ひて後、大慈大悲の像を安置し給ひて那谷なたと名付け給ふとや。那智谷汲の二字をわかち侍りはべしとぞ。奇石さまざまに、古松植多ならべ、萱ぶきの小堂岩の上に造りかけて、殊勝の地なり

石山の石より白し秋の風」

とある。院がこの辺（加賀国）まで足跡をとどめたかどうかはわからぬとしても、このすぐ



越前（福井県北東部） 三国湊

近くの、越前の三国湊でよまれた歌のあるところからして、まるきりあとかたのないことではなさそうである。

自分が花山院のことに心をとめるようになったのは、院にまつわる、「大鏡」のいたましい記述に刺激されたことによるのであるが、そこをくわしく追求してみたら、歴史のかくれているものがいろいろ取り出されてくるのではないか、という期待がかきたてられたのである。それは何かとらえられそうであり、たしかな手ごたえはいまのところないのであるが、書きついでゆく間にあらわれてくるものを待ちもうけたのである。

一 血 縁

花山院の父は六十三代冷泉院である。冷泉院は六十二代村上天皇の第二皇子で、十八歳で位をついだのである。ここですぐ氣のつくのは、第一皇子はどうしたのか、ということがある。御多聞にもれず、それは生母の關係であつて、第一皇子の母は大納言民部卿藤原元方の女であり、冷泉院の母は、右大臣師輔の女（安子）であつた。その母方の勢力に押されて第二皇子の冷泉院が父帝のあとをつぐこととなつた。そして冷泉院のあとをついだのも同腹の弟円融院である。

ところで冷泉院は狂氣であつた、と伝えられる。その遺伝かどうか、花山院の精神も普通ではなかつたらしい。また花山院の異腹の弟（三条院）は明きめくらであつた。ここには何か異常な血のにおいがする。愚管抄は、冷泉院の兄第一皇子（広平親王）が弟に東宮の位をうばわれて恨み死じにをしたそのタタリでもあろうか、とのべているが、そのような遺恨を必然的に伴う無理な政略結婚の集積の結果とみられるのである。余談になるが、冷泉院の生母というひとは、おそろしいまでに氣丈でわがままなひとであつた。ある日清涼殿で村上天皇がほかの女御（師輔の弟師尹女房子）と会つていた。安子中宮は壁に穴をあけ、のぞき見をし

た、ところがその女の美貌に逆上して、その穴ごしにカワラケの破片をなげつけた。わがま
まとか勝ち気とかというには度がすぎていはしまいか。冷泉院の狂気はこの母の気をうけた
とも思われるのである。

それはさておき、天皇をめぐる婚姻がいかにも派閥の間でなされていたか。花山院に
即していえば、父冷泉院の生母は、藤原師輔の女であり、兼家（道長の父）の同腹の妹であ
る。また花山院の生母すなわち冷泉院女御（懐子）は太政大臣伊尹（これま師輔子）の女であり、兼
家の姪に当る。伊尹と兼家とは同腹の兄弟なのである。してみると、花山院にとっては、兼
家は、父のおじであるとともに母のおじでもあり、兼家とは二重の血のつながりがある。花
山院は、この兼家の政略のいけにえとなって退位、出家するわけであるが、実をいえば院が
皇位に即きえたのは、さつき述べたように、父冷泉院が兼家一家のバック・アップによって
兄皇子をしりぞけて即位したからであり、院を皇位につけた、その同じ力によって皇位から
押しやられたのにほかならない。

この辺の事情をたしかめるために、もう一事つけ加えるならば、冷泉院の次は円融院が継
がれたことは前にのべたが、この両院の間にもう一人、この両院と同腹の皇子（為平親王）
があった。この同腹三兄弟の二人は皇位に即いたのに、中の一人だけはなぜその外におかれ
たのか。それは為平親王の妃が、兼家のライバルであり、兼家一族によって葬られた源高明

(村上帝弟)の女であったからである。このようにして、皇位に即く、ということとは藤原氏の有力者との血のつながりにおいて、異質の要素の少しもまじらぬことが要件とされた。このような不自然な婚姻関係が血の頽廃を結果しないわけではない。それが冷泉院や花山院の異常な精神をひきおこした根本のものではなからうか。

二 側近の女性

花山院が即位したのは永観二年(九八四)の十月、十七才のときであった。そして四人の女性が相ついで側近に送られた。

「栄華物語」によれば、まず参上したのは関白頼忠の女であり、つぎは式部卿の宮為平親王の女(院とはイトコどうし)。このひとの母は、前にふれた源高明の女である。次には権大納言左大将朝光の女が、そして最後に、年がかわってから、大納言為光(兼家の異母弟)の女が入内した、という。

ところが、「日本紀略」によると、これとは順序がちがい、一番目は為光女、次に頼忠女と朝光女とは同時、おしまいに、しかも為光女死後に為平女が女御になったと記載している。「栄華物語」は、為光女の入内を院即位の翌年(寛和元年)になってからのこととし、その同じ

年のうちに妊娠八月でなくなつた、とばかりでこまかな月日は記していない。一方、「日本紀略」は、その入内は天皇即位直後の永観二年十一月七日、卒年は翌寛和元年七月十八日と明記してあるので、このほうの記述に従うべきか。ところで、公卿補任によつて、院即位当時の朝廷首脳部の顔触れをみると左のとおりである。

関白太政大臣 藤原頼忠(六十一歳)

左大臣 源雅信(六十五歳)

右大臣 藤兼家(五十六歳)

大納言 藤為光(四十三歳)

源重信(六十三歳)

権大納言 藤朝光(三十四歳)

同濟時(四十四歳)

さてこの顔ぶれから何が知られるか。このうち藤原氏以外のものとしては源雅信と同重信の名が見える。この二人は兄弟であつて、宇多天皇の皇孫であり、皇子、皇孫が高位についた前代のなごりで、形式的にまつりあげられていたにすぎない。もし彼等にして実力と野望

とがあるとするれば、源高明のように、とつくに藤原一族によって消されていたにちがいない。そこでこの二老人をはぶくと実力者五名のうち三名すなわち頼忠、為光、朝光がそれぞれその女を花山院の側近に送りこんでいるわけである。権大納言として朝光とならんでいる濟時とてこの点において人後におちるものではないが、「榮華物語」によると、さきに入内した朝光の女と院との間がおもしろくないというので、自分の女もそうあっては、とおそれをなしてさしひかえたというのである。そして濟時はその女を、花山院の弟（のちの三条院）にさし向けたのである。この濟時というのは安子中宮にカワラケの破片をぶつけられた女御（芳子）の兄なのである。さてそれなら、これら五名のうちの最有力者兼家はどうか。彼には別に期するところがあったのである。というのは彼の第一女（超子）と冷泉院との間には、花山院即位の年九つの皇子（のちの六十七代三条院）があり、また第二女（詮子）と円融院との間の五つになる皇子（のちの六十六代一条院）は東宮であった。しかも自分はすでに五十六という高齡である。天下をねらうのに、別に期するところがなければならぬのは目に見えておる。

以上実力者五人は相互にきわめて近親の間柄にある。それを一目で知るためには、この五名にしぼってその関係を示すと左のごとくである。



花山院の側近にその女を送りこんだ四人のうち三人のことはすんだ。あとは為平親王であるが、「大鏡」によると、このひとは源高明の女と縁組したばかりに冷飯をくわされた。それが人もあろうに、実の甥の花山院に女を送り、自分も始終出入しているので世の人は、そんなことまでしないで、とそしった。しかしその女におつぎ（皇子）が生まれれば、自分の昔の本意もかなうはずであつたらうに、院の出家されたあと、この女は実資（のちの小野宮右大臣）と再婚してしまったという。そして「大鏡」はこれについて、「いとあやしかりし御事どもぞかし」と感想を加えているが、親王の、なにもかもうまくいかないのを同情していつているのか、それとも、生きるために恥も外聞もなくジタバタするのを見苦しいといっているのか、ハッキリしない。

三 政治的環境

さて、このようにみてくると、側近の四人の女性はそれぞれの派閥代表といったかっこうであるわけで、派閥といつてもお互いに近親の關係にあることは前に図示したとおりである。そして、これらの女性は院自身とも多かれ少なかれ、血縁につながっておる。頼忠女が一番遠く、次に朝光女と為光女とは同じ程度、為平女はごく近く、イトコである。このよう
な、いきぐるしいほどのせまい範圍内の婚姻關係しか許されなかつたのである。

これにひきかえて、かの有力者たちのほうはどうか。今、兼家を例にとろう。「大鏡」兼家伝でわかるとところだけですませるが、彼には四女五男があつた。

「女二ところ、男三ところは、撰津守藤原中正のぬしの御女の腹におはします」

という。この二人の女というのは超子（冷泉后、三条母）と詮子（円融后、一条母）であり、男三ところとは長男道隆、三男道兼、五男道長である。それからあと二人の女のうち一人は、

「女院（詮子）の後の宮におはしましたしをりの宣旨にておはしき」

とあつて、その母のことは記していない。もう一人は

「対の御方と聞えし御腹のむすめ」

とある。対の御方は藤原国章の女である。三男と四男はどうかというところ、

「次郎君は、陸奥守倫寧ぬしの女の腹におはせし君なり」

とあって、右大将道綱のことであり、母は有名な「かげろう日記」の著者である。また、

「四郎は堀川治部少輔とて、世のしれものにて、まじらひせで止み給ひぬと聞え侍りし」

とあって、母のことにはふれていない。つまり兼家には少くとも五人の妻妾があったことはわかるが、うち二人は素性不明でおそらくうに足らぬ身分のものであろうし、ほかの三人は、うち二人は受領（国の守）であり、一人（国章）はごく晩年に参議になって公卿の末端にとりついたにすぎない。その前には太宰小式であった。いずれも兼家からみれば段ちがいの身分である。地方官は財力はあつたらしいから、その点を見込まれたのかもしれない。とにかく近親との縁組みはまったく見られないのである。

このようにして彼は子孫の繁昌をはかりつつ、次々とその子女を宮中に送りこんで栄達の足がかりを固めた。考えてみれば、側近に押しやられる女たちは、一種の人身御供であろうが、しかしそれらの女たちを押しつけられ、適当な代つぎができればジャマ者扱いを受ける天皇もまた藤原閥族の人身御供であったといわねばならない。この二重のいけにえの血の上に咲いたものが藤原氏の栄華であった。

「神皇正統記」にこんなことをいっている。――

天皇の尊号は村上天皇までで、冷泉院からは、その御住居の名をとって何々院とよばれるようになった。これは怪しからんことではないか。

というのである。いかにも、天皇はなくなってしまった、いいかえれば天皇は、天皇にしてその実天皇ならざる存在と化していたのである。天皇の権力を行使するものとして、摂政関白がとってかわったのである。冷泉院は狂気であった。そのために存位わずかに三年（正徳二年）で退位している。それならはじめから即位しなればよさそうなものである。かわりはほかに存在したこと、すでに見たとおりである。しかし、天皇ならざる天皇としての条件にはかえってはまっていたのである。そのおかげで摂関時代が開かれた。そしてこれをきっかけとして、これからあとの藤原有力者の政治的努力は、この天皇ならざる天皇をこしらえ、摂政関白の地位を持統的に確保することにかかっていた。つまり、合法的に天皇を政治の外に追いやってしまった。実質的には天皇はいなくなったのである。

ちなみに、冷泉院以後道長のころまでの歴代の即位の年齢と摂関の名を掲げておく（天皇が元服すると、原則としては摂政はやめられて関白となる）。

冷泉 十八

関白実頼

摂政実頼

伊尹

円融 十一

関白兼通 頼忠

花山 十七

関白頼忠

一条 七

摂政兼家 道隆

関白道隆 道兼(七日関白)

三条 三十六

道長 摂政に準ず

後一条 九

摂政道長 頼通

関白頼通

後朱雀 二十八

関白頼通

右の内容については、かなり高齢で即位しているケースもあるので、少し分析を加えぬと自分の言っていることに疑念がのこるおそれもあるが、かえって煩わしくなるのでさしひかえよう。

四 出 家(その一)

順序としては、院の在位時代のことには及ばねばならないが、とり立てていうほどのことはない。ただ権中納言義懐というのが万事をとりしきっていた、といえは足りる。この人は、院の生母懐子の同腹の兄であり、その妻は院の愛妃の為光女と同腹の姉であったというわけ

で、院とは切っても切れぬ間柄であった。「大鏡」は、この人のことを文盲と評していたが、それだけに質朴善良の人柄であったらしい。院にとってはこわい伯父さんであると同時に、たよりになり、甘えられる人でもあった。

さて、院の出家は、寛和二年（九八五）六月廿三日の夜のことであった（『栄華物語』は廿二夜としている）。そのときの様子は「大鏡」に活写されているからそれにゆずるが、愛する為光女を失った心の傷手が直接の動機かと思われる。病あつきこの女御を送り出す院の愁歎を描いた「栄華物語」の筆は、「源氏物語」の桐壺帝と更衣（源氏君の母）との最後の別れの場面を思わしめる。あるいはそれによって書いたものであろうか。前にもふれたように、この時、女御は八か月の身重であった。院は同時に二つの愛する生命を失ってしまったわけである。そしてその死後一年にして出家を遂げたことになる。傷心の院をすすめて出家にふみ切らせるのに与って力のあったのは、兼家の子の道兼であった。自分の女の生んだ東宮（のちの一条院）を早く即位させて、自ら摂政たらん、という父兼家の意を汲んだ道兼のたくらむところであるという。「栄華物語」はその事情には全くふれず、にわか院の姿が見失われ、大さわざとなつて、手を分けて探したところ、すでに頭を丸めた院の姿を、宇治花山元慶寺に見出した、といっている。そして義懐と、惟成の弁というのが駆けつけたところ、

「目もつづらかなる小法師にてつゝいゝさせ給へるものか」

とあるのは、目に見えるようである。そして二人は院にしたがって自分たちも遁世をとげるのである。「枕草子」に義懐の法師になったことを惜しんでいる記述がある。

ところで「愚管抄」は道兼の作為だとはいいいながらも、

「昔も今も心ききて謀りごとある人は我とだに不思議の事をも思い寄りつつ為出す事なれ」

と妙なことを言っている。皮肉を言っているのではないとすれば、この系統の出身である著者慈円の身びいきであらうか。道兼はこの時二十六才で、藏人で左少弁を兼ねていたが、ちようどの六月廿三日に藏人頭となったところであった。つまり院の側近にあって、院をたきつけるのに最も都合のよい地位にいたわけである。この道兼が

「自分もお供をしてご一諸に出家します」

といったことが、院の決意を決定的なものにしたのであろう。花山に行き着くと、道兼は、「この変らぬ姿を父に一目見せてすぐ引き返して来ます」

と申しあげた。すると院は

「われをば謀るなりけり」

と泣かれたという（大鏡）。ここでもう一人、院の出家にはたらきかけた人がいた。それは花山寺の厳久法師である。「愚管抄」は

「恵心僧都の道心のころにて巖久僧都と申す人ありける」

といっている。この「道心のころにて」というのは、よくわからぬが、浄土往生を唱えだしたころ、ということでもあろうか。巖久はこの恵心の弟子筋の人であるらしい。(続本朝往生伝)「愚管抄」に、この法師が、朝夕院にこんなことを説いておきかせしたものであろうかとて、

「妻子珍宝王位、命終の時随はず、とか、悉く王位を捨て、また出家に随ひ、大乘の意を発して、常に梵行を修す、など経文にあります。一旦仏道に入れば、あとで思い返すことあつても、御発心の一念はムダになりませぬ。いまの心がほんものならば、とくとく出家を遂げなさいませう」

などである。この法師が道兼と腹をあわせて院を出家へかり立てるたような書きぶりである。そういう下心あつてのことかどうかは別として、これらのことばが傷心の若き院の心をうごかしたことは考えられる。というのは、このことばは巖久ひとりのものではなくして、この法師の口をかりて、時代の底にうごいていたものが院によびかけたと思われるからである。恵心(源信)の「往生要集」のつくられたのは、ちょうど院出家の前年であり、また往生伝シリーズのさきがけとも云うべき「日本往生極楽記」(慶滋保胤著)もおなじころ世にあらわれたのであつた。妻子珍宝王位云々の経文は、「栄華物語」にも院の日夜口にしていた

ところ、とあり、「往生要集」に引かれているものである。

ところでこの恵心は、今昔物語などに伝えられているように、年少にして宮中での講義を拜命し、その功によって褒美を賜わった、その光榮を母にわかとうとしたところ、かえって母の叱責にあい、翻然として凡夫救済の道にはげんだ、といわれる人である。ここにわれわれは、価値意識の微妙な転換を感じるのである。貴族社会の価値体系の上に、もしくはその外に、それとはちがった価値の求められ出した時期である、といえよう。

院の出家は、この時代精神と交わることなき、偶発的な出来事ではあるまい。つまり、天皇が在位のまま出家するという、この未曾有の事件は兼家父子の謀計という政治的事件である、というよりも、実は思想的なできごとであった、といわねばならない。従って、院をうごかしたものはほかのものにもはたらきかけずにはいかなかった。院をうごかしたものは、従来の価値体系から離れたところに、別の価値を求めることであり、それを発心とよぶなら、この時代は発心の季節であったのである。院と同時代の発心者についてのべることによって、この点をさらに明らかにしよう。

五 出 家(その二)

「拾遺和歌集」は、いうまでもなく、「古今」「後撰」につぐ三番目の勅撰和歌集である。花山院親撰とも、藤原公任撰とも云われる。いずれにしても、院のいきのかかったものであることはうたがえない。公任という人は、関白頼忠の息男で、院の女御となったひとの同腹の兄であるから、院とはごく親近の間柄にある。だから、どちらの撰かきめかねるのなら、共撰としておいてさしつかえない。この問題はまたあとで考えるところとして、この「拾遺集」にはこの時代の発心出家した知名人がほぼ顔をそろえている。それらを遁世の年代順に列举すると次のとおりである。

(1) 藤原高光 この人は、院の愛妃の父為光の同腹の兄で、廿三歳、少将のときに妻子を捨てて遁世した。それは院の生まれる以前のことであり、その没年もあきらかではないが、院とその生を同じうした年月のあったことはいないものであるから、院の発心出家に、その影響が及ばなかったとはいえない。この集には、

法師にならむと思ひ立ち侍りけるころ月を見侍りて

かくばかり経がたく見ゆる世の中にうらやましくもすめる月かな

とあるほか、おなじく法師になろうとするころよんだ別の歌がのせられている。「多武峯少将物語」は、この人の出家のとき及びその後の様子を描いたものであるが、さきごろ玉井幸

助氏の研究注釈が刊行されて、よみやすいものになったことはありがたいことであった。

(2) 慶滋保胤 「日本往生極楽記」の著者であることはすでにふれておいた。当代きつての学者で、「方丈記」がそれに模したといわれる「池亭記」は有名である。その出家は寛和二年四月というから院の出家に先立つこと、わずかに二か月である。法名寂心。出家後諸方を遍歴した点も院に似ている。集に

法師にならむとて出でける時に、家の柱にかきつけて侍りける
と詞書のある歌がある。

(3) 大江定基 大江というからには学者の家柄である。三河守となったが、永延二年に出家。前掲の寂心に師事して寂照と号す。のち源信の教えを受けたという。永延二年は院出家の年の翌々年である。集には、この人の渡唐のはなむけとした公任の歌がある。その渡唐は長保五年（二〇〇三）のこと。幸田露伴晩年の傑作「連環記」はこの人を扱ったものである。

(4) 藤原統理 「拾遺集」に

少納言藤原統理に年ごろちぎること侍りけるを、志賀にて出家し侍るとききて言い遣しける

と詞書した公任の歌がある。統理自身の歌は「後拾遺」にあって、

三条院、東宮と申しける時、法師になりて、宮のうちに奉りける

と詞書があり、東宮であったころの三条院に近侍していたことが察せられる。「御堂関白日

記」長保元年三月廿四日の条に

少納言統理来云。廿七日上^リ多武峯^{タケノ}。可^レ出家^一。是本意云々。召^レ前。賜^ニ木蓮子念数^一。

とある。

(5) 源成信及び藤原重家 この二人がそろって三井寺に向って家出したのは長保三年（一

〇〇二）の二月である。成信は左大臣道長の養子（式部卿致平親王子）であり、重家は右大臣顯

光の息男である。その美貌のゆえに、それぞれテル中将、ヒカル少将とあだ名されていたと

いう。出家のときは廿三と廿五であった。集には、

成信重家ら出家し侍りけるころ、左大弁行成がもとにいひつかはしける

という公任の歌がある。その歌

思ひ知る人もありける世の中をいつをいつとて過すなるらむ

(6) 藤原成房 この人は、院の伯父義懐の息男で、出家の年時はしらべていないが、「大

鏡」には「入道中将成房」とある。おそらく出家したときは年若かったであろう。集には、成房朝臣法師にならむとて飯室にまかりて云々の詞書ある歌が出ている。父義懐が院に殉じて出家して行ったところも同じ飯室であった。飯室は、叡山横川の別所である。

以上が「拾遺集」にその名をとどめている発心者の列伝であるが、これにもう一人加えておきたい。それは院のなくなったあとの事で、むろん「拾遺集」にはその名は出ていないのであるが、人もあろうに今を時めく道長のふところから飛び去っていった可憐な魂があった。それは道長の子顕信で、にわかに出家して叡山にのぼった。年は十九で、院出家のときの年齢と同じである。顕信は、道長のあとをついだ頼通、教通の異腹の兄弟である。彼の出家のときの様子は、「大鏡」によく描かれていて、心にしみるくだりの一つである。

このような事例によって気づかされることは、院の生きた時代の空気である。それは発心の催しともいふべき気配であった。これらの人々は、鴨長明の「発心集」の中のスターであり、高光、定基、成信、重家についてはその発心の動機が物語られているのではあるが、彼等に固有の、格別の外的理由は見出せないのである。さきに見たように、その多くは年若く、その身分にも不足のない人々である。一口に言って、感ずるところあって、というほか

はない。かれらは何を感じたのか。このことはすでにのべたわけであるが、もう一つ、そのことをたしかめるために増賀を引き合いに出したい。

「今昔物語」は、源信僧都の母が、朝廷のおほめにあずかって喜んでゐるわが子を叱責することばとして、増賀上人のような人になれ、といったと伝えている。また、保胤はこの上人の叡山横川^{よかわ}在住時代の弟子であり、統理も多武峯にあった上人の門に入った。高光にとつては上人は、かれの受戒の師であり、高光にすすめられて上人は横川から大和多武峯に移住したと考えられる。これらの事実だけからみても、この発心の季節というものが、この増賀ときりはなして考えられぬことがわかるであろう。増賀といえは、すぐさま奇行の人ということが頭に浮かぶ。奇行とは何か、非常識な行為ということである。それは、時代価値観念への叛逆ということにはかならない。いろんな話が伝えられているが、こんな話がある。

宮中での論議のあと、饗^{ご馳走}を庭に投げる。それを乞食があつまって取り合つて食うならわしがあった。増賀は走り出て乞食の群に入り、それを拾つて食つた。大衆は驚いた、「気でも狂つたのか」彼曰^{いは}く「あなた方こそ気が狂つているのだ」。また、宮中からお召しがあるとお出かけて行って、悪口雑言のかぎりを尽くしてさっさと引きあげる。(大鏡)という具合。このような非常識の人が、強く人々の心を引きつけていたのである。この増賀や源信などの出現は、皇室や高級貴族に奉仕していた仏教に転回をもたらしした。此岸的価値

はその絶対性を失って、彼岸的価値の保障を要求せざるをえなくなつた。敏感な若い院の心をとらえたものは、このような時代感情の触手にほかならなかつた。このようにして出家遁世した院は、魂の安息地を求めて漂泊の旅に出立したのである。

六 遍 歴(その一)

出家後、院はどうしたか。「栄華物語」によると、院に殉じて出家した伯父義懐は飯室にこもってしまつて、おそばについていけないし、もうひとりだけの惟成入道は、

「聖よりもけにへちまさまつてめでたく行ひてあり」

というありさま。そして院自身は、その冬叡山で受戒し、やがて熊野に詣でたまま、いまだにお帰りがない。

「いかでかかる御ありきをしならはせ給ひけん、とあさましうあはれに、かたじけなかりける御宿世と見えたり」

とあつて、院の御ありきを異常のこととしている。「日本紀略」によると、院は出家後すぐ、播磨書写山の性空のところへ赴いたことになっている。後年(院三十五歳)再度性空をたずねているところからして、この性空がなにものであるか、を知ることが、院の求めたものが何

であったか、をうかがう手がかりとなるであろう。「後拾遺和歌集」に

書写のひじりにあひに播磨国におはしまして明石といふ所の月を御覧して

月影は旅の空とてかはらねどなほ都のみ恋しきやなど

とあるのは、出家後はじめて性空をたずねたときの詠であろうか。

ところで、出家入山というのはふつうであるが、遍歴というのは、めずらしい例ではなからうか。さればこそ、後世、院をもって三十三所巡礼の創始者とすることにもなったのであろう。至尊の身をもって諸方を遍歴した前例としてわずかに宇多法皇を見出すことができ。事は「大鏡」にも出ているが、はやく「大和物語」の伝えるところである。

法皇はみぐしおろしてのち、「所々山ぶみ」したもうた。備前椽橋良利というのが、頭おろし名を寛蓮とあらためてお供をした。内裏では困ったことに思つて、少将中将などを差しむけるが、それらをはぐらかしつつ旅をつづける。一夜和泉国日根というところにとまった。いと心ほそくかすかにおわしますことを思ひて悲しく、日根ということを歌によめ、とのことで寛蓮が

「ふるさとのたひねの夢に見えつるはうらみやすらむまたと問はねば」とよんだ、とある。「大鏡」のほうでは

肥前の椽橋良利、殿上にさぶらひける、入道して修行の御供にもこれのみぞつかうまつり

ける。されば熊野にても、日根といふ所にて、旅寝の夢に見えつるは、ともよむぞかしとあつて、日根は、熊野への途次通過したところになつてゐる。「扶桑略記」の延喜七年に法皇熊野詣での記事がある。「後撰和歌集」の七条の後の歌の詞書には、

法皇はじめて御ぐしおろし給ひて山ぶみし給ふあひだ、后をはじめ奉りて女御更衣なほひとつ院にさぶらひ給ひける。三年といふになむみかど帰りおはしましける云々
とあつて、法皇の遍歴は三年にわたつたことがわかる。

法皇は在位十年、三十一で皇位を十三歳の第一皇子（醍醐天皇）にゆずり、落飾されたのである。「扶桑略記」所引の御記によると、十七歳のときすでに出家の意志があつたが母后になだめられて実現しなかつた、という。してみると、第一皇子の元服をまつて、その素志を遂げた、とみられるのである。「大和物語」の記述の暗示するところからして、法皇の遍歴は法皇としての身分をになつてのものではなく、それからはなれて、一個の人間にかえつてのものであつたことが察せられるのである。

浄蔵法師というひとは、この宇多法皇に愛されたひとで、十九のときから三年間、横川にひきこもつて修行したあと、熊野や白山などにわけ入つて難行苦行をしたといわれる。（大法師浄蔵伝）かれが七十四歳でなくなつた康保元年といふのは、花山院の生まれる四年前である。

花山院の遍歴は、この宇多法皇のあとを追うものであった。それは既存の権威からではなくて、一個の人間としての、あらたな権威を自らの手でかちとろうとすることであった。院が性空を慕ったのも、そのような権威がそこに実在する、と信じたからであろう。「今昔物語」の説話や「性空上人伝」などによると、このひとは、増賀とおなじように、既存の権威に接近することをきらった人である。そしてその人となりの特徴づけるものは、その神通力であった。多武峯にあった増賀が上紙をほしがっていることを、遠方において感知した性空は、ただちに増賀に上紙を送り届けた、増賀感じ入って、性空はそれ六根を淨うするものか、と言った、という話が「古事談」にある。

「つれづれ草」には、この性空が、豆がらに焼かれる豆と、豆を焼く豆がらの対話を聞きとった話が出ている。性空といえは神通力とむすびつけられて伝えられていたのである。花山院の熊野行にこの性空が供をしたという俗伝があるが、それは別にしても、院が性空の精神にみちびかれて遍歴に出たことはうたがわれぬのである。院の求めたものは、人間精神の威力ともいふべきものであったと思われる。院は、源信の凡夫往生のみちよりも性空的な、聖者のみちにひきよせられたといえるであろう。

この花山院のころから八九十年のち、院政をはじめたといわれる白河院が熊野詣でをさかんに行い、「愚管抄」に

熊野まうでといふことはじまりて、度々まゐらせおはしましける

とある。このあと、鳥羽院、後白河院が頻繁に熊野路を往来したことはよく知られていることである。

ところで、花山院が遍歴をうちきって都の生活に腰をおちつけてからのことであるが、院が思い出の地熊野に詣でようとしたところ、時の帝、一条院の諫止にあったことがある。これについて、日本交通史の権威新城常三教授は、これと、白河院などの大げさなそれとをいっしょにして、官民の非常な負担をかえりみぬ法外の逸脱行為であるとし、法の上に立つ天皇との感覚のちがいであると批判しているが〔社寺と交通〕、この批判は少くとも宇多法皇や花山院の場合にはあてはまらぬことは多く言うまでもあるまい。一条院の諫止は、向寒の候、からだに障っては、というのが理由であるが、実は、自己の支配している世界の外に出るのをきらう、藤原貴族社会の意識が、一条院を通して発露したものではないか。南都北嶺あたりへ出かけるのならさしつかえなかったであろう。それは決して負担の多少の問題ではなかったのである。既存の権威への奉仕を拒絶した増賀性空の世界に接近した院の行動は、貴族社会の目にあまるものであったにちがいない。

それでは、院のころの熊野とはどんなところであったか、どんなところと考えられていたか。源為憲の「三宝絵詞」が書かれたのは永観二年冬で、ちょうど院の即位した年である。

これは冷泉院第二皇女尊子内親王にささげられたものであり、内親王は実に院と同腹の、一つちがいの姉である。してみると、この絵詞は院の目にもふれたであろう。その序に

飾れる家も罪を結び、家を出でて仏国を求むべし、吉き形も惜しからず、形を捨てて仏身を願ふべし

とあるのを、そのまま院は実践したわけであるが、この中の、熊野八講会を紹介したところは、

紀伊国は南海のきは、熊野郷は奥の郡の村なり。山重なり河多くして、ゆくみちはるかなり云々

ではじめられて、いわば世外の地として描かれているのである。道路に仆れる覚悟なくして、かりそめに思い立って行けるところではなかった。院の、仏国を求め、仏身を願う切なる心のみが、それをあえてしたのである。それはまさに「天路歷程」といってよい。

七 遍 歴（その二）

播磨国書写山に性空をたずねたのち、叡山で受戒した院は、それから間もなく熊野への旅に出られたものかと思われる。ところで、院の出家後二年あまり経った永延二年十月に、院

の叔父円融院が延暦寺に幸したついでに、使を鎌倉に遣わして、花山院を見まわせたことがある（扶桑略記）。この鎌倉というのは、叡山中にあり、長明の「発心集」にも出てくる地名である。これは、受戒後ひきつづいてこの叡山々中にとどまっていたのではなく、遍歴の過程において、しばらく足をとどめていたものであろう。「古今著聞集」に次の記事がある。

花山院、みぐしおろさせ給ひて後、叡山より下らせ給ひけるに、東坂本の辺に、紅梅のいとおもしろう咲きたりけるを、立ち止まらせ給ひてしばし御覽ぜられけり、惟成弁入道、御供に候ひけるが、王位を捨てて御出家あるほどならば、これていのたはぶれたる御ふるまひはあるまじき御事に候、と申し侍りければ、よませ給ひける。

色香をば思ひも入れず梅の花つねならぬ世によそへてぞ見る

この話も、院は受戒してほどなく叡山を下ったものとしてゐるようである。もつとも、この話そのものが事実かどうかは別であつて、この歌は「新古今」にとられてゐるが、そこには「梅の花をみてよめる」とだけある。

それはさておき、院遍歴のあとはいくわしいことはわからぬのである。「大鏡」に

花山院、御出家の本意あり、いみじう行はせ給ひ、修行せさせ給はぬところなし。されば熊野の道に、千里浜というところにて、御心ちそこなはせ給へれば、浜づらに石のあるを御枕にて大殿ごもりたるに（おやすみなさったところ）いと近うあまの塩焼く煙の立ちのほ

る心ほそき、げにいかにあはれにおほされけむな。

旅の空夜はのけぶりとのぼりなばあまのもしほ火たくとかや見む

とあるのに尽きるといってよい。これにつけ加えるものはいくらもないのである。「新拾遺」に

修行せさせ給うける時粉河の観音にて御札かたに書かせ給うける御歌

昔より風に知られぬともし火の光にはるる後の世のやみ

とある。(昭和二十七年春、ぼくは粉河に参り、院のお手植というささやかな糸桜を見て。「心あれやさびしき色の糸ざくら」という句ができた。)また「玉葉和歌集」に

修行せさせ給ひける時みくにのわたりといふ所にとどませ給ひてよませ給うける

名にし負はば我が世はここに尽してむ仏のみくに近きわたりに

とある。この、「みくにのわたり」は、最初にのべたように、越前の三国湊のことかと思われるのであるが、そうだとすると加賀の白山をたずねた途次ではないかとも察せられるのである。つまり、西は播磨、南は熊野、東は越前あたりまでの間に院の足跡がたどられるわけである。「詞花集」に

修行しありかせ給ひけるに、桜の花の咲きたる下にやすみ給ひてよませ給へる

木のもとをすみかとするればおのづから花みる人になりぬべきかな

という歌がのっている。これは「栄華物語」では円城寺(園城寺か)での詠としている。ここ

に引いた、これら四首の歌だけが、修行中に、すなわち遍歴中によんだことのわかる歌であり、院の遍歴の消息を伝える資料なのである。

ところが、西行の「山家集」では、この「木のもとを」の歌を、那智での詠としているようである。西行は次のように言っているのである。――

那智に籠りて、滝に入堂し侍りけるに、此上に一、二の滝おはします。それへまゐるなりと申す住僧の侍りけるに具してまゐりけり。花や咲きぬらむと尋ねまほしかりける折ふしにて、たよりある心地して分けまゐりたり。この滝のもとへまゐりつきたり。如意輪の滝となむ申すと聞きてをがみければ、まことに少しうちかたぶきたるやうに流れくだりて、尊くおぼえけり、花山院の御庵室の跡の侍りける前に、年ふりたる桜の木侍りけるを見て、「すみかとすれば」とよませ給ひけむこと思ひ出でられて

木のもとに住みけむ跡をみつるかな那智の高峯の花をたづねて

というのである。「詞花集」の「桜の花の咲きたる下にやすみ給ひて」という言いさまからすると、これは西行の早合点というほかはあるまい。

ところで、かれは、院の跡をたずねる目的でこの滝に出かけて行ったのではない。高嶺の花をたずねたついでに、たまたまその跡というのを知ったのであった。しかし、院の歌を思い出したほどであるから、院はかれにとって無縁の存在ではなかったであろう。われわれは

遍歴漂泊の歌人西行の原型として花山院を見ることもできないことはないと思うが、どこかちがうのである。西行が月花にあくがれさすらったのにくらべると、院の目はもっとほかのものに向けられていた。桜の花のもとにやすんで、たまたま「花見る人」になるのであった。「山家集」によると、西行は、待賢門院の女房を案内して、まず粉河にまいり、ついで吹上の浜を見物に行つたが途中で風雨にあつて弱つた、などと言っているのである。いわば観光のガイドをつとめているわけである。粉河寺の、しずかにゆれる永遠のともし火に吸いよせられている院のまなざしを西行に求めることはできそうにもない。院のみくくのわたりでの歌の「我が世はここに尽してむ」と、西行の、「ねがはくは花のものにて我死なむ」とをならべてみると、その精神の状況のちがいがよくわかるように思われる。つまり院の遍歴は、求めがたいものを求めての苦行であり、西行のそれは、つねに月花とともにある遊歴であつたといえないであらうか。

さて院がいつ遍歴をうちきつて帰洛したかはよくわからぬが、「栄華」の記述の様子からして、出家してから六年目の正暦三年ごろにはすでに都に帰つていたらしい、この年は、院の亡き愛妃の父為光のなくなった年である。

八 転 落(その一)

院がその遍歴をうちきって都にひきあげたのを、既述の通りに、正暦三年ごろのこととすると、すでに院は二十五歳になっていた。そして亡くなるまでの十六年間というものを、放蕩無頼の生に身を委ねたようである。それについてなるべく簡略にのべることにする。

まず院の帰洛したと推定される正暦三年現在の政情を、例によって「公卿補任」によってみると左のとおりである。

撰 政 藤道隆(四十歳)

太政大臣 同為光(五十一歳) 六月十六日没

左大臣 源雅信(七十三歳)

右大臣 同重信(七十一歳)

内大臣 藤道兼(三十二歳)

大納言 同朝光(四十一歳)

同濟時(五十二歳)

権大納言 源重光(七十歳)

藤道長（二十七歳）

同伊周（十九歳）

院が都を離れていた五、六年の間にかんがりの変動があったわけで、院の退位に成功して、一時天下をわがものにしていた兼家も、かつて閑白であった頼忠もすでにこの世の人ではなかった。そして兼家の子どもが政界の最前線に進出しているのが目立つ。すなわち道隆道兼道長という同腹三兄弟が顔を揃えているし、道隆のせがれ伊周は、この八月二十八日に重光（醍醐天皇孫）が権大納言を辞したあとをついで、まだ十九才という若輩でありながら、権中納言から一躍して道長と肩をならべることとなったのである。伊周の妻は重光の女であり、父道隆の格別の配慮がはたらいていることが察せられる。ここに道長と伊周との険悪な対立のさざしが見てとれるのである。

ところで、伊周の舅重光の妹（恵子女王）は院の生母（懐子）の生みの母であるから、院にとつては、道長よりはむしろ伊周のほうが身近かに感じられるはずであるが、道長の勢威の強化されるにしがって、院は身の寄るべを道長のかげに求めていったようである。

さて、「榮華物語」は、為光の逝去とその葬送の記事のすぐあとに、いつの間にか帰洛している院を登場させているのである。東の院というところに、その母（恵子）と暮らしている九の御方に「あからさまにおはしましける」といっている。そこに寄食していた、というだ

けのことか、それ以上の関係をこの九の方もったといふのであろうか。この九の方は院の生母の妹なのである。あとでは、このような状態を、あまりになれなれしいと思われたものか、院は、異腹の弟彈正宮（為尊親王）を、この九の方といっしょにさせたという。しかも院はこの九の方のところにおりながら、乳母めのとの中務というのを呼びよせ、それに足腰を打たせている間にむつまじくなり、九の方を苦しませた。院のこの為体ていらくについて

「飯室にある義懐人道も、『どうせこんなことになるうと思つていた』、となげくであるう。」

と「榮華」は、義懐にかこつけて批判を加えている。院の生活の不安定を心配した東三条院詮子（一条院生母、道長の実妹）と関白道隆の配慮で、年官年爵御封といったものが給与され、この東の院の北なる所に住居を構えて、俗世の生活に腰を落ちつけてしまった。そして今度は、中務の娘をも召し出して使っている間に、親子ながら「ただならず」になった。それぞれに子どもを生ませたのである。「榮華」はこれらのみ子たちを、親腹と女腹むすぶとよびわけている。それぞれに男み子があったが、親王の資格はない。院が出家の身であったからであろうか。親王でないからには、これらのみ子には公的の扶持は保障されないわけで、院の心痛はここにかかっていた。せひとも親王の資格をとらせたい。それには実力者道長に泣きつくほかに手はない。院が道長の歛心を買うのに汲々とした事由は、これ以外には見出せない。

ところで、前々から続いていた、道長と伊周との間の険悪な対立に、ついに終局の日がやってくる。しかも事は院にからんでひきおこされたのである。長徳二年春のことで、道長右大臣 三十一、伊周内大臣二十三、院は二十九歳であった。院は今亡き為光の四女に通っていた。

為光には五女があつて、その一女は院の亡妃であり、二女は伯父義懐室で、彼女らの母は佐理（実頼孫、頼忠甥）の妹であつた。そして三、四、五女は、一条摂政伊尹の女の生むところであつた。父為光は、「女はきりようが第一」とて、院の愛妃だった女と三女とを偏愛した、と「栄華」はいつている。院が通つたという四女は、院にとっては母方のイトコということになる。そして三女は内大臣伊周の思いものであつた。（「愚管抄」に、為光に三女あつて、一女は院の妃、二女に院が通い、三女に伊周が親しんでいた、とあるのは、不正確な記録であらう。）

伊周は自分の愛人である三女と一つ御殿にいる四女のところに院が通つてゐる、といううわさを耳にして院の実際の相手は美貌の三女ではあるまいか、と邪推し、弟隆家（長徳二年十八歳）に相談すると、隆家が、「自分にまかせてもらいたい」とて、一、二人のものをつれて、院の帰途を待ち伏せ、おどすつもりで、矢を射かけた。それは院の衣の袖に通つただけで、ケガ一つ負わずにすんだ。当の院としては、自分の恥をさらけ出すことでもあるので、口外しなかつたのであるが、事は自らもれて、そのほかの罪科とあわせて、伊周兄弟は配流処分

に付されることになった。「愚管抄」は事のいきさつを、「榮華」にしたがったらしく、右に述べたとおり記述したあとに、たしかなことは、小野宮の記を見るべし、といっている。小野宮の記とは、小野宮右大臣（実資）の日記のことで、「小右記」とよばれているものである。この実資は、前にふれておいたが、かつて院の女御であった為平親王女を妻としていたひとで、このころは参議・左兵衛督であった。刊本の「小右記」をみると、花山院襲撃事件そのものについての記事はなく、正月十六日の条に、右府（道長）の指示に従って、伊周の家司宅に役人を差しむけて、家宅搜索させた記事があるだけである。欠文があつてよくわからぬが、院襲撃事件の証拠をあげるためのものだったのであろうか。

ところで、この事件はタネもシカケもあるような気がするが、そう思うのは権力者を毛ぎらいする多くの性癖のしからしめるところかもしれないので、「榮華」の記述をそのまま事実として受けとつてもよい。しかし、疑問はなおのこる。

まず、一つには、この事件が伊周の父関白道隆存命のときのことであつたら、事件は起つても事件化されはしなかつたであらうということ。道隆はこの前年四月に死去しており、それとほんのわずか前後して朝光、濟時も死んだ（道隆と朝光・濟時とは親しかった。道隆が死ぬときに、「極楽にも朝光、濟時は居るか」といったというほどである）。兄道隆のあとをついだ道兼も、七日関白の異名のあるように、すぐそのあとを追つた。今や道長の独壇場であつた。くわしいいき

さつの説明は省略するが、伊周は父の命旦夕に迫っていた短い期間ではあるが、父の代理として政務を見た。にもかかわらず、政権は自分を素通りして、道兼から道長へと転移していった。その無念の情は大きかったであろう。それだけに道長の伊周への警戒心も大きかったといわねばならぬ。

父を失って伊周の勢威はひどく減殺されたが、その妹（定子）は当今（一条院）の中宮であり、その愛情を一身に担っていた。近き将来に対する道長の不安のタネはここにあったであろう。自分をすぐ背後からおびやかすものとして伊周の存在は気もちのよいものではない。このようなわけで、この事件は道隆や朝光、濟時の亡きあとなればこそひきおこされたものにちがいない。またその行状が世人の眉をひそめさせていた花山院に矢を放った、というだけでは「不敬」罪成立の根拠薄弱だとみて、東三条院呪咀、大元師すけ法私行の二事をだきあわせたのではないかと推理されるのである。

道長が院を利用したのか、院が道長に利用させたのか、その辺のことはわからぬが、結果的には、院が道長のために、その前途をはばむじゃまものをとりのぞく導火線の役割をつとめたわけで、両者の間柄はもはや離れがたいものになった。院の通ったという為光四女のことについて、「大鏡」は、道長が俗でいたとき（入道するまえ）に子を生ませた女であると言い、「榮華」は、院の亡きあと、道長が世話した、といっている。いずれにしても彼女は、

おとりとして利用されたと思われる。

九 転 落(その二)

院の無法、無頼の言動を伝える話は真偽とりまぜていくらもある。しかし、ぼくはそれらを一々書き出す気はしない。

ともあれ、院の帰洛の前と後で、院の生の落差の大きいことは不審に思われる。「大鏡」は、王位を捨ててまでの御修行の甲斐あって、その験力(加持祈禱の効力)には人並みすぐれたものがあつたのに、

「いとあやしくならせ給ひし御心あやまちも、ただ御物怪ものけのしたてまつるにこそは侍るめりしか」

と評し、「愚管抄」は、院はあとには妙なことになってしまったが、それでもめでたく行われせられる折々もあつたのであるから、

「さだめて仏道に入らせ給ひにけんかし」

といい、それぞれ同情的に見ている。院の精神異常というのは、父冷泉院のそれとはちがちががっていた。冷泉院はまったくの狂気で、六十二年のあわれな生をおくつたのであるが、

花山院のほうは、狂気か正気か、けぢめのつかぬたちのものであったらしい。「大鏡」に、花山院評が二つ見えている。世人は院のことを

内おとりの外めでた

と言ったという。見かけだおし、ということであろうか。また、

ひたぶるに色にはいたくも見えず、ただ御本性のけしからぬさまに見えさせ給うた」ともいっている。一見それとはわからぬが、どこか性根が狂っている、ということであろう。そして民部卿俊賢が、

冷泉院の狂ひよりは花山院の狂ひこそすちなきものなれ（手に負えぬ）

といったところ、それを聞いた道長が、

いとふびんなることを申さるるかな

と、苦笑した、という話をもち出しているのである。この俊賢のことばが、院の精神状態をよく言いあてているように思われる。そしてこの精神異状は、帰洛後にはじめてあらわれたものではない。「古事談」は、院の即位の日の言語道断なふるまいを伝えているが、それは信じられないが、はじめから異常といえば異常なのであった。その出家遍歴にしているから、その外のものではなかったといわねばならぬ。

つまり、こういうことではないか。——院の行動はたしかに異常ではあるが、それは、人

間性の要求を、異常に表現したまでのことで、その一つ一つの要求そのものは異常でも何でもない。すべての人間の持ちあわせているところで、ふつうは、それを抑えて露骨に示さなかつたり、その要求が微弱でも出て出るに至らない、というにすぎぬ。院の異常な愛欲と異常な道念とは、その根は人間性において一つであつて、それがはげしく、むきだしに、つまり異常に、押し出されたまでのことではないであらうか。

前に、宇多法皇との関係において、浄藏法師のことをちょっと出しておいた。あれだけ見ると、かれは生涯を行いました、無垢の修道僧のようであるが、やはり人の子であつたらしい。「後撰集」に、「浄藏、くらまの山へなむ入るといへりければ」と詞書のある、平中興女の歌がある。これは「大和物語」や「今昔物語」によると、浄藏がこの女の加持かぢを頼まれ、その効を奏したのであるが、ついにこの女と通じた、そして世間をはばかった彼が、鞍馬にひきこもつたあと、この女が彼におくつた歌であるという。このほかにも「大和物語」に、彼が、ある親しい女との間に贈答した歌がのつている。「拾遺集」にある浄藏の、

霞たつ山のおあなたのさくら花思ひやりてや春をくらさむ

という「ある人のもとに遣しける」と詞書のある歌の心もよみとれるのである。こういう浮いた話に色どられているからといって、かれの道念そのものにケチをつけることはない。むしろその道念ゆえに、この人間的な弱点が、つよく印象されるのである。

花山院は、愛欲の流転をつづけた後半生も、なお、道念は捨ててはいなかったこと、前に出した「愚管抄」のいうとおりである。「扶桑略記」によると、長保四年（三十五歳）の三月に、再度書写山に性空をたずねている。またこれよりさき、長保元年（院、三十二歳）冬熊野に出向く意向があつたが、一条院のためにはばまれた（「小右記」ことは前に記した。しかし、その後、熊野に赴いたふしが見られるのである）。

というのは、長保元年のときも、熊野に出かけるつもりで、一旦、「小右記」の筆者実資に馬を借りうけたが、それが許されぬまま、馬を返してきたという。ところがおなじく小右記寛弘二年（院、三十八歳）の十月二十五日の条に、院から、馬を返してよこした、馬はひどく疲れていた、そして口付きの男に匹絹をたまうた、とある。院は熊野に行つてきたのではないかと推測されるのであるが、関連のある記事がその前にないので、たしかなこととはわからない。「後拾遺」に、惠慶法師の

花山院の御供に熊野へまゐり侍りける道に住吉にてよみ侍りける

住吉の浦風いたく吹きぬらし岸うつ波の声しきるなり

という歌がある。これは、院の若き日、その熊野行きのお供をしたときのものかもしれないから、この歌をもつて院の再度の熊野ゆきの証拠とするわけにはいかないが、しかし前にみたように熊野行きを意図されたことだけは、うたがないのである。いずれにしても、院が、

かつての道念をまったく捨てはしなかった、ということにはまちがいない。

院が生涯を通じて敬慕した性空が、八十歳でこの世を去った一年後に院がなくなつたことは、なにか因縁めいたものを感じさせずにおかない。院の生命としたものが失われたとき、院の生命も尽きはてた、といった感がするのである。

院は、生涯愛欲と道心との両極の間をのたうちまわつた。その求めてやまなかつたもの——愛欲を超えた精神の自由——はついに得られなかつた。院の生涯を前後にわけて、一応、そこに転落といふべきものを見た、そしてその、落差の大きいことをいふ。しかし、実をいふと、落差の大きさと見られるものは、その道念と愛欲との間の振幅の大きさではないか。

「天都への途は淫らな虚栄の市の真中を通っている。」(天路歷程)という。院は目をふさいでそこを素通りできなかつた。さりとて、それは天都へ向かう足をまったく止めてしまうことではなかつた。院にあって、愛欲と道心とは、いわばその力を強めあつてゐた。親鸞は、「われは賀古の教信沙弥の定なり」といふ。その教信のことは前出の「往生極楽記」に出ている。妻子をもち破戒の生活をつづけたが、念仏往生を遂げたという。この教信のことは、院も聞き知っていたかもしれない。しかし院は、ついに教信ではありえなかつた。教信であるには、あまりに引き裂かれた存在であつた。院の師性空は、生身の普賢菩薩を拝したいと願つたところ、それは、遊女の姿態とオーバードラップして己れを現わした、という伝説があ

る（「古事談」）。しかし院にとっては、菩薩と遊女とはまったく別々のものであったであろう。

十 肉 親（その一）

「榮華」にも「大鏡」にも、院の生母懐子の院を生んだ後のことにふれていないが、はやくこの世を去っているのである。それは天延三年四月のことで、年三十とも四十ともいう（日本紀略）が、三十のほうに従いたい。それでも冷泉院より四つ年上になる。懐子のなくなつたとき花山院は八つ（満六歳六ヵ月）であつた。

院にはおなじこの母から生れた二人の姉宮があつた。「大鏡」や「榮華物語」によると、女一の宮（宗子内親王）は早世した。二の宮（尊子内親王）は、光りかがやくほどの美貌で、賀茂の齋院となり、母の喪で引退し、やがて叔父円融院の女御となつたが、間もなく内裏が焼けたので、世人は「火の宮」と申したという。そしていくほどもなく亡くなった。それは寛和元年五月二日で、院の出家に先立つ一年前のことで、つまり院は、わずかの間に姉宮と愛妃とを失つたわけである。源為憲の「三宝絵」がこの方のために書かれたことはすでにのべておいた。

ところで、「榮華」にも「大鏡」にも、女一の宮については、いまのべたように、早世したとばかりあつて、幼くしてなくなつたように思われるのであるが、亡くなつたのは、実は

二の宮よりもあとの、寛和二年七月二十一日である（「小右記目錄」、「日本紀略」）。このような不確かのことしか、世上に伝わらないのは、病身かなにかで世に出ることもなく、あるかなぎかの生をおくったことが思われるのである。院は、肉親の縁はきわめて薄かったと言わねばならぬ。前にのべたように、院は帰洛してのち、母の同母妹九の方に親しみ、おなじく母の同母妹の生んだ為光四女にも通った、と言われる。また乳母の中務とその女とちぎっているなど、いやらしくもあるし、あわれでもある。

幼くして母を失い、二人の実の姉を先立てた院にとって、ほんとうの肉親は父冷泉院だけになった。父院に対する院の孝心は格別のものがあった。父院にたかな（竹の子）をおくったことがあった。そのときの歌

世の中にふるかひもなき竹の子はわが経む年をたてまつるなり

父院の御かへし

年経ぬる竹のよはひはかへしてもこの世をながくなさむとぞ思ふ

この贈答の歌は「詞花集」にもせられてあるが、「大鏡」はこれらの歌をのせたあとに、かたじけなく仰せられたりと、御集に侍るこそあはれに候へ。まことに、さる御心にも祝い申さむと思し召しけむかなしさよ

とつけ加えている。「花山院御集」のことはあとでふれるつもりであるが、そこに院みずから、父院のご返歌のことを「かたじけなく仰せられたことだ」と感想を加えている、というのであり、「さるみ心にも云々」は、花山院が精神異常であるにもかかわらず、父院の御いのちの長からむことを祝い申し上げる孝心のかなしさよ、ということであろう。冷泉院のみ歌はこのほか数首のこされているだけである。

また「大鏡」にこんな話が出ている。

冷泉院の住居していた南の院というところに火事があった。花山院はお見まいにかけた。父院はすでに町辻に避難していた。花山院は馬に召され、頂に鏡を入れた笠をアミダにかぶった妙な格好で、「父院はいづこに」と、人ごとにたずねてまわった。「どこそこに」ときいて、み車のそばに近づくと、下馬して、ムチをわきばさみ、両袖をかきあわせて、つましく控えていた。み車の中からは、神楽歌が高らかにきこえてきた。すると、高階明順（伊周の伯父）というのが、「庭火がすごいですなあ」と言ったので、万人こらえきれず笑った。

宮中で、み神楽の際に庭前にかがり火を焚くのを火事にひっかけていったのである。

あわれみとさげすみとのまざった衆目にさらされた、狂える父子の出会が、火炎を背景に描かれていて、胸にせまるのである。

ところで、花山院が、てっぺんに鏡をのせた笠をアミダにかぶった、というのはどういうことなのだろう。仏の後光（光背）をかたどったのではなからうか。だとすると、院は生き仏を氣どつていたわけで、聖者、もしくは仏に、なりそこねた院のアイロニカルな姿がここにある。道長は冷泉院にもよく尽くしたらしく、しばしば院を見まわったことがその日記に見える。

わが家門は冷泉院によって開かれた。院なかりせば、自分は下っ端役人で、おえら方にこきつかわれていたであろう。

と洩らしていた、という（「大鏡」）。

冷泉院と花山院の聖なる狂態、それは道長にとって、おのれの権威を支える権威のパラドクスカルなすがたであった。おのれを権威づけるものが、同時におのれをきづつけるものであった。それは自己一門の権力への狂気の生みおとしたものにほかならなかった。道長にも心の苦しいときがあった。使をやって恵心（源信）の教えを請うたこともあった（「御堂閔白日記」）。彼の造った法成寺はまさに地上の極楽であった。しかしその実、現実の地獄相にたえぬ者の、おのれの目をくります光彩ではなかったか。法成寺のまばゆき光輝はやがて消えなくてはならなかった。血の歴史は、すでに行きつくところに行きついていた。そしてあらたの生を求めてもがいていた。それが花山院の生きた宿命であったのである。

十一 肉 親(その二)

父に孝心あつかつた院は、異母弟たちには慈愛ふかい兄であった。異母弟たちというのは、三条院、為尊親王、敦道親王の三人である。眼疾のあつた三条院は別として、その下のふたりは院に似て、その性は「すこし軽々かるがるにぞおはしましける」と「大鏡」は言っている。為尊親王は、かがやくばかりの美貌であつたという。尊子内親王についてもそういわれていたが、その美貌とは、朝に咲きさかり、夕にたちまちしほむ草花のそれのように、もろい生命の一瞬のかがやきというべきものであつた。

この親王の愛人であつたのが和泉式部で、親王亡きのちには、弟宮の敦道親王の愛をうけた。敦道親王との愛の生活の記録が「和泉式部日記」であることはよく人の知るところ。この敦道親王の行状も異常であつた。あるとき、和泉式部と車に同乗していた。車の前の簾すだれを縦に真半分に切断し、自分の前の半分は高く捲きあげ、式部の前のは下したまま、そして式部の紅の袴に「物忌ものいひ」と記した赤い色紙をつけて地面スレスレにぶらさげた(「大鏡」)。何のことか思い当ることはあるがそれを言うのは遠慮したい。

院が為尊親王に九の方を引きあわせたことは前にのべておいた。親王は長保四年正月に亡

くなつた。二十五とも六ともいわれる。その無軌道な夜あるきのむくいであるうと「榮華」は言っている。九の方は尼になつた。実の兄弟である三条院と敦道親王の悲歎はさることながら、

花山院ぞ、中にもとりわきて、何事もあつかひ聞えさせ給ひける

という（「榮華」）。親王の亡くなられたことを聞いて狂える父の冷泉院が「世に失せじ、よう索めばありなむものを」とおっしゃつた（「榮華」）とあるのを讀んで、涙せぬものがあるうか。

敦道親王も院に先立つて寛弘四年十月に二十七でその生をとじたのである。——この為尊親王にしても敦道親王にしても、院とおなじように、はやく生母を失つた。その母超子（兼家女）が天元五年正月に急死したとき、為尊親王は五つか六つ、敦道親王はその前年生れたばかりの乳呑子であつた（花山院は当時十五歳）。花山院や、異母弟たちに異常な性行が見られるのは、むろん遺伝的な素質によるものであろうが、それが、はやく母を失つたやるせなさによつて強められた、といえないことはない。

余談になるが、和泉式部が性空上人におくつた歌が「拾遺集」にある。そこには、雅致女式部となつているが、大江雅致の女ということと和泉式部のことなのである。彼女のまだ少女時分の歌であらう。性空におくつた歌はこのほかにも彼女の家集にある。また「風雅集」にある歌をみると、熊野にも行ったようである。しかしこれは伝説かもしれぬが、それにし

でもおもしろい。式部もまた情欲と道念との両極にもだえた存在であったのか。すこしふざけて言えば、花山院を女にしたようなところがあつたのである。

おわりに、院の肉親中の肉親であるそのみ子たちのことに及ばねばならぬ。中務とその女とに生ませた二人の男み子たちのことは前にふれた。このみ子たちの親王になることがきまつたのは、長保六年五月二日のことで(御堂関白日記)、院は三十七歳であつた。院自身のみ子としては親王になれない。そこで父冷泉院の五、六の宮ということにしたのである。「み子たちを冷泉院の親王になしてのちによませ給ひける」という院の歌が後拾遺にある。

思ふこと今はなきかななでしこの花咲くばかりなりぬと思へば

院のよろこびのほどが察せられるのである。「皇胤紹運録」によると兄宮は清仁親王、弟宮は昭登親王という。これで男み子のしまつはついた。しかしこのほかに、中務とその女の生んだ女み子がそれぞれ二人ずつあつた。「思ふこといまはなきかな」とは言つたものの、院のなやみは尽きなかつた。院は寛弘五年二月八日四十一歳でなやみ多かつたこの世にわかれを告げたのであるが、臨終に、「あとにのこしておくのはふびんだから、忌のうちに(急中に)とり殺して連れて行くぞ」と言つたという(榮華)。はじめてここを読んだときには、思はずゾーッとした。その言のとおり、院のなくなつて間もなく、女宮たちは「片端よりみな失せ給」うた。ひとりだけ中務腹の二女は例外であつた。というのは、中務のはらからの兵

部の命婦というのに「これはお前の子にせよ、おれは知らんぞ。」とおっしゃった。それで命婦が養育していたのであった。この二女は、のち上東門院(道長女、一条院中宮)の女房として仕えた(「栄華」根合の巻)。

院には、このほかに、僧籍にあった深観・覚源というみ子があったが、だれの腹とも知れぬ。

十二 狂気と天才と(その一)

「大鏡」は、花山院が、その精神のふつうではなかったにもかかわらず、すぐれた天分を持っていた、として、まずその歌をあげているが、歌についてはあとで述べることにする。次に「この花山院は風流者にこそおはしけれ」といって、いくつかの事例をあげている。風流者というのは、アイデアに富んだひと、意匠家といったところ。

「大鏡」は、藤原行成が、アイデアに富み器用なひとであった、として、その二、三の事例を紹介しているが、このひとは、院の生母や伯父義懐の兄の義孝の子である。(義孝ははやくなくなつた。)また、祖父(母の父)一条摂政伊尹これまたも、すぐれた歌よみで、「豊景集」という家集をつくっているし、自邸に饗を設けることがあつた際に、寝殿の裏板の少し黒ずんでいるのを見

つけて、急にみちのく紙を張らせたところ、なかなか「白く清げ」であった。これについて「大鏡」は「思ひ寄るべきことかはな」と讃辭を呈している。してみると伊尹も風流者であったといえるであろう。院はその狂気を父方から、芸術的な天分を母方から受けついでいると見られるのである。

ところで、「大鏡」が院の風流としてあげているものを要約すると、住居関係では

(一) 院の御所を、寢殿、対屋、渡殿などをば「造り合ひ」、檜皮ひだをふき合わせて造った。今もって内裏(皇居)はこの式によっている、と云う。

(二) 庭の木立を植えるには、桜は、花そのものはけっこうであるが、枝ぶりが、こわこわしく、幹も憎たらしいから、梢だけ見えるのがよい、というので、中門より外に植えさせた。

(三) なでしこの種を築地の上に播かせたところ、思いかけず、唐錦を引き廻したような美観を呈した、

というのである。この三つの事がらは一つに帰するようである。堂々たるもの、いかめしきものは姿を消して、スマートなものがとって代った、といえるであろう。一、三の日本建築史の本に当たってみたが、この点にふれたものはなかったが、この時分には寢殿造りに変化があらわれ、寢殿を中央にして、その東西に対屋を置く左右対称型がくずれて、たとえば東

の対屋がなくなるという簡略化があらわれた、とあるのが目に止まった。院の考案した集約型も、このような簡便・合理化の動きのなかのものであったと思われる。

建物の集約化に応じて、庭も広大なものは不要であったであろう。それゆえにこそ、桜の幹や枝のみにくさがよけい目につくわけであろう。そして、築地も堂々たるものであれば、なでしこの花など、かえって似つかわしくないと思われる。

このほか奇抜なのは、新案の車宿り（ガレージ）で、奥のほうを高く、手前を低くして傾斜をつける、それに大きな妻戸をとり付ける。そうすれば、戸を開けさえすれば、車はカラカラとひとりで走り出る、というのである。これも簡便化の一つであろう。

——話は別になるが、なでしこで思いついたことを言いそえておきたい。男み子たちが親王になったよろこびを、なでしこに託してよんだ院の歌は前にあげておいたが、院の身内には不思議にも、なでしこにちなんだ歌が見られるのである。院の母方の祖母恵子（伊尹室）が、女の懐子に付き添って春宮（花山院）にさぶらっていた時分、息子の義孝（前出）が久しく参らないので、なでしこの花につけて遣わした歌というのが「新古今」にある。

よそへつつ見れどつゆだに慰まずいかにかすべきなでしこの花

それから、懐子が、母の恵子がほかに行っているときによんだ、という歌が「拾遺」にある。しばしだに陰にかくれぬ時はなほうなだれぬべきなでしこの花

これらによって、院の母方にある親子恩愛の情のこまやかさがしのばれ、それが院の血に伝わっていて、築地の上のなでしこの花となって咲き出ているように感じられるのである。

さて話をもとにもどすが、「大鏡」は、道長主催の競馬に招待された日の、院の御よそほひ、み車のさまの、世にたぐいなき見事さをあげている。沓くつのさきに至るまで、「ただ、人の見ものになるばかり」であったと云う〔御堂関白日記〕寛弘元年五月二十七日の条に、道長が院を招待して競馬を興行した記事がある。

ここで気づくことは、鏡をのせた笠をかぶるといった、珍妙なかつこうで人目を惹いた院が同時に、そのたぐいなき見事なよそおいで人目を惹いたということである。珍妙といえはこんなこともあった。

賀茂の祭りの見物の際、院の所持していた数珠たるや、小粒みかんの柑子を玉にし、達摩（オヤ玉）には大柑子を使った。というしろもので、それをみ車の外に長々と出していったという。「大鏡」はこれについても、「さる見ものやは候ひしな」と驚嘆の声をあげているのである。見事さと珍妙さとのちがいはあっても、それが「見もの」であること、すなわち異常なものであることにはかわりがなかった。院の道念と愛欲とはその方向はちがっても、ともに異常であり、その根を一つにしていることを前に言った。そのことがちょうどここにもあてはまるのである。エクセントリックな言動とエクセントリックな求道や風流とは別のもので

はなかつたのである。

このほか調度類にもすぐれたものを造り出しているとして、六の宮の気絶したときの御誦經の布施とした硯箱の見事さを例に出しているが、それよりも自分に興味のあるのは、「あて絵」にたくみであった、ということである。この「あて絵」とあるのがわからぬが、伝写に誤りがあるかもしれぬ。「今昔」に、「をこ絵」に長じていた叡山無動寺の僧のことがあるが、これと同じことかと思われる。「をこ」を「おこ」と書けば「あて」と見まちがえやすい。院の描いた絵はどんなものかというに、走っている車であると、車輪は墨をうすく塗る、輪の大きさ（輪廓）なんかは、墨をぼかして塗って、ほんのしるしにする程度。このほうが走っている感じがよく出るといっているのである。また、竹の子の皮を指ごとにはめた男が、それでベツカンコウをして見せて、子どもをおどす、子どもは顔を赤くしてこわがっている、そんな場面や、富裕な人と貧しい人それぞれの暮しぶりなどである。

これで見ると、院の絵のモチーフとその筆致には、百年以上もあとの、かの「鳥獸戯画」や「信貴山縁起」などのそれが思いあわされるのである。院が画をたしなんだことは、「大鏡」が伝えているだけでなく、院の歌の相手であった公任や長能（かげろう日記「著者の弟」の家集によっても知られるのである。公任卿集には

花山院のかかせ給へる紙画に歌付けよと賜りたりけるに、人々さるべき所は付けはてな

かりければ、人の鶴飼ひて文ひろげていたる所

と詞書のある歌がある。「長能集」には

同院（花山院）の御てづから紙画をかかせ給ひて人々に歌付けさせ給ひしに、秋の前裁咲き
乱れたる紅葉おもしろき所
と詞書のある歌が見られる。

——絵のことを云ったついでに付け加えると、院が性空の肖像を画かせたことがあった（『今昔物語』「古今著聞集」）。再度の性空訪問のときであろうか。延源という絵師をつれていて、こっそり性空の顔を写しとらせた。ところがにわか大地震動して、かれは思わず絵筆をとり落した、それが描かれた顔の一部分を汚した、しかしそれは、性空の顔にあったアザそのままであった、というのである。くわしいことは知らぬが、現存人物の肖像画といふものは、このころからはじめられたらしく、巨勢弘高は、源信や性空の肖像を画いたと云われる。しかしこれが前面に出るのは、これも百年以上あとの、藤原隆信あたりからで、鎌倉期になって隆信の子の信実という名手が出るという次第ではなかったか。

こうしてみると、院に凝集した血の歴史は、院の精神を異常にしたと同時に、異常な天分をも開花させたようである。尊子内親王や為尊親王の、はかない生命と、同時にたぐいなき美貌を生み出したものもそれであったかと思われる。

十三 狂氣と天才と（その二）

前項で保留しておいた、院の和歌についてのべる。まず「拾遺集」の撰者のことは、「あとで考えることにする」と予告しておいた手前、取りあげなければならぬ義理があるが、「拾遺」そのものの研究がいまの本旨ではないのであるからして、これに深入りすることは避けたいのである。ただ、「拾遺」の次の、四番目の勅撰集である「後拾遺」の序文に、「拾遺」は院の親撰である、とうたっていることは、その当否は別にして、それ自身として史的意義があることは、いっておきたい。撰者のだれであるかを追求することも、無駄な努力だとは思わぬが、それが問題となることそのことのほうが問題である。

勅撰集とは字義のごとく、天皇の勅によって、一定の撰者に撰進せしめた歌集ということである。そこには主体としての天皇と下命される撰者とがなければならぬ。そして撰者は臣下であるのは当然のことである。ところが拾遺はそのどちらもはっきりしないのである。これがれつきとした勅撰集なら、時のみかど一条院の勅命があり、撰者としてだれか臣下がえらばれるはずである。この主体が不明であり、撰者が臣下ならぬ花山院であるなどはおかしきことの限りである。厳密に言えばこれは勅撰集とは云えぬものである。してみれば、これ

が勅撰とみなされたのは、それは前天皇である院の関与されたものと考えられたからである。かりに公任の撰であるとしても、院がイニシヤティブをとったのでなければ、それは公任の私撰集であつて勅撰集ではないことになる。

このように成立の事情がまるで不明であるのは、天皇というものが実質的には不在となつた時分の産物であるからで、「古今」、「後撰」は撰関のいかなかった時代につくられたのである。逆に、いわゆる撰関時代には勅撰集はつくられぬものである。何となればその「勅」の主体そのものが不在であるからである。「拾遺」のあと、撰関時代のつづいた間は勅撰集はつくられず、八、九十年たった白河院によって復活された。そのことは、今度は逆に、撰関を実質的には無力のものにして、上皇が政権の主体となつたこと（院政）と別のことではない。このような重大な事情には目をくれずに、撰者推定にだけ意を注ぐのはどうかと思われるのである。

「小右記」長保元年（院、三十二歳）十月廿八日の記事であるが、筆者（実資）が皇后宮（定子）に参つたところ、そこに、参集していた人々の間にこんな話が出た、それは、左府（道長）が和歌を撰定している。というのは道長の女（彰子、上東門院）が女御として入内するについて、屏風にのせるための歌であつて、花山院をはじめ、右衛門督公任、左兵衛督高遠、宰相中将斎信、源宰相俊賢など皆歌が出てゐる。歴々の上達部が左府の命によって歌を献ずるな

ど往古に聞いたことがない。いわんや法王の御製おや、という話なのであった。このあと筆者はとくに公任を槍玉にあげて、右衛門督といえは廷尉（検非違使）であつて、普通の人間とはちがう。それがこのさまで、どうも近頃追従の気色がある、と書き加えている。ここに道長のような、天皇にとつてかわる権力者の存在と勅撰ということは相容れぬものである、ことが見てとられるのである（道長はこのとき、内覽であつて関白ではなかつたが、實質的には同じものである、と云われる）。いいかえれば道長によつて撰定されはしても、天皇によつて撰定されること——すなわち勅撰ということ、行なわれたいものであつたのである。

「拾遺集」の歌は、勅撰集の歴史の上からは高く評価されていない。「古今」、「後撰」の情性によつてつくられたものくらいで片づけられているようである。しかし必ずしもそうとは云えないので、折口信夫博士よつて指摘されたように、連歌（一首の歌の上下を二人掛けあいよむ）が顔を見せたのは「拾遺」がはじめてで、それは、このころ連歌がやり出したことの反映であるが、決して先行二勅撰のエピゴーンですませえないものである。眼光紙背に徹すれば、いろんなことが堀り出せるであらう。しかしいまそれをこころみている余裕はない——院自身の歌に移らう。

院の歌は「拾遺」には一つも見えない。読み人知らずの歌の中に入っているかもしれない、とも云われるが、自分には見きわめる力がない。ところで、勅撰集にとられている平安朝歴

代（後鳥羽院は除く）の御製の中では、花山院が一番多く六四首、つづいて村上天皇五九首、醍醐天皇四三首の順で、勅撰集を出した天皇の御製が上位を占めているのは当然のことに思われる。院の歌はこのほか「夫木和歌抄」に三十首ほど伝えられ、そのうち二首を除いて勅撰集にはないものである。これ以外にあちこち散見するものをあわせて、およそ百首ばかりにもなるであろうか。「大鏡」の記事にあったように御集の存在していたことはたしかなのであるが、いつのころからか見失われてしまったことはくやしいが、奈良（平城天皇か）、光孝、宇多、醍醐、朱雀、村上、冷泉、円融八代の御集が現存しているのに、円融院の次の、平安朝歴代随一の歌人であったかと思われる花山院の御集の姿を消したことは、院のになった運命と似たものがここにもつきまといっているような気がしてならないのである。

院の歌のいくつかはすでに折にふれて引いておいたのであるが、それ以外の特色のあるものを列挙しておく。

山吹を

もろこしの人に見せばや焼がねのこがねの色に咲ける山吹

大井川行幸に旅雁雲にまがひて玉章と見ゆ

大空にうち群れてとぶ雁がねは緑の紙の文かとぞ見る

月あかき夜に

わが宿の軒のうら板かず見えて隈なく照らす秋の夜の月

雪

いづくぞと見めぐらはせど天の原木の枝だにも見えずあるかな
しきしまの大和にはあらぬ唐猫を君がためにぞ求め出でたる

この歌は三条の太皇太后宮（詮子）より猫やあるとありしかば、人のもとなりしが、をかしげなりしを取りて奉りしに、扇の折れを札につくりて頸につなぎて遊ばされしみ歌と云々

木どもをあまた植えさせ給ひて風吹きける日よませ給うける

木立をばつくるはずして桜ばなかがくれにぞ植うべかりける

題短らず

あしひきの山に入り日の時しもぞあまたの花は照りまさりける

実方朝臣、みちのくにへ下り侍りけるとき（長保元年）賜はせたりける

何事も語らひてこそ過しつれいかにせよとて人の行くらむ

もの思ふ由聞かせ給へる人に

わが身こそ苦しきことも知りぬれば物思ふ人のあはれなるかな

この「わが身こそ」の歌は、実朝のそれをしのばしめるかなしき歌である。院の苦悩にみち

た生涯がじかに感じられるようである。院の求めた神通力とは、実はこの「物思ふ人」の心のわかることにほかなるまい。

無常の心を

ただしばし遅れさきだつ競馬のはしりけならぬ世にはあらずや

生死の闇に六道輪廻する心を

すべらぎのあづけられたる筥はこすてて今は同じく中ちころみむ

この二首は「夫木抄」の中のもので、見すてがたいものがあるが、意の解しがたいのが残念である。以上、勅撰集と「夫木抄」からえらんだ。このほか「源氏物語河海抄」に

皮虫は声もたえぬにせみの羽のいとうすき身も苦しげに鳴く（御集中）

「公任卿集」に

花山院より名も知らぬ花を賜はせて

秋ごとに咲くとは見れどこの花の名を知る人のさらになきかな

「玉葉集」に

東院の桜を御覧じて

世の中の憂きも辛きも慰めて花のさかりはうれしかりけり

などの名歌がある。

（昭和三十六年六月稿了）

(一) 院に殉じて出家した惟成入道については、当然身元をたしかめるべきであったが、力が及ばなかった。あとでわかった若干のことを附記する。

(1) 「大鏡裏書〔群書類従〕」に、「左少弁雅材一男、母摂津守中正女」とある。してみると、かれの母は、兼家の妻として道隆道兼道長兄弟を生んだ女の姉妹であったことになる。「古事談」に、惟成は、花山院の即位とともに、その側近に押し出したが、それまでの妻を離別して、源満仲のむこととなった、という。満仲は富裕の聞え高く、また、兼家に家人の礼をとっていた人である。

(3) 堀河院に仕えた讃岐典侍の日記に、花山院の出家のあと、もう一度弁官として返り咲いてはどうかと兼家から惟成に話があった、とある。

以上三つの事実から推して、惟成は兼家とはきわめて近い間柄にあって、かれが院側近の実力者となったのには、その背後に兼家の控えていたことが大いなものをいっただのではないかと察せられるのである。院を出家に駆り立てるのに働いたのは道兼ということになっているが、惟成もクサイのである。かれは道兼とはちがって、院に殉じておなじく出家している

のではあるが身を殺して兼家に忠義立てをしたのではないであらうか。

(二) 今鏡を見ると、昭登親王あきなりの女が、藤原能信の養子内大臣能長との間に、大藏卿長忠を生んだとある。能信は道長の子顕信の実兄。「御堂関白日記」の記事からして、晩年の花山院の側近にいたらしく思われる人である。

(三) 花山院の皇子で僧籍に入った深観の師事したのは禅林院の僧正深覚である。深覚は藤原兼家の異母弟である(深覚の逸話は「今鏡」(昔語)「十訓抄」などにある)また深観が幼少の時分の永観律師を愛したことが「続拾遺往生伝」の永観の条に出ている。永観は云うまでもなく、源信と法然との中間に位置する、浄土教の巨星である

配所の月

一

「つれづれ草」に――

不幸に、愁へにしづめる人の、頭かしらおろしなど、ふつつかに思ひとりたるにはあらで、あ
るかなきかに門さしこめて、待つこともなく明かし暮らしたる、さるかたにあらまほし。

顕基の中納言の云ひけん、「配所の月、罪なくして見ん」こと、さもと覚えぬべし。

とある。この顕基の感慨について、自分はよく考えてみることもなく、「これという、外
的事情はなく、内心の罪悪感からして、われとわが身を世外に追放して、配所生活めいた暮
らしをしたい」と云うことに解してすませてきたが、それでは何か落ちつかぬものが感じら
れていた。それでこの顕基をはじめとして、さかのぼって花山院崩御の前後に若くして発心
出家した成信・重家・顕信などをあわせ取り上げながら、顕基のこの言についてあらためて
考えてみることにしたのである。

この言の初見は、自分の知るかぎりでは、大江匡房の「江談抄」に

入道中納言顯基、談ぜられて云はく、咎無くして流罪せられ、配所の月を見ばや云々

とあるものである。それですぐ思い起こされるのは、顯基の祖父源高明（醍醐天皇々子村上天皇々弟）のことである。高明は第二の菅原道真であった。煩雜を避けるために道真のことは省略するが、配流の理由も配流地もまったく同じである。村上天皇のあと、冷泉院が皇位に即いた。そして皇太子には皇弟・守平親王（後の円融院）がなった。ところが冷泉院と守平親王との間に為平親王があつて、この三人は母を同じくする実の兄弟である。母は藤原師輔女安子（兼家らの姪）である。その為平親王をさしおいて、弟の守平親王が皇太子になったのは、為平親王妃が高明の女であることが藤原主流派からきらわれたためである。高明がおもしろく思わぬのは無理はない。そのことが高明に謀叛の企てあり、ということになって源満仲等の密告によって、高明は太宰権帥として配流されることになった。高明は出家して、それに免じて都にとどまることを願つた。しかし許されなかつた。

「日本記略」によると、彼の息男忠賢、致賢も出家した（「分脈」には致賢のことは見えない）。やがて北の方（高明の北の方は師輔三女すなわち中宮安子の妹であるがすでに亡く、これは後妻の師輔五女愛宮であるう。）も尼になった（かげろう日記）。この事件は安和の変と云われる。これについて「愚管抄」は世間の取沙汰では「小一条左大臣（師尹）・九条殿（師輔）の子ども三人（その一人は兼家である。）・小野宮（実頼）の子どもが満仲らとしめしあわせてしたことだ」と云うが、当の高明

自身出家したこと、またその子の俊賢（顕基の父）が道長に格別に親しく近侍して、意趣を
含んでいないことなど考え合わせれば、高明に何事もなかったとは云えない、

と云っている。藤原主流の出身である慈円がかく云うこと自体が、この事件の正体を裏切
り示しているとも思われる。顕基の母すなわち俊賢の妻は兼家の実弟忠君の女である。

さて、顕基の「配所の月、罪なくして見ばや」の述懐の「罪なくして」は、「江談抄」の
伝えるところからして、「無実の罪で」と云うことである。してみれば、このことばは彼の
祖父高明の身の上を思いあわせてのものである、と解するのは自然であろう。顕基は、官界
の傍系としては比較的順調に出世街道を進んだ。藏人頭から参議になって公卿の仲間入りを
したのは三十歳の時であり、三十六歳で権中納言になった。一条天皇のころ四納言の一人と
してもはやされた父俊賢すら、三十七歳で参議、四十歳で権中納言になったのに比べてみ
て、その昇進はよほどめぐまれていたと云わねばならない。しかし、このことは彼にとつ
て、ありがたくも、うれしくもなかったらしく、「配所の月、罪なくして見ばや」と、つね
ひごろつぶやいていた、と云うのである。

この彼が、近侍していた後一条院の崩御（二十九歳）を機に出家した。時に三十七。「扶桑略
記」長元九年四月廿二日の条に彼の出家のことを記し、「尊卑これが為に落涙す」とある。
彼の出家のことは諸書に見えているが「古今著聞集」の記事に

中納言顯基卿は、後一条院に目をかけられ、官位において申し分なかった。院のおかれになるや、「忠臣は二君に仕へず」とて、天台楞嚴院りょうがんに上ほって髪を下ろした（法号、円照）院のおかくれになって夜、火がともしてないので、「どうしたのか」ときくと、係り官が、「新主の御事でせわしいもので。」と答えたのを聞いて、出家の心をつよくした。

——話はおわって彼が出家して大原に在った時分のこと。宇治殿（頼通）がたずねて往つた。終夜語り明かして、頼通は「後世は必らずみちびかせ給へ」とたのむのだった。さて曉に還ろうというときに、顯基は「俊実は不覚の者でございます」と、ポツリと云つた。その時は気にも止めなかつたが、あとで、ふと、あのととき妙なことを口にしたが、わが子のことをあしざまに云うのは解せぬこと。さてはめんどうをみてやってくれ、と云うことなのだ、と気がついて、出家はしても親心にかわりはない、とあわれに感じ、俊実をひいきした。俊実は大納言にまでなつた。

とある。（彼の子に俊実と云うのはいない。大納言俊実は彼の弟宇治大納言隆国の孫である。）彼の妻は彼の出家に先立つことおよそ十年前の万寿二年十二月一日に亡くなつている（『栄華物語』）。それだけによけいわが子（資綱など）に心を残すことはあつたであらう。「十訓抄」にもこれとまったく同じ話があり、文章もそのままであるが、それ以外の話が少し加えられている。その一つに、後一条院在位の時分、この人はまだ若く殿上人であつた。ある日、上東門院（一条天皇中宮、

後一条天皇生母が内裏に入御したことがあった。あたりをごらんになって、「故院（一条院）がおかくれになってまだ幾年にもならないのに、宮の内はひどくさびれたものだね」とおっしゃったので、後一条院は御心の中、恥ずかしく思つてうつむいていた。すると、顕基卿が殿上（の間）の方で、朗詠の一、二句を口ずさんだ。それを聴いて門院は、「これだけは昔にかかわらず、情の残っていることよ」と喜ばれたので、院はこれに力づけられ、うれしく思われたのであった。

と云うのである。佳い話である。父の俊賢は、頭のはたらく、敏腕家だったらしいが、顕基はそれとはちがう。頭がはたらく、と云うより、ものに感応すること、深切であったと云うべきか。彼は琵琶に通じていたことが、「十訓抄」の別の条に見えている。顕基の妻女の父は太宰帥中納言藤原実成である。実成が筑紫安楽寺の訴え（事の内容は知らないが）によって、公卿を除名され、その党源致頼は隠岐に配流される、と云うことがあった。これは顕基が出家したすぐあとの、長暦二年のことである。実成は公季の一男、母は有明親王女。有明親王は顕基の祖父高明の兄皇子である。

顕基は、祖父高明を悲境に追いやった藤原主流に抱き込まれ、そのおなさけで官界に相当のポストを与えられている自分が不満でならなかった。それよりもむしろ祖父の見たのと同じ月が、言いかえれば虚偽詐謀の逆縁によって真実の月が見たかったのであろう。彼の亡く

なつたのは永承二年（一〇四七）、四十八歳であつた。「続本朝往生伝」（大江匡房）によると、背にはれ物ができた。ようそである。良医があつて直る見込みがあると云う。しかし、彼は、万病の中、正念違はざるはようそである。このついでに早くあの世へ往くにこしたことはない、とて治療させなかつたと云う。

二

年若くして、そろつて発心出家した源成信・藤原重家のことは、前章「花山院物語」には、その事実を指摘するにとどめた。そのいきさつは「発心集」にくわしい。まず重家について云うと

時の一の人、人が重く煩つたところ、その縁故の者どもは歎き悲しみ、そのあとがまに据われ
るはずの人にゆかりある人々はひそかに喜んでゐる。そのありさまを見てとつて、「惜し
むもそねむも心憂き習なり」と痛感、世を厭うことになつたのだ、という。

成信は、といえ

四納言とて、当時中堅官僚のエリテとうたわれていた斉信・公任・俊賢・行成が、ある杖
儀の席で、それぞれ才覚ある（気の利いた）発言をしているのを立ち聞いて、「自分などが
司位の高くなるのを望むのは恥知らずというものだ。自分など、とてもあの方々には及び

そももない。こんなことで官界に在っても仕方ない。彼の世を願うのがよい」とて出家をここに決めた、と云う。

そして二人そろって出家を遂げた。成信廿三、重家廿五であった。成信は村上天皇皇子、兵部卿致平親王の男。母が道長の妻（倫子）の姉である（源雅信女）ところから、道長の養子となった。重家は堀川右大臣顯光の一人息子で、母は村上天皇五の宮である。してみれば成信と重家とは、いとこどうしである。この重家について「大鏡」は

心はへ有職に、世おぼえ重くてまじらひ給ひしほどに、世に久しくおはしますまじかりければにや、出家してうせ給ひにき

と云っている。ところで「愚管抄」では、一人の発心のきつかけについては、「発心集」と少しちがって、成信と重家の二人で四納言の会談を立ち聞きしたことになる。さほど難解とも思われないので、原文のまま引いておく。

四納言盛りの時、輝る中將・光る少將とて、殿上人のめでたき、ありけるは。中將の父は、兵部卿宮（致平親王）、母は鷹司殿（宇多天皇皇孫・源雅信の女倫子）の姉にてありければ、御堂殿（道長）の御子になりて、成信とぞ名は申しける。少將はあきみつ（顯光）の左大臣の子なり。重家とぞ申しける。この二人、状儀（杖儀とあるべきか）のありけるを立ち聞き、て、四納言の、われもわれもと才覚を吐きつつ、定め申しけるを聞き、
「われら、成り

上がりなんのち、あれらがやうにあらんずるに劣りては、世に在りても無益也。いざ仏道という道のあんなるへ入りなん」とて、二人ながら長保三年（二〇〇二）二月三日出家して、少将入道は大原の少将入道寂源とて、池上の阿闍梨の弟子にて聞こえたる人なり。中将入道は三井寺にて、御堂の御薨逝の時にも善知職にてさぶらはれけるとこそ、申し伝へたれ。

とある。

さて、「枕草子」に、成信の中将は、人の声をよく聞きわけ、どんなヒソヒソ話でも、それがだれの声だかわかった、という話がある。彼が四納言の会談を立ち聞きして、彼等の才覚に感心し、わが身のほどをかえりみて、官界引退を決意したということはすでに述べた。彼は立ちぎきしていて、あれはだれが発言しているのか、と、その声だけでその声の主がわかった、というだけではあるまい。めいめいの発言の中に、互に自分の頭のよさを競っている気配を感じとって、えらくなるには、ああまでしなげなければならないのか、それは自分にはできぬことだ、と、いわゆる秀才連中というものに嫌気がさしたのではないか。彼が人声をよく弁別した、ということには「枕草子」の云っていること以上の意味があるかと思われる。「枕草子」には、成信は、このほか二度ほど引き出されている。その一つを取り上げる。——

今内裏（仮皇居）のひむがし（東）をば北の陣といふ。なしの木のはるかに高きを、「い

く尋あらん」などいふ。権中将(成信)、（もと（根もと）よりうち切りて、定澄僧都の枝扇にせばや」と、のたまひしを、（僧都が）山階寺の別当になりてよろこび申す（お礼のあいさつを申す）日、近衛づかさにて、この君（僧都）のいで給へるに、高きけいし（はきもの）さへ履きたればゆゆしう（ひどく）高し。（僧都の）出でぬる後に、（私が、）「など、その枝扇をば持たせ給はぬ」と云へば、「物忘れせぬ」（物覚えがよいですね）と、（成信が）笑ひ給ふ。

定澄僧都は身体が大きく、背の高い人だったのであろう。それで、その枝扇（葉のある木の枝を扇に代用する。）には、高い梨の木を根元から切り取ったくらいなのが似つかわしい、と成信がふざけて云ったのである。これだけで見ても、彼は、くそまじめな、野暮天ではなく、きさくな、さばけた性格であったことがわかる。しかも、才色兼備という、女性について多く使われるこの形容詞が、重家とともに、そのままではまるほどの、出色の人物であった。かてて加えて、村上天皇皇子致平親王の王子である。それが、四納言の才覚の前にたじろいて身を退く気になった、と云うのは、そのまま、すなわち常識的に受けとってすませられることではあるまい。（致平親王の母は左大臣藤原在衡女である。在衡また俗物ではなかつたらしい。左大臣源高明左遷のあと、左大臣には右大臣藤原師尹へ前出が、そして右大臣には大納言の在衡が順ぐりに昇格した。在衡はすでに七十八という高齢ではあり、かつ、学者文人肌の人で政略というものには無頓着であった。高明の配流を耳にしたある

家人が、大臣のポストが主の在衡にまわってくるを見越して、はしゃいでいるのを聞き知った彼は、その家人を追い出したのみならず、新任大臣の饗宴の慣習に従わず、そのことをせずにしたという。気持のよい話である。）

定家編の「新勅撰和歌集」に次のごとくある。

右近中将成信、三井寺にまかりて出家し侍りにけるに、装束つかはずとて、袈裟にむすびつけ侍りける

一条左大臣室

けさのままみねばなみだもどどまらず君がやまぢにさそふなるべし
一条左大臣とは源雅信で、その室は成信の祖母になる。

重家については、すでに「大鏡」を引いて、その人物の一端を紹介しておいたが、ここであらためて重家のことを云うとなると、その父左大臣顕光についてくわしく記さなければならぬ。――

顕光は藤原兼通（兼家の兄）の長男、したがって道長の従兄に当る。母は式部卿元平親王の女（親王は陽成天皇皇子）。彼には一男二女があつて、その一男というのが重家である。一一女とは元子と延子である。元子は一条院の女御（承香殿女御という）になつたが、皇子は生まなかつ

た。延子は三条院の皇子で東宮であった敦明親王の女御になった。敦明親王の母は兼家女（超子）である。ところで、東宮は敦明親王に決まっていたが、道長はわが女彰子（後の上東門院）の生んだ、一条院皇子（敦成・敦良親王）をもつて皇位を継承させたかった。敦明親王は道長の圧力に押されて、身を引いた。小一条院と称される。そこで皇太子にはむろん敦成親王（後一条院）がなった。三条院の在位は四年あまりで、敦成親王がわずか九つで皇位に即き、道長は摂政になった。道長は東宮を辞退してくれた代償として敦明親王をわが俎にとつた。すなわち自分の女（高松殿腹の寧子）を女御として参らせたのである。顕光女・延子は無用の存在というよりむしろじゃま者になった。顕光は延子がかawaiiそうでならなかった。このあたりの「愚管抄」の叙述にはすごみがある。――

彼はむすめを慰めようとて、「こういうことは世の習いなのだから、そう、なげきなされるな」と云ってきかせるが、むすめは何も云わない。火桶に向つてすわっていたのだが、灰に埋もれた火がじわり、じわりと鳴った。さては涙が落ちて、火にかかつて鳴ったのだと見て、「あな、心憂や」と深く悲しみ、そのあまりやがて悪霊となった。

とある。「大鏡」によると、顕光は治安元年に七十八で没した。してみると、東宮問題のいざこざのあったとき、彼はすでに七十をすこし過ぎていたであらう。そのつらさ、悲しさはその老骨に徹したことが察せられる。延子については、「大鏡」には

今の小一条院のまだ式部卿の宮と申ししをり、聿にとり奉らせ給へりし程に、東宮に立たせ給へりしを、うれしき事に思ししかども、(東宮を退いて)院にならせ給ひし後は、(院は)高松殿の御匣殿(寛子)に渡らせ給ひて、御心ばかりは通はせ給ひながら、通はせ給ふ事絶えにしかば、女御(延子)も父大臣(顕光)も、いみじう思し歎きしほどに、御病にもなりにけるにや、過ぎにし未(ひつじ)の年(寛仁三年)の二月ばかりにうせ給ひにき。いみじきもの(悪靈)となりて、父大臣具してこそ、しありき給ふなれ。院の女御(寛子)には常に付き煩はせ給ふなり。その腹(延子)に宮たちあまた所おはす

とある。これによると延子は父に先立って死んだのである。

重家の出家を「愚管抄」の云うように長保三年(二月)のこととすると、父の顕光は五十八であったが、二十五になった一人息子の重家に背かれたのだから、たまったものではなかつたにちがいないし、重家にしても、よくよくの事であつたであらう。「発心集に」は——既述したように——

時の「一の人」が重く煩らうことがあつて、そのまわりのものは歎き悲しみ、その「一の人」が亡くなれば、そのあとがまに据われるはずの側近はひそかによるこんでいる。そのありさまを見て、人間のあさましさがいやになって、彼は出家を思い立つた
とある。

ところで、その時分の「一の人」と云えば、左大臣道長にほかならぬ。もし道長に万一のことがあれば、右大臣顯光がその後任になるわけである。道長の日記「御堂関白日記」（日本古典全集刊行会本）は長保三年の分は欠けていて参考にするわけにはいかないが、二年四月廿三日の条に「宮御読経結願……内に候する間、惱氣有り。」とあり、廿九日の条に「日来尚惱、みに依りて、僧正並に明救闍梨、兩壇修善。」とはあるが「重く煩ろう。」と云うほどのことではなさそうである。しかし顯光方に見れば、道長が近頃健康がすぐれないと聞けば、万一の場合を期待する気持の動くことはなかつたとは云えない。と云うのは顯光と道長とは、いとこどうしでありながら、いな、それなるが故に、いわば宿敵であったのである。顯光の父は兼通、道長の父は云うまでもなく兼家。そして兼通兼家は兄弟でありながら仲がわるかつた。「愚管抄」に

この二人、次第（昇進の順序）たがひたる事どもにて、仲悪しくおはしけり。兼通は兄ながら、弟の兼家に超えられ、追い立たれたる事は定めて、やう有りけん。兼通は兄ながとある。途中のいきさつは飛ばして兼通の最後の日のことに筆を進めよう。

一条摂政（兼家らの長兄・伊尹）の亡くなったあとをついで、内大臣兼通は関白になった。弟の兼家は大納言・右大将であった。それから五年目の貞元二年（愚管抄）に天元二年とあるは誤りであろう）に兼通、病い重くなつて、すでに危うしということであった。それを聞いた兼

家は、次の関白は自分だ、と云うので、威儀を整えて参内した。人々は兼家があわただしく出かけるのを見て、兼通の見まいかと思つたら、そうではなく参内したのであった。このことを聞いた兼通は、ふらふらと病床に起き上がり、四人の者に扶けられて、これまた内裏に参つた。「殿下(関白・兼通)の御参」とのしる声を聞いた兼家は、「すでに死ぬかぎりの人」が来るはずはない、まちがいであらう、と思つていると、それはほんとうであつた。彼はあたふたと退出した。兼通は、「最後の除目(官吏の任免)を行なおうと存じて参つた。近くの公卿を召集せよ」と云つた。そして兼家の右大将を取り上げ、それを望んだ小一条左大臣師尹の子中納言濟時をそれに任じ、関白職は従兄・左大臣頼忠に譲ることにした(「公卿補任」貞元二年の兼通の条によると、頼忠が関白職を譲られたのは十一月四日であり、八日に兼通は死んだ。年五十三)

とある。——兼通・兼家兄弟の、このいきのつまるような敵意はそのまま、彼等の子どもにうけつがれた。してみると、さきほど、「御堂関白日記」を引いて云つたことも案外当っているかもしれない。

だんだん話が込み入つて来たので、もう、あれこれ云わないことにする。とにかく重家はこの宿執を自分一代で断ち切りたかつたのではないか。見方によれば、それは敵にうしろを見せる敗北というほかないものかもしれぬ。しかし敗北を知らぬものが、かえつて最後の敗

北者である、とも考えられよう。

三

藤原顕信について書く段になった。

顕信につよく惹かれるだけに、かえって堅くなって筆がしぶる。自分が彼に惹かれたのは、一つに「大鏡」の名文に感動したからである。――

右馬頭顕信は長和元年（二〇二二）正月十九日、十九歳で突然入道した。家を出るその日、緋のあこめ（胴着）のあまたあったのをば、「あれこれあまた重ねて着るのはうるさい。これらのあこめの綿を一まとめにして、一枚だけ着たいから、そうしておくれ」と乳母に言いつけた。乳母は「あれこれ解きほぐすのもうるさいことですから、綿を厚くしたのを別に作ってさしあげましょう」と云うと、「それではひまどるだろう、何でもよいから早くしてもらいたい。」と云うものだから、乳母は、何かお考えがあつたことだろうと、云い付けどおりにした。それを着てその夜家をぬけ出た。あとでその事を知った乳母は、「こういうおつもりでおっしゃったものを、どうしてそんなものを作ってさしあげたのか。いつもとちがって妙なことだ、と、気がつかなくつたうかつさよ」と泣きまどつたのであつた。事もあろうに、家を出るためのものを、わが手で作ってさしあげたわけで、それと知

って乳母はそのまま絶え入って、死んだ人のようになった。まわりの人々が、「あなたのそんな様子をお聞きになったら、気の毒がられて、顯信さまのお心も乱れましよう。しつかりなさい」とか「いまさら仕方のないこと。これはめでたい事で、顯信さまが仏におなりになれば、あなた自身にとっても、後の世よろしくいらして、この上ないことですよ」とか云うのだが、乳母は聴き入れようもしない。「私は若君が仏におなりになるのもうれしくはない。わたしの後世を若君に助けていただくとも思いません。ただもう悲しいと云うほかないのです。殿(道長)も上(北の方)も、お子さま方がおおぜいらつしゃるからおよろしいでしょうが、この悲しみはわたしだけのものです。」と身もだえするのであった。――

さて顯信は草堂(一条北辺にあつた)で、髪をおろし、それなり叡山に上ぼつた。その途中で賀茂川わたりし程の、いみじう、つめたく覚えしなむ、少しあはれなりし。今はかやうにあるべき身ぞかし、と思ひながら。

と云つたという。うつくしく、かなしいことばである。賀茂の川水の冷たさがこちらにも伝わってくるようである。

顯信の出家を知つた父の道長は「悔やんでもせんないことだ。あまり歎いて、あれの耳に入らるようではいけない。それであれの心が乱れたのではかわいそうだ。法師子がなか

ったのだから、これもよいだろう。あれが幼い時分に法師にしようと思ったのだが、あれは聞き入れなかった。」

と云った。自分にはこれが道長の負け惜しみのようにきこえる。父の自分に何のことわりもなしにいきなり家を出たことは、道長にとっては、「やりおったな。」とでも云うべきところであろう。それは自分に背を向けたことにほかならぬ。そこに彼はヒヤリとするものを感じたにちがいない。

顯信は道長の子とは云っても、正妻の鷹司殿(倫子)腹の子ではない。母は高松殿(明子)で、かつて道長の父兼家等のために政界から葬り去られた高明の女である。したがって顯基とはいとこどうしであり、顯基は六つ年下である。道長が高明女を迎えたのは、姉東三条院(詮子)の格別のはからいによると云う。父高明が筑紫に配流されたあと、まだ幼少の明子を引きとって世話をしたのは、叔父の盛明親王であった。そして高明も盛明も亡くなったあと、手もとに置いて大事に養育したのが東三条院であった。道隆、道兼、道長らが競って明子をほしがったが、とくに道長に許した、と云うことである。道長と明子との間には四男二女があった。四男とは頼宗・顯信・能信・長家である。正室倫子の生んだ子女とあわせると十二人の子どもがあったのである。道長はこれら多くの子女をたくみに使いわけた。俗な云い方をすれば正室倫子腹の子女はいわば一軍選手、高松殿明子腹の子女は二軍選手で、その

扱い方にはちゃんとした区別があった。まず一軍の女子は天皇の側近に送って皇子を生ませ、自分及び一軍男子（頼通・教通）が摂政関白となる足がかりとした。二軍のほうは補強要員として、適宜にこれを利用した。例えば（一々云えないのでことばどおり例えである。）顕信の兄の頼宗の妻として、従兄伊周の女を当てがった。おどろき入ったことである。これにおどろくのは、自分などには道長の深謀遠慮の程は測られぬせいであろう。

内大臣伊周は、かつて（九九六年）道長のために太宰権帥として配流されたことのある人である（『花山院物語』参照）。彼は寛弘七年正月廿九日に、まだ卅七という若さで死んだ。三男二女があったが、とくに二人の娘のことが彼の心をかきむしった。死ぬ前に、北の方に

「むすめたちは、女御、后ともしたいと思つたのだが。なぜ、自分よりも先に、あのむすめたちを死なせてくれと、神仏に祈請しなかつたのか。尼にすれば、それまた外聞がひどくわるいし、厄介な事態をひきおこすであらう。とにかく死んだあとのおれの恥にならぬように心してくれ。」

と、悲痛な遺言をしたのであつた（『榮華物語』初花）。「自分よりも先に、あのむすめたちを死なせたかつた」とあるのは、花山院のなくなられるとき、姫君たちの行く末を案じて「あとに残しておくのはふびん故、忌いみのうちいみに（忌中に）取り殺して連れて行くぞよ。」と、云われたのを思わしめる、断腸の言である。この伊周の一女（大姫君）が、人もあらうに、道長の

子頼宗といっしょにさせられたのである。道長のさし、がねによること、まずまちがいない。罪ほろぼし、と云いたい、そんな殊勝な心根ではあるまい。思切り殴ぐりつけた相手の頭を後でさすってやって、「さっき殴ぐったのは、いわば時はずみで自分の本意ではなかった、悪く思うなよ。」と云ったような、ずるがしこさがそこに見てとれる。伊周一家を手なづけることが自分にとってプラスになる、という打算にはかなるまい。二軍の子どもはこのように、すなわち自分および一軍の繁榮・安泰を補強する資材として役立てられるのである。このへんのところ、うまく云えないもどかしさがあるが、前に述べた頼宗の実妹寛子の場合を考えれば、そのことは一層はつきりするであろう。三条院の皇太子敦明親王（小一条院）に詰め腹を切らせ、皇太子をおのれの女（彰子）の生んだ敦成親王（後一条院）に譲らせ、その代償として、この寛子を小一条院にくれてやった。それもほんとうの代償ならまだよいが、小一条院にはすでに延子というひとがいた。道長のこの処置が延子とその父の顕光にとつてどれほどむごいものであったかは云うまでもないが、それだけに寛子そのひとにとつてもうれしいことではなかったにちがいない。それは、延子をいけにえにして自分もまたいけにえに供されたと云うほかないことである。

さて、顕信のことに立ちかえる。彼の出家は、父道長の、自分ら高松殿腹の子女を見ざるい目を、見返えしたのだと云えよう。顕信の受戒の日には、多数の供をしたがえて道長は

山に登った。しかし、いざ戒壇に上ほった顕信のほうを見るのがなかった。そのことを顕信はたまらなく残念に思った。道長は、自分を見る顕信の目にひきめを感じたのであろう。

「大鏡」は、このあとにこんな話を付け加えている。

顕信の実際の兄弟の頼宗・能信が大納言になった折の晴れがましい模様をきかせたところ、『顔色もかえず、念誦しながら「かようのこと、ただしばしの事なり」と云われたのは、ごりっぱであった』と大藏卿通任と云うのが語った。

というのである。

「栄華物語」(日蔭のかつら)は、「大鏡」のいうのとはかなりちがったことを伝えている。

明け方、顕信がいなくなった、というので道長は人をあちこちに走らせて探させたところ、山の横川の聖(源信とも増賀とも云われる)のもとで出家を遂げた、ということがわかった。道長は山に出かけて、顕信に会った。「どういふわけでこんなことをしでかしたのか。何か不足でもあるのか。官爵のことか、女のことか。おれの目の黒い間は、何事にせよ、お前を見捨てようとは思ってもいかなかったのに……」と云った。顕信は、「別にわけとてないので。幼い時分から出家したい気持があったのですが、あなたに思召しのないことを言い出すのが気恥ずかしくて、言いそびれて、つい今日になってしまったまです」など弁解した。

とあって、「大鏡」の云うこととはくいちがつている。大鏡には、道長自身、顕信を法師にしたかったが、当人がいやがるのでそのままにしたとあったのである。しかし、このくいちがいを詮索してみてもはじまらない。くいちがいはあっても、顕信がついに、父にほんとうのことは云わなかったことにはかわりがない。また道長とて凡くらではない。自分の虚をつかれた狼狽と心の痛みはまぬがれなかったであろう。ついでに云うと、伝西行撰の「選集抄」には、道長が自分に忠勤を励む但馬守高雅の女を顕信に押しつけようとして、これを顕信がおそらく思わなかった、

とある。実否はともかく、このような話の伝えられるだけのものが道長の心術に見出されるのは事実である。

顕信が死んだのは万寿四年五月十四日のことである。三十四歳であった。「榮華物語」

(玉の飾)に――

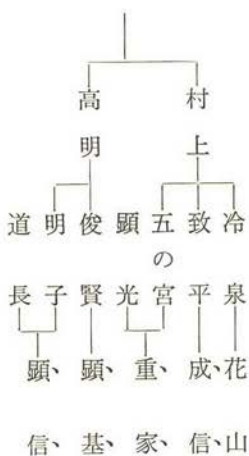
御堂(道長)は、「あはれ見ずなりぬること。出家の折、心憂し、口惜しと思ひし、(それは)悪しう思ひけり。かく久しうあるまじかりけるものを」と、来し方行く末まで思ひ続けらるることもゆゆしければ、ただ御胸のみふたがりておぼさる。

とある。この道長の述懐の中には存外彼の本心を示すものがあるのではないか。傍点を付けたあたりは、顕信の出家を痛み悲しむよりは、自分を出しぬいたことがしゃくにさわつ

た、ということをやがわしめる。

あとがき

以上、中納言顯基をはじめとして、彼に先立って若くして出家した、成信・重家・顯信などについて述べた。彼等は精神の系譜においてきわめて近い仲であるのみならず、肉体の系譜においても決して遠い間柄ではない。花山院をも加えてそれを簡略にまとめてみると左のとおりである。



顯基は高明が亡くなってから生まれたのであるから、苦悶する祖父をじかに目にすることはなかった。しかし、時を隔ててもその苦悶に感応する天稟が彼にはあった。彼の出家を聞

いて尊卑みな落涙した、と云われるのは、日ごろ、彼がみなから敬愛されていたというだけのことではあるまい。彼はいつまでもこの世に止まる人とは思われなかったが、ついにその日が来たのか、と云うことではなかったか。罪咎なくして配所の月を見ばや、と云うことは、聖徳太子の世間虚仮こけ、唯仏是真と云うことと別のことではない。その配所の月こそ、世間の虚仮を照らし出すものであり、その配所においてこそ、はじめて真実の月が見られるのである。その月は「望月の欠けたることのなしと思へば」と詠んだ道長の見た月とは、まったく別の月である。そのことを顕基は祖父の追懐をこめて云ったのではなからうか。

(昭和四十一年二月三日稿)

花山の跡を追うもの——高倉院と光厳院と——

前編 高倉院のこと

一

鹿ヶ谷との謀議に憤慨した平清盛は、関係者を処分したあげくに、後白河法皇を鳥羽殿に押し込めた。み子の高倉天皇はご心痛のあまりに

つやつや供御も聞き召さず、御惱とて常は夜のおとどにのみ入らせおはします。

というありさまであった。このことは、かの小督を見失ったときのご悲歎のありさまを思いあわさしめる。そこには

主上斜ななめならず御歎きあって、昼は夜のおとどにのみ入らせ給ひて御涙に沈ませ給ふ。夜は南殿に出御なつて、月の光を御覧じてぞ慰ませましますしける。

とある。

ところでこの小督の失踪と天皇の生母建春門院の薨逝とはほぼ時期を同じくしていたと考

えられる。小督が嵯峨の在家で見つけ出されたのは、八月十日あまりの月の明かるい夜であった。しかし何年の八月十日あまりなのかはわからないが、彼女が皇女を生んだのは、治承元年十一月の初めであることは藤原兼実の日記「玉葉」であきらかであるから、彼女が探し出された八月というのを、その前年すなわち安元二年のことにしても無理ではあるまい。建春門院の亡くなられたのはこの年の七月八日であった。「愚管抄」は、「瘡かさでうせ給うた、」と云っている。

玉葉によると、母后お見舞の行幸は一度もなかった。それは、

「主上自身この御病がお有りで、母后の病苦のありさまをまのあたりにされて、おからだに障ることがあつては」

との清盛の意向によるものらしい。御容態すらくには主上にお知らせしていなかつたのである。兼実は

病まざるの病を恐れて親の疾を問はず、あに君道ならんや。悲しいかな。

と、悲憤している。

母后の薨逝は天皇にとっては不意のことであつた。

御衣を被り、あえて動き給はず。見奉るもの、ほとんど堪ふべかず

というありさまであつた。御衣を頭からかぶつて、泣き伏したまま身動きもなさらぬ、とい

うことであらう。御葬送のすんだあとで、兼実は天皇の側近に在った五条邦綱(その女が天皇の乳母であつた)から、

主上の御悲歎、日を逐うて増すばかり。御食膳を聞き召さぬ

と聞いた。清盛にしてみれば、むすめの中宮が皇子を生むまでは、天皇に万一のことがあつては、という配慮であつたにちがいないが、自分の野望のために、彼は天皇を精神的に——いや肉体的にも——殺しつゝあつた。清盛のこの仕打ちは天皇をあざむき悲しませただけではなく、母后をもあざむき悲しませたであらう。亡くなる前に、わが子にどんなに会いたかつたことか。門院は清盛の妻(時子)の妹である。この時天皇は十六歳であつた。

つまり母后を失つた悲しみと小督を見失つた悲しみとは重なりあつていた。その二重の悲しみのうち、小督のほうだけを平家物語は描いている、と思われる。

後白河法皇幽閉のことにもどる。このときの高倉天皇の悲歎を描いている平家物語の叙述に潤色はないと見てよい。それは母后を失つたときの様子から察せられることである。ところで、この場合にも小督のことが重なりあつていのではないかと思われる。「山槐記」(治承四年四月十二日の条)によると、彼女が尼になつたのは治承三年の冬のことである。生年廿三というのは「平家」と一致しているが、「平家」では皇女出生のすぐあとに尼にして追放したように受けとれる。それは「平家」の付けたアクセントの効果であらう。そして一方、後

白河院が法住寺殿から鳥羽殿に移されたのはこの年の十一月廿日のことである。父法皇の幽閉の悲しみのかげに、かねて覚悟はしていたものの、小督は尼になり、その生んだ皇女は齋院になるといふ悲しみが天皇にあった。天皇はその短い生涯において、いつも二重三重の悲しみの盃を飲まねばならなかった。

さて天皇は、鳥羽殿にある父法皇にひそかに御書をさしあげた。それには、

かからむ世には、雲井に跡を留めても何にかはし給ふべき。寛平(宇多)の昔をもとぶらひ、花山の古をも尋ねて、山林流浪の行者ともなりぬべうこそ候へ

とあった。このとき天皇は十九歳で、花山院の退位出家したときと同じ年であった。この文面どおりに花山の古を思い出していたかどうかはわからない。しかし天皇が退位を決意していたことは事実である。「玉葉」治承三年十二月六日の条に、参内した兼実が女房を通してひそかに天皇の内意が示された。すなわち、

去る夏のころより、避讓の念切なれど、自然遲怠して、今大乱出来した。明春には必ずそうするつもりである

とのことであつた。果して翌四年二月廿一日に讓位せられた。その月の十二日に兼実が参内したところ、主上は「御風氣不快」であつた。その風氣は永びいた。それで讓位の儀の次第を延引するやうに、万人が計奏したが、天皇ひとり承引せられず、予定通り万事運ばれたの

であった。この「玉葉」の記述によって、天皇が鳥羽殿にさしあげた御書の文面が作りごとでないことは明らかである。天皇は讓位のあとすぐに、いづくしま敵島に御幸されている。云うまでもなく、敵島は清盛の崇敬するところである。この御幸は、清盛の法皇への憤りをやわらげんためである、と「平家」は云っている。それが院にとつてのいわば「山林流浪」であった。

二

「平家物語」の、高倉院崩御を叙する「新院崩御」の条の次は「紅葉」の条で、そこに院の仁慈を伝える逸話が出ている。林間に酒を温めて紅葉を焼く、という白楽天の詩句にひっかけた話と、盗難に遭える少女を助けてやった話とである。残念ながらこれらの話は事実として信ずる気にはなれぬ。しかし、その残念さは、「玉葉」や「健寿御前日記」などの伝える事実によって、償われてあまりある。「健寿御前日記」(健寿御前は藤原定家の妹で、建春門院の女房であった。)に次のような話が出ている。

承安四年三月のある日、高倉天皇は法皇の御所法住寺殿へ、御方かたが違えの行幸をなさった。

このときに健寿御前は、若く美しい小督をはじめ見かけたのであった。さて、いよいよ還御という日に、里(実家)にいる内侍を迎える車を、藏人が忘れて、やらなかった。(内

侍がいなくては還御ができないらしい。神器を捧持するためであろうか。法皇も女院（建春門院）も、ごきげんをそこねて、「み簡ふだけづれ」（免官させよ）と仰せられるお声がきこえる。当の藏人はいたく恐縮してひかえている。すると、主上のおことばで、「いまだ院宣を返しまゐらせたことはおぼえねど、このたびの行幸、いま一日延べまゐらせたるは、よろこび言はんずるぞと言へ」（いままで父君の仰せに口答えしたおぼえはないが、父君のおそばに居られる日がもう一日延びたのは、お礼を言うぞ、と言え。）とあつた。おそばの皆はほっとした。法皇におかれても「かぎりなく、うつくし」と、思し召した御けしきあらわれて、かさねてのお叱りのことばはなかつた。当の藏人はどんな気持がしたであらうか。

というのである。天皇十四歳の時のことである。

「建礼門院右京大夫集」でも、天皇のなまのお声がきかれる。ある年の月の明るかつた夜、天皇が笛を吹いていらつしゃつたが、ことにおもしろく聞こえたので私（右京大夫）がおほめ申し上げた。天皇が中宮のおそばに来られたのちに、「右京大夫がひどくおほめ申していました」と中宮が申し上げると、天皇は「それは空事そとを申しているのだ」とおっしゃつたとかで、

さもこそは数ならずとも一すぢに心をさへもなきになすかな（いかにもわたくしは取るは足らぬものですが、わたくしの真心までもないがしろになさいますね）

と私がつぶやいたところ、ある女房が「あの人がこんなことを申しております」と、天皇に申し上げると、お笑いになって、扇の端に書きつけなされたのは

笛竹のうき音ねをこそは思ひ知れ人の心をなきにやはなす（わが吹く笛の、なきけなほほどまじい音を思い知っているので、てれくさくてああ言ったが、人の真心をないがしろにしてよいものか。）

ということであった。――

自分の笛にまるで自信がないので、むしろ自分自身に向かってあのように言ったので、ほめてくれた人の心をないがしろにするつもりは少しもない。ほめてくれたことはやはりうれしいのだ、と云うことであろうか。人の心を傷つけまいとする、敏感な心づかいが――すでに「健寿御前日記」で見えたものが――ここにも出ている。さて次は「玉葉」である。

建春門院の亡くなられた翌年すなわち安元三年の正月十六日に、主上の書かれた金泥御経を拝見した兼実は、

尤も神妙。御筆勢を見るに、天骨を得たりと謂ふべし

と感歎している。この金泥御経は、亡き母後の供養のためのものであった。このあと、天皇は一ヶ月にわたって瘡瘡はうそうを患っている。ぼくはふと源実朝のことを思った。そしてさらに、治承三年七月廿日の条に、

長光入道がやって来て、『孫の長政が内の非蔵人に補せられ、悦ばしく存じている。過日、

自分の述懐の詩一首が天覽に備えられて、哀憐の天氣(天子の御気色)があつたと承つたが、今度この御恩があり、恐悦極まりない。』と語つた。

とあるのを知つて、天皇を実朝に思いよそえても無理ではないと思つた。「愚管抄」は、天皇について

漢才すぐれ御学問ありて詩作り云々

と云つている。ここで天皇の兄宮もちひと以仁王のことが思いあわされる。「平家物語」によれば以

仁王は

紫毫(筆)を揮つて手づから御作を書く

とあつて、書にすぐれ詩作もした。書と詩と、この二つの道において天皇はこの兄宮に学ぶことがあつたのではないか。以仁王は天皇に長ずること十歳、生母は建春門院ではない。

太子にも立ち位にも即かせ給ふべきに、建春門院の御そねみによつて、押しこめられさせ給ひけり

ということであつた。そのことは、心やさしい天皇を苦しめていたにちがいない。できることなら位を譲りたかつたであらう。しかし中宮が清盛女と決まつたその日から、その不可能なことはあまりにもあきららかであつた。治承四年五月十五日の夜、以仁王が京を出奔して三井寺へ向かつた、と知つたときの高倉院(同年二月二十一日にすでに讓位された。)のおどろきと悲

しみとは察するにあまりある。

さて、前に、「平家物語」伝えるところの高倉院の逸話は信用できない、と云って、それにかわるものを「健寿御前日記」「建礼門院右京大夫集」「玉葉」などから取り出した。しかし考えてみると、紅葉を焼いて酒をあたたためた下部をとがめず、かえってその風雅をほめられた、というのは、「健寿御前日記」の藏人に対するいたわりとまったく同じことであり、また盗難に遭って泣く少女の声をきいて助けてやった、というのは、長光入道の詩に感してその孫を取り立ててやったというのと、—ほかのものには聞こえぬひそかな声をきくという点で—相通ずるものがある。してみれば、「平家物語」はでたらめを云っているのではなかった。

三

平家物語「新院崩御」の条に——

上皇（高倉院）は、去々年法皇の鳥羽殿におしこめられさせ給ひし御事、去年高倉宮（仁王）の討たれさせ給ひし御有様、都遷りとしてあさましかりし天下の乱れ、かやうの事も、御心苦しうおぼしめされけるより御悩つかせ給ひて、常は煩はしう聞えさせ給ひしが、東大寺興福寺の亡びぬるよし聞こしめされて、御悩いよいよ重らせ給ふ。法皇斜ななめならず御歎きありし程に、同（治承五年）正月十四日六波羅池殿にて上皇終に崩御成りぬ。御宇十二

年……御年廿一。

とある。「小督」の条にも、小督が尼にされて追放された、と云ったあとに、

「主上はかやうの事どもに御惱はつかせ給ひて遂に御隠れありけるとぞ聞えし。」

とある。院が、そのために御惱つかせ給う、「事ども」はまことに多くあった。院はそれらの「事ども」に、ある距離を置いて応接するのではない。そのなかに自己を埋没させ心身を痛めるのであった。そのことをほくらは、母后に死なれたときの院においてたしかに見た。そのことが院の「御惱」の実態であった。

それはさておいて、福原で院の健康はとみにわるくなったようである。福原に皇居を遷した、いわゆる都遷りは治承四年六月のことだが、その十二月に早くも京都にひきあげねばならなかった。

同十二月二日、俄に都遷りありけり。新都は北は山にそひて高く、南は海近くして下れり。波の音、常はかまびすしく、塩風烈しき所なり。されば新院、いつとなく御惱のみしげかりければ、急ぎ福原を出でさせ給ふ云々

と「平家」は云っている。藤原定家の「明月記」によると、天子(安德)両院(後白河、高倉)が京都に還御あったのは十二月廿六日であった。高倉院は六波羅池殿にお入りになった。そのときの様子について定家は

後聞く、新院御車より下りおはします。なほ、たやすくは近習を召寄せず。女房の肩に懸らしめおはします。入御の後偏に御寝云々と記している。

院の崩御の前日に、兼実は院すでに危急に及ぶ、ときいて、脚気の苦痛にもかかわらず、お見まいにかけつけた。側近の五条大納言邦綱が院のおことばを彼に伝えた。

病重くして、命且暮に在る。遂に今一度面謁できぬのが遺憾である。病を押して参上してくれたことを悦ばしく思う

とのことであつた。これを承つて彼は「不覚の涙双眼に浮ぶ」のを禁じえなかつた。ついで邦綱の言うのには、

今夜五壇の法を始めたのだが、用途叶わざる上、僧が多く辞退するので、明日行なうことにする。院の御有様はもはや助かる見込みはない。御面・手足すこぶる腫れ給い、ひどく熱苦しがる。それで、火の気は遠ざけている。薄い御衣をも重苦しがる。しかし御意識ははっきりしている。

そこで兼実は、

命を惜しみ給ふか

ときくと、邦綱は声を落として、

そのお心はある。お嫌いな御灸治がまんして、もう五十所に及んでいる。

と云う。兼実は悲歎忍びがたかった。

院崩御のことを聞いた健寿御前は、定家に車を世話してもらって池殿へかけつける。そして帰って来て、定家に御最期のありさまを報じた。御枕頭に侍していた実全僧都が、方違えかたがをしなければならぬのでお暇をいただきたいと云う。ある女房がそれを押し止める。院は、暇をやつて方違えをさせよ。

と再三仰せられた。それで実全は退出した。院は父法皇の御念仏をききながら息をひきとられた。——院がこの世に残した最後のことばも、人をいたわるものであった。御葬送の夜、ひそかに見物の雑人に交まじった定家は「落涙千万行」であった。

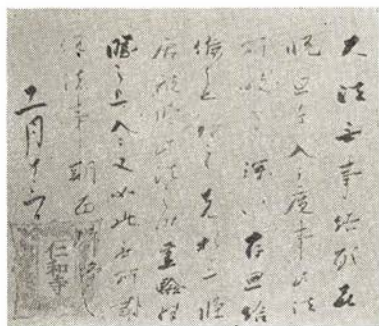
ところで、邦綱かたがが兼実に言つたことの中で、

用途叶かなわざるの上、僧が多く辞退する

とあるのは、合点のゆかぬことである。ここに清盛の冷淡さが反映しているのではなからうか。「平家」にも「玉葉」にも「明月記」にも（そのほかのものは見ないが）院の崩御前後において清盛夫妻の姿を見出すことはできぬ。だからと云って、彼等夫妻が院に冷淡であったとは云いきれぬかもしれぬ。けれどもその関心はそれらの記事にあらわれぬほどのものであったとは云えそうだ。

院崩御の翌日、兼実のところには左小弁行隆が来て云うのには、諸国勇士、しかしながら（皆が皆）謀叛の心がある。それで五畿内及び近江、伊賀、伊勢、丹波等の国々に、武士を補して、それによって遠国の凶徒を禦がしむべし、と故院が仰せ置かれた。いかが取計らったものであろうかと。兼実は、

故院の遺詔であるからには異議に及ばぬと答えている。ここに「故院」とあるのは、高倉院以外には考えられぬ。院は瀕死の床に在ってなお天下のことを苦慮しておられたのである。それは平家物語からは想像もできぬことである。



高倉天皇宸翰しんごん

大法無事結願喜

悦且千今度事此法

所致之由深以存思給

候者也加之先於三条

殿被修此法之時靈驗殊

勝之上今又如此無所謝

候諸事期面拜 謹言

十一月十三日

後編 光嚴院のこと

一

元弘元年（一一三二）八月廿七日、後醍醐天皇は皇居を脱出、笠置山に潜幸して画策するところあったが、幕府の手にとらえられ、京に連れ戻された。そして幕府の強要によって退位、十九歳の皇太子量仁親王が皇位を嗣いだ（光嚴院）。次いで、後醍醐天皇は隠岐に遷された。ところがその後、護良親王・楠正成等の神出鬼没の活動と機敏な足利高氏の寝返りなどがあった形勢逆転。六波羅の南北探題は一院（後伏見）・新院（花園）・主上（光嚴院）を奉じて京を脱出、関東へ逃亡する途中、近江で敗北した。このときのありさまを「梅松論」は次のように伝えている。――

六波羅を出たのは元弘元年五月七日の夜半であった。瀬多の橋を渡り、野路のあたりで夜が明けた。守山辺の野伏どもがこの敗軍の六波羅勢に討ちかかってきて、そのために多くの損害を蒙った。その夜は近江国観音寺を一夜の皇居として、翌五月九日、東へ心ざして落ちて行くところに、同国番場の宿の山に、先帝の御方と号して、近江美濃伊賀伊勢の

「悪党」どもが旗を上げ楯をつきならべて海道を塞ぎ、攻め立てた。六波羅方はもはや逃れるすべもなかった。「恐れながら仙洞を害し奉り、各々討死、自害仕るべきよし」一同申したが、大将北条仲時（北探題）の云うのには、「我等命を生きて君を敵に奪はれんこそ恥なるべけれ。命を捨てて後は何事かあるべき。」と云って、自害して果てた。これに従う者数百人。南方探題北条時益は、すでに七日夜、四宮河原で流矢に当って死んだ。――

「大平記」によると、「梅松論」の「先帝の御方」は、「先帝の第五の宮、御遁世の体にて、伊吹のふもとに御座あり」ける方で、主上・上皇をとらえまいらせて、その日は長光寺へ入れ奉り、三種の神器そのほかの重宝を請け取った。そして主上・上皇は見なれぬ敵軍に前後を囲まれ、あやしげな網代輿あじろこしに召されて都へ還り上ほった。くどいようだが、さらに附け加えると、「竹むきが記」（竹むきは日野資名の女。有名な日野資朝の姪に当る。）には、

五月廿七日、御所さま（光嚴院）、都に返らせ給ふ。おやはらからも、苔の衣こけに立ち返りぬ、と聞くにも、さらにおどろかるる世になんありける。

と云っている。「おや・はらからも云々」は、この時、竹むきの父日野資名などが出家したことを云っているのである。資名は院の寵臣で、後日、院の返り咲きに一役買っていることはまた述べる。

さて、都に戻った一院（後伏見）は、光嚴院にてがみで、「面々に御出家あるべし。」と申し

遣ったが、院は聴き入れなかった、と「増鏡」にある。花園・光厳院は、時局の転換を期待していたと思われる。——「増鏡」を引いたこのついでに、光厳院の後妃のことにふれておく。「増鏡」は、

西園寺故内大臣（実衡）の姫君で今御方と云われるのが参上し、いずれは后となられるであらうと誰しも思っていたところ、院のおぼえが「あざやか」でなく、三条大納言公秀の女三条と云うひと（のちの陽祿門院）の腹に宮々（崇光・後光厳院たち）が多くできた。と云っているが、妃として花園院皇女寿子内親王を落としている。

二一

正慶二年（元弘三年）の五月廿三日、すでに隠岐おきを脱出して伯耆国船上山に在った後醍醐天皇は、京へ還幸の途に就いた。そして、その翌々日には、光厳院を廃し、正慶の年号を止め、元弘に復した。六月二日、天皇は、兵庫で正成に迎えられた。ちょうどそのころ、鎌倉陥落の吉報がもたらされた。——後醍醐天皇の勝ち誇った帰洛を迎えた光厳院の気持は、どんなにかみじめであったろう。しかし、いわゆる建武中興の日は長くつづかなかつた。そして光厳院は再び世に出ることになった。それは後醍醐天皇に叛いた足利高氏の要請に応じて、彼に院宣を与え、彼の捲土重来を成功させたからである。

話はすこしさかのぼらねばならぬ。関東から、新田義貞の軍勢を追撃しつつ高氏の入京したのは建武三年正月十一日であるが、やがて西上してきた北畠頭家のために敗れ、丹波を経て兵庫に落ちのびた。そこで朝敵たることの不利を覚って、

持明院殿の院宣を申しうけて、天下を君と君との争ひになさばや（『太平記』）
 と思いついた。「梅松論」には、

夜更けて（延元元年二月十一日）赤松入道円心、潜かに將軍（高氏）の御前に参りて申しけるは……凡そ合戦には旗を以て本とす。官軍は錦の御旗を先立てり。御方は是れに対向の旗なきゆへに朝敵に相似たり。所詮持明院殿は天子の正統にて御座あれば、先代滅亡以後定めて叡慮心よくもあるべからず。急ぎ院宣を申し下されて、錦の御旗を先立てらるべきなり。

とある。そして光厳院へ密使を送った。日野資名の斡旋によって院宣が高氏のもとに届いたのは、高氏が備後の鞆とらに到着したときである。院宣の使者は醍醐三宝院の賢俊であった。賢俊は資名の弟である。高氏はこの院宣をふりかざして諸国の武士に呼びかけた。それによって、一旦九州まで逃れた彼は勢いをもりかえすことに成功した。そして京を目ざして取って返し、兵庫湊川みなとに楠正成を破った。これで万事決まった。高氏は再び都をその手に収めた。後醍醐天皇は叡山に遷幸した。延元元年（二三三六）五月のことである。花園・光厳兩院及び

光嚴院の皇弟豊仁親王もその一行の中に加わっていた。ところが光嚴院は仮病をつかって、途中でわざと時をすごし、一行をやりすごしておいて、東寺に在った高氏のもとに身を寄せた。高氏はななめならず喜んだ。ついで八月十五日、光嚴院の院政が決定せられ、その院宣によって豊仁親王が踐祚せんそした（光明天皇である）。

「太平記」に、光嚴院重祚とあるのはまちがいであるが、院が政務を聴いたことはまちがいない。それは後醍醐天皇によって否定された院政の復活であった。光嚴院のこの返り咲きについて、太平記には、

その比物ひものにも覚えぬ田舎の者ども、茶の会酒宴のみぎりにて、そぞろなる物語しけるにも、「あはれ、この持明院殿ほどの大果報の人はおはせざりけり、軍いくさの一度をもし給はずして、將軍（高氏）より王位を賜はらせ給ひたり。」と、申し沙汰しけるこそおかしけれ。

（巻第十九）

とある。年号は延元を止めてその前の建武に復した。建武は後醍醐天皇の建てられた年号であるが、高氏の叛をこころよしとせずして、改元した、と考えれば、建武にもどしたのは、そのしっぺ返えしの意味があつたのであろう。

後醍醐天皇が大和国賀名生に、さらに吉野山中へ移られたのは延元元年（三三六）十二月のことである。すなわち、この十一月叡山から京にかえった天皇は高氏のために花山院の故宮に押し込められて、

「この世の中もたのみ少なく思し召されければ、寛平の遠き跡をも尋ね、花山の近き例をも追はばや、と思し召し立たせ」

られたのであった。ところが刑部大輔大江景繁なる者の勧めで、花山院殿の脱出を敢行、大和へ潜幸することになったのである。

これについて「梅松論」は云う。

建武三年（延元元年）十一月廿二日の夜、君は御和睦と号して（叡山より）都へ還幸ありければ、御迎への為に武家の輩、賀茂河原辺にぞ参りける。……（前には隠岐へ遷幸されたが）今度はいづくの国へ御幸あらんずらんなど沙汰ありし時分、潜かに花山院殿を御出でありしかば、洛中の騒動申すばかりなし。……去る程に君は大和国あなう（賀名生）といふ山中に御座の由聞こえしかば、名詮自性、然るべからずとぞ、口々に申しける。（「あなう」は「あな憂」に通ずると云うのであろう。）

ここにおいて、いわゆる南北朝対立の世となった。

ちょうどこのころ、いわゆるアヴィニヨンの幽囚によって、ローマ法皇のローマとアヴィニオン（南仏）との対立がひきおこされた。南北朝の対立はそれに似ている。とすると、高氏はさしずめフランス国王・フィリップ四世と云うところか。

光厳院は、高氏に起死回生のきつかけを与えた恩人であったが、それだけに高氏との私的関係があらわで、その権威はとかく軽く見られたらしい。そのことはさつき引いた「太平記」の記事からも察せられる。それについて、さらにこういうことがある。

北朝康永元年（一三四二）の九月に、豪勇できこえた美濃の守護土岐頼遠が、ある所で酒に酔つての帰り途に、院の御幸に行きあわせた。「院の御幸ぞ、馬を下りよ」と咎められると、「なに、院というか、犬というか、犬ならば射て落さん。」とて、院の御車に矢を射かけた。この事件が表沙汰となると彼は勝手に美濃に帰ってしまった。足利直義は彼を呼びつけて、十二月一日六条河原で首斬った。これを聞いた道を過ぐる田舎人どもは、「院にだに馬より下りんには、將軍に参り会ひては土を這ふべきか」と、あざけた。

という。ここで、かの高師直の吐いたせりふが思い合わされる。彼は、
都に王と云ふ人のましまして、若干の御領を塞げ、内裏・院の御所と云ふ所の有りて、馬より下りるむつかしさよ。もし王なくて叶ふまじき道理あらば、木をもって造るか、金を

鑄るかして、生きたる院・国王をばいづかたへも皆流し捨て奉らばや。
と云ったのである。

高氏方の実力者が、こんな気焰をあげながら奢りをきわめている間に、亡父の遺志を忘れず、臥薪嘗胆の幾歳月を送っていた楠正行の立ち上がる日が来た。正行は河内・和泉の同志をひきいて紀伊に攻め入り、隅田城を落とす、ついで、天王寺方面より南下する細川顕氏をむかえ撃つてこれを敗走させた。

幕府は山名時氏を差遣してこれを授けしめたが、正行は、すばやく、顕氏・時氏の駐屯する天王寺住吉を襲つてこれを破つた。顕氏は逃亡し、時氏は負傷した。それは貞和三年（正平二年・一三四七）十一月のことであった。しかし正行は翌年正月、高師直・師泰と河内四條畷に戦つて討ち死にした。地下に埋もれて十余年、ようやく地上に花開いて一年を待たず散つてしまった。師泰（師直の弟）は河内の南朝勢の一掃に任じ、師直は吉野に向かった。後村上天皇は吉野を捨てて賀名生に遷つた。その行宮は、「新葉集」に、
わすれめや御垣にちかき丹生河のながれに浮きてくだる秋霧
と詠まれているものである。

師泰は聖徳太子の河内国磯長廟を略奪し、師直は吉野の行宮を炎上せしめた。

四

南朝の抵抗がにぶると、幕府は内部分裂を露骨に示した。それは足利直義ただよしと執事こうのもろ高師直なおとの抗争であり、ひいては高氏・直義兄弟の反目である。正行討伐において、直義方の細川・山名が失敗し、師直・師泰が成功したことは、師直等の勢威を高からしめた。直義は大きく後退して、政務を高氏の子義詮よしかたに譲らざるをえなくなり、ついに出家した（慈源と号した）。しかし、その出家は、実はあらたな武装であった。直義は観応元年（一三五〇）十月、京都を出て大和へ走り、高氏、師直に対抗する姿勢をあらわにした。そして京に人を上ほせて光厳院の院宣を取りつけたのは、兄高氏の故智にならったのであろう。そして一方では、南朝への接近をこころみている。いわゆる首鼠しよそ兩端りうたんを持つところである。ところろが、直義の捲き返えしが、案外早く奏効して、直義方の軍勢が京に乗り込むと、義詮は、上皇・主上を置き去りにして、折から西征の途にあった高氏のもとに走った。それは観応二年（一三五二）正月十五日のことである。高氏は、中国探題直冬（高氏庶子・直義養子）を討つべく西下していたのである。——やがて直義と高氏との間に和議が成った。その時分、高師直・師泰は、直義方の手にかかって殺された。しかし、高氏にしてみれば、直義との仲直りは、急場凌ぎしのぎのつもりであったのだから、それは次の反撃に移るための低姿勢にほかならな

かった。——この時分、北朝は、光明院にかわつて、崇光院（光嚴院皇子）が皇位に在った。

さて、高氏と直義との仲に破局の日が来た。直義は、京都を出奔して、北陸を経て、鎌倉に下った。今度は北朝も南朝もそつちのけにして、自滅の途を暴走した、と云うほかはない。直義討伐を決意した高氏は、背後の不安を除くために南朝と和した。それは政權を全面的に南朝へ返還する条件のものであった。かくして直義追討の綸旨をいただいた高氏は、十一月三日に東下していった。彼は翌年正月五日鎌倉に攻め入り直義を降伏させた。そして二月廿六日に直義は死んだ。死因は黄疽だと云われるが、実は一服盛られたらしい、と「太平記」は云っている。頼朝・義経は異母兄弟であるが、高氏・直義は同母兄弟である。

南朝と高氏との和議にもとづいて、北朝の崇光天皇・皇太子直仁親王（花園院皇子）は廃せられ、観応二年は正平六年（二三五二）と呼ばれることになった。そして十二月廿三日に中院具忠を勅使として北朝の三種の神器以下代々の宝物を接收した。この三種の神器は虚器ではあるが、後醍醐天皇の授与せられたものであり、且北朝において二十余年の間神器として崇めてきたものであるから、放置しておくわけにはいかぬ、と云うのであった。「太平記」には、

偽物であるので、璽しるしの箱は棄て、劍と鏡とは近習の雲客に下されて衛府の太刀、装束の鏡にした。

とあり、「玉英記抄」(一条経通の日記)には、

偽物ではあるが、臣下の第に置くわけにはいかぬ、というので賀名生へ持参した。

とある。洞院公賢の日記(園太暦)には

駕輿丁等が来て鳳輦ほうれんで昇いて行った

と記されている。事ここに到ってあわてふためいたのは、北朝奉公の公卿・僧官たちであった。我先にと賀名生に駆けつけて平身低頭する。それで、

賀名生の山中花のごとくに隠映して、辻堂・温室(浴場)までも幔幕を引かぬ所はなかり

というにぎわいであった。

五

正平七年二月廿六日、主上(後村上天皇)は賀名生山中を出立。そして河内東条・摂津住吉・天王寺を経て、山城八幡に着いたのは閏二月十九日であった。北畠顯能・楠正儀等の軍勢は京に入った。和議成ったとして、油断していた義詮は、あわててこれを七条大宮に支えようとしたが支えきれず、今度も上皇・主上を置き去りにして、近江に走った。細川頼春は戦死した。同廿七日、顕能の兵五百余騎は持明院殿を包囲した。それは持明院三上皇(光

敵・光明・崇光）及び麿太子（直仁親王）をとらえて南山に遷すためであった。このとき新院（光明院）は、

かねがね、遠く花山の跡をも追はばや、とねがっていたが、それもかなわなかった。せめて今、恩免を蒙って、積門の徒となり、辺鄙に幽居したい。

と歎願したが、それは許されなかった。「園太暦」によると光明院は前年十二月廿八日にすでに落飾されたのであった。おともをする近臣はわずか三人であった。あとに残される「皇后・女院は、みすの内・几帳の陰に伏し沈ませ給う」のであった。かくして三上皇は八幡に拉致された。それは閏二月廿一日のことであり、二月三日にはさらに河内東条に移された。そして六月三日に賀名生へ送られた。と云うのは、近江へ走った義詮が、「宮方合体御違変」を呼号して兵をあつめ、八幡を攻め、五月十一日宮方はこれを支えきれずに河内東条に退却、ついで後村上天皇は賀名生に引き返えされたからである。義詮は後村上天皇が八幡を退去する時分に、等持寺の祖曇を東条に遣って三上皇の京都還幸のことを計ったが成功しなかった。「園太暦」（文和元年五月十八日）によると、祖曇は玄恵法師の真弟（実子であって弟子でもあるもの）で、楠木の縁者であるところからこの事に当たったのだという。ところで「吉野拾遺」は、三上皇の賀名生の住まいについて、

正平みづのえたつの年の春、旧都の主上（崇光）・本院（光厳）・新院（光明）ともに

とらはれ人とならせたまひて、この山に入らせたまへるに、黒木の御所のあさましさに、なほそのほかに、うばら・からたちを隙なく植ゑたるうちに押しこめてたてまつる。まことに見る目もいとかなし。

と云っている。このとき、光厳・光明院の皇弟梶井二品親王（尊胤）も同じくとらわれの身となつて、「この山のあさましげなる柴の庵」に住んでいたが、脱出に成功した。それから三上皇の身边はいよいよきびしく警戒された、とある。

宮方が山城八幡から河内東条へ退却したことはすでに触れておいたが、話をまたそこに戻す。——一旦近江に逃れた義詮は、三月十五日には京を奪回した。それに先立って彼は、正平の年号を止めて観応に復した。京を出て八幡に拠つた宮方を待つていたものは、食糧難であつた。それは、うちつづく戦乱のもたらしたものであつた。食糧の供出もしくは徴発は思うにまかせなかつた。宮方は疲弊した。それで、五月十一日の義詮方の総攻撃に堪えられず、多くの犠牲を出して、また賀名生に引き返さざるをえなかつた。義詮は京都を回復したが、さてその主がなかつた。これには当惑した。そこで、やむなく光厳院第二皇子茨宮弥仁親王（母は陽祿門院）を探し出して、これを立てることにした。ところが、その皇位を認証する権威は存在しない。幕府は皇子の祖母、すなわち光厳・光明両院の生母・広義門院にすがつて、門院が院政を執るといふ形で踐祚の手続きをすませた。この手続きを正当化するもの

として、洞院公賢は、かの継体天皇の遠い例を引き合いに出した。このようにして即位したのが、後光厳天皇である。十五歳であった。「続神皇正統記」によれば、

広義門院は、光厳上皇たちが紀伊の山中に在るのは、所詮、義詮のせいであり、義詮はいわば仇敵である、とてなかなか聴き入れなかった。

と云う。そのことは、公賢の「園太曆」の記するところでもある。

幕府は自己の権威を支える権威を求めて、このような苦肉の策に出た。しかしそれは、かえって天皇の、ひいては幕府の権威を引き下げるのに役立っただけである。万人の承認する権威なきところ、強いものがちの情勢がかき立てられて、国内は蜂の巣をつついたような、四分五裂、七花八裂の状態に陥っていった。

六

正平九年（文和三年）の四月、南朝の柱石・北畠親房は賀名生で亡くなった。その年の十月、後村上天皇は皇居を河内天野の金剛寺へ移した。新葉和歌集に、前中納言為忠の歌として、

天野の行宮にてよみ侍りける歌の中に、
君すめば嶺にも尾にも家居して深山ながらのみやこなりけり

とあるのは、皇居のおかれた天野のありさまをしのぶよすがになる。

持明院の三上皇は、賀名生における二年有余、金剛寺での三箇年の幽囚の日を経て、延文二年（正平十二年・一三五七）二月に京に還ることになった。そのわけは「太平記」ではよくわからない。そこには

とても（どうせ）都には茨宮すでに御位に即かせ給ひぬる上は、山中の御栖居すまい、あまりに御痛いたはしければとて

とあるだけである。茨宮（後光厳院）を擁立するという奇手に出られて、持明院の三上皇・皇太子を引き止めておく意味がなくなつたからではあるうが、広義門院が、この年の閏七月に亡くなつてるところから察して、門院の命旦夕に迫つていたことともかわりがあるかも知れぬ。

門院の歌（続千載和歌集）に

有明の月こそ見しにかわらねど別れし人は影だにもなし

とある。この「別れし人」は、賀名生に連れ去られたみ子たちのことではないか。

光厳院妃・陽祿門院は、とつくにこの世を去つていた。都に還つた光厳院は、光明院ともども夢窓の御弟子となり、光厳院は、嵯峨の奥小倉の麓にかすかなる庵を結び、光明院は、伏見の大光明寺に入った、と云う。しかし夢窓はその数年前に亡くなつていたのであるか

ら、帰洛してはじめて御弟子となったというのではないであろう。崇光院については、
故院（後伏見院）の住み荒らさせ給ひし伏見殿に移らせ給ひて御座あれば、参り仕る月卿雲
客の一人もなし。（太平記）

とある。崇光院は、後光厳院の在位を不当として復位を望み、それがかなえられず、おもしろくなかつたらしい。と云うのは、「椿葉記」（後崇光院が後花園院に与えた書）に、
崇光院・後光厳院は御一腹の御兄弟にましませども、御位の争ひゆへに、御中あしくなり
て、御子孫まで不和になり侍れば云々

とあるからである。それはさておいて、高氏は、この翌延文三年四月に死んだ。その知らせ
を、光厳院は冷やかな気持できいたであろう。

申しおくれたが、光厳院は、すでに賀名生にて出家（法名・勝光智）した。「園太暦」文和元
年八月十二日の条に、次のようにある。――

本院御方が去る八日、西大寺長老を戒師として御素懷を遂げた由。御発心か欺誑か、尤も
不審……御歳四十歳なり、驚くべき事なり。

この本院御方とあるのは光厳院のことにちがいない。同じく十九日の条に、「大炊御門前
大納言氏忠が素懷を遂げた」との記事があり、「この人は院に数十年昵近の人であり、院
の出家のおともをするつもりなのか、憐むべし、」

と云っている。

ところで「太平記」は、このあとのほう（卷三十九）では、光嚴院は、

都へ還御成りし後は、伏見の里の奥・光嚴院と聞えし幽閑の地にぞ住ませ給ひける。

とも云っている。小倉の麓からこの地に移ったのか。院はここにも浮世の風のおとづれるのが厭いとわしくて、順覚という僧だけを供にして、仏道修行の旅に出られた。

七

ところで「太平記」の光嚴院諸国行脚の記事は、いかにも作り話めいていて、そのまま信ずる気にはなれない。しかし「斑鳩嘉元記」に、貞治元年（正平十七年・一三六二）九月、院が法隆寺に参詣する、との記事があるから、まったくの作り話とも云いきれない。この年は、院が賀名生から還京した日から五年目になる。いずれにせよ、「太平記」の、院の諸方行脚の記事は、ここには書き出さぬことにする。

さて遍歴を終えた院は、一旦伏見の光嚴院に戻った。院はまったくの人間ぎらいになっていた。もうだれの顔も見たくない、だれにも顔を見られたくない。そこで光嚴院を出て丹波国山国と云うところに跡を消した。（その遺跡皇常照寺は今もある。）

「出づるに江湖あり、入るに山林ありて、一乾坤の外に逍遙して、破布団の上に光陰を送らせ」

られたが、翌年夏のころより御不豫の事あって、七月七日（貞治三年）に亡くなられた。五十歳。院の死は、夜空に消える流星のように孤独であった。急をきいて、皇弟の光明院と天台座主・梶井宮（承胤法親王）とがかけつけて葬礼の事に当った。

万乗の先主・一山の貫頂、山中に棺を荷ひて御葬送を営ませ給ふとある。遺勅によつて人々の参集を止めたので、三・四人の籠僧だけで中陰の法要を勤めた。

院が、徹底して人間ぎりになったのは、無理のないことである。自分の院宣を請求しておきながら南朝との和睦を計った直義はやむをえないとしても、自分に恩義のある高氏はどうであるか、利用できるときは利用しておいて、いざとなると平気で自分を見捨てた。そのため、結局南朝の手にとらえられて幽囚のはずかしめを受けねばならなかった。そして勝手に後光厳天皇を立て、それで事足れりとして、われらのことは、ほとんどかえりみなかつた。われらを救出するために、彼等はどれだけの努力をしたか、本気になればそれはできないはずはない。それらを思って院は、高氏父子へのいきどおりに心燃えたであらう。しかし、そのいきどおりは、やがて自分自身に向けられたのではないか。彼等の不信もさること

ながら、その不信の徒をたよりにしたわが身が恥ずかしくうらめしい。院の人間ぎらいは、激しい自己嫌悪と別のものではなかった。院は世間を離れるために、山林に跡を消したというだけではない。そこに、おのれを棄て、おのれを葬りたかつたのではないか。

院の歌は、「風雅集」（光嚴院撰定）に三十首、「新千載集」に二十首、「新拾遺集」に十五首取められ、その他「新後拾遺集」に七首、「新統古今集」に二首ある。「光嚴院御集」一卷があるが（続群書類従）、これは実は花園院の御集であると云われる。院の歌のいくつかを出しておく。

つばくらめすだれの外に数見えて春日のどけみ人影もせず

夕日さす落葉が上に時雨過ぎて庭にみだるる浮雲のかぜ

それまでは思ひ入れずやと思ふ人の恨むる節ぞさてはうれしき

知らざりし深き限りは移りはつる人にて人の見えけるものを（意難解）

治まらぬ世のためのみぞうれはしき身のための世はさもあらばあれ

頼むまこと二つなければ石清水一つ流れにすむかとぞ思ふ

貞和の百首の歌召されけるついでに

十年あまり世を助くべき名は旧りて民をし救ふ一事もなし

〔新後拾遺集〕

〔以上風雅集〕

（昭和四十二年二月三日稿、昭和四十四年八月七日改稿）

陽成院について

藤原兼実の日記「玉葉」を拾い読みしていたら、「陽成・花山の狂といへども」という文句が目についた。天皇にもっとも近いはずの撰閔家の彼が、ひどいことを云ったものだな、と思つて、あらためてその条に目を通してみた。

(治承三年六月十七日) さきごろ法皇(後白河)が、ある蒔絵師の家にお出かけになり、その仕事ぶりを御覧になつた。院は「何かお土産みやげが欲しいな」と、冗談じゆうだんをおっしゃつた。その蒔絵師は貧乏で適当な物の持ちあわせがない。法皇の冗談を本気にしていた彼は、後日美麗な蒔絵の手筈を持つて院の御所に参入した。それを近侍のものが見とがめて、あわてて追い出した。

という。それだけのことで兼実は

陽成、花山の狂といへども末だかくの如きを聞かず。法皇又また軽々狂乱云々

と云っているのである。陽成花山を狂ぜしめたのは、あるいは狂気であると尾びれを付けて云いふらしたのはだれであるか。それは藤原撰閔家ではないか。その撰閔家のひとりとして

兼実が、「陽成花山の狂」と冷やかにきめつけ、ちょっとした事で後白河法皇を「狂乱」呼ばわりすることそのことが、「陽成・花山の狂」の実態がどんなものかを暴露しているのではないか。

花山院については別稿でくわしく述べたことだが、一言だけ付け加えておく。それは花山院の「狂気」が、その苦惱ときりはなされて、おもしろおかしく取り沙汰されたことである。(それは陽成院についても云えることだ。)即位の日の、女官凌辱事件(「古事談」)は、その一例であるが、「小右記」のその日の記事によって、その事実でないことはすでにわかっているのである。

さて陽成院のことだが、兼実の弟慈円が「愚管抄」で、

この陽成院、九歳にて、位に即きて八年(在位)、十六までの間に、昔の武烈天皇の如く、
なめならずあさましくおはしければ云々

と云っているのは仕方がないとしても、北畠親房またこの通説に従って、陽成天皇に讓位されて、そのあとに光孝天皇を立てた摂政基経をべたほめ、にほめている。基経は陽成天皇の伯父すなわち生母(高子)の兄である(ちょうど花山院と藤原義懐との間柄と同じである)。

そしてこの親しい間柄にもかかわらず、基経があえて陽成天皇を退けた、といっているので親房はひどく感服しているのである。一体それならば、陽成天皇がどんなひどいことをしたの

か。それが一向はつきりしないのである。かりにひどいことがあったにしても、まだ少年（数え年の十六歳以前）の天皇のことである。だからこそ基経が摂政であったのではないか。基経が天皇をじゃまにしたのには、別の政治的理由があったにちがいない。その政治的理由とは何か。

藤原氏が他氏排斥によつて政權独占を圖つたことは周知のことである。陽成天皇のことについて、その目で見れば、真相が見えてくると思う。その目で見ると、天皇の妃たちの中で、紀氏・伴氏の存在が目につく。これが基経の氣になることではなかつたか。伊勢物語に出てくる惟喬親王は母が紀氏であるがために、弟宮（清和天皇・陽成天皇の父帝）に取つてかわられた。弟宮の生母は良房女（明子）である。良房は基経の叔父であり、養父である。彼は幼主の摂政となり、藤原氏の政權独占の基礎を置いた。また、伴大納言善男が応天門を焼き、その放火の罪を左大臣源信になすりつけたことがばれて、伊豆に流されたのは、ついこの間（貞観八年）のことである。その共謀者は紀豊城など紀氏の人々である。この事件には裏の裏があるであらう。さかのぼつて承和の変がある。それで、橘逸勢等が処分されて、橘氏は去勢された。この承和の変と応天門事件を結ぶ線の延長上に陽成天皇退位問題を置いて考えることは、見当ちがいではあるまい。紀氏伴氏の女が天皇の側近に参つたのは、退位の前か後かわからない。しかしどっちも同じことで、紀氏伴氏を近づけることがはじめから院の意向

であつたにちがいない。天皇が異常であるとするならば、この女性の選択も異常である。少なくとも基経にはそのように思われたであらう。天皇の妃たちの中に紀氏伴氏がいる、という以前に、天皇の乳母めのとが紀氏であつた。乳母が紀氏であるがために、その側近に紀氏伴氏が呼び寄せられたのかもしれない。ところで、この乳母の子の源益（父は嵯峨天皇々孫源蔭）が暗殺されるという事件があつた。それは元慶七年十一月九日のことである（三代実録）。益は天皇の乳母子であり、「殿中に侍す」とあるから、日夜天皇の側近に在つたであらう。下手人は何者ともわからない。

ところで、基経が上表して摂政を停やめんことを請うたのは、この年の八月十二日である。そして十月九日にも同様のことがあつた。しかも今度は「月を累かさねて事を視ず」とあつて、いわば居直つた態度を示したのである。自分が停めるか、天皇が退位するか、二つに一つという脅迫にはかならぬ。益暗殺事件はちょうどその時分におこつたのである。それを基経の裏面からの脅迫とみて不思議はない。天皇は翌年二月に「病氣がち」を理由に位を退いた。ところがおどろいたことには、益を殺したのは天皇である、との説のあることを知つた。その説の出所は、兼実の「玉葉」である。その承安二年十二月二十日の条に、

大夫外記頼業真人が兼実をたずねて、用談のついでに「陽成院暴逆無双。自ら刀を抜いて人を殺す。かくの如き事に依つて昭宣公（基経）、天子の位を奪い奉つて小松天皇（光

「孝」に授く云々」と云った。

とある。頼業がなぜだしぬけに三百年近くも昔の話を持ち出したのか、また兼実はこの話をきいて、我が意を得たりとばかり喜んだと思われるが、そのことは、陽成院のことが藤原摂関家にとって、うしろめたい事件としてついてはなれなかったことを逆に示しているように思われる。この頼業という男が、兼実にゴマをすることは「玉葉」に明らかで、例えば後白河法皇ぎらいの兼実に向かつて、

「故俊憲入道（有名な信西入道の息男）が、法皇は晋の恵帝に比すべき暴君である、と自分に話したことがある」

と云って、兼実をうれしがらせているのである（元暦元年七月九日の冬）。天皇退位の真相はすでにあきらかである。それで、あらためて、天皇の乱行と云われるものを取り上げて検討してみよう。

「三代実録」元慶七年十一月九日（天皇退位の直前）の記事——天皇は馬が大好きであった。

（花山院もそうであった。）禁中の閑所でこつそり馬を飼っていらつしゃった。小野清如が飼育係りで、紀正直を先生にして常に騎馬されていた。このことを聞いた基経はすぐさま内裏に参り、清如等を宮中から追い出した、

とある。ここで非道いのは、天皇か基経かは別にして、基経の怒りを買ったできごとはこれ

だけしか出ていない。在位の間のことは記載をさしひかえたので、退位されたあとの行状から推して知るべし、ということなのかもしれない。それならば退位されたあとの行状にはどんなことがあるか。「扶桑略紀」(宇多紀)の伝えるところを取り出してみる(寛平元年八月十日の条)。

基経が参内して、談話のついでに云ったのには、陽成院の人、天下に充満し、ややもすれば人をいじめ苦しめる。濫行する者あれば、例外なしに自分は院のものだと云う。これほどの悪君は今まで見たことはない、

と。これは、院にかわって、うつぶん晴らしをするものが多い、ということ、院が「悪君」であることを示すものではない。——十月廿五日の条には、左大臣(源融)の奏上したことばとして、

陽成院、御馬に乗って、そのまま六条の下人の家に入る。お供の者はみな杖鞭を手にしている。女・子供は驚いて、逃げかくれた。悪主は国に益はない。

とある。「悪主」ときめつけるには、あまりに情況が漠然としている。

——同廿九日、院は、駿河介の女子を追捕させ、いじめたあげくに、彼女を琴絃で縛って水底に漬けた、

とある。たしかにひどいな、と思う。しかし、琴絃で縛ったとは、どういうことか、「水底」とは、河の底なのか、池の底なのか。情況漠然としていること、前条とかわりがない。

十二月二日、甘南扶持なる者の報告に——彼が島下郡（摂津国か）に行つてみたところ、陽成院がこの郷にお越しになつて、備後守藤原氏助の宅を御在所とした。家人の土女はあちこちに逃げかくれ、家にはだれもない。これは安倍山の猪鹿を狩るのが目的であつた。安倍山を院の禁野（御料地）にして、立入り禁止の札を路頭に立て、そのため往還不便で、行路の人が難儀している、

とある。これだつて狩猟中、危険につき立入禁止にただけなのかもわからない。

同月廿四日、左大臣（源融）奏して曰く、「宇治に在る自分の別荘に陽成院がお越しになり、柴垣をこわしたり、その辺のうまやの馬を奪い取つて原野を馳けまわつたりする。」と。

以上が院の乱行として伝えられることのすべてである。そして、女子を琴絃で縛つたという話のほかはすべて、院の乗馬好きにかかわりのある事ばかりで、かつて禁中でこつそり試みていたことを、院（上皇）になつた今、大つびらに、自由にやっている、というにすぎない。それは、はた迷惑もあつたかもしれないが、乱行というには程遠い。ここで気づくことは、これらの記事の中で、左大臣源融が二度顔を出していることである。融は三代実録元慶八年六月十日の条に

左大臣、貞観十八年冬より門を杜して出でず、今日始めて太政官候廳に就いて事を視

る

とあって、陽成院即位の日以来出仕を止め、光孝天皇立つに及んで再び政務に就いたのである。そのわけはわからないが、陽成院に背を向けたことはたしかである。その融の云いふらすことだ、ということも院乱行の評判の実態について暗示するものがある。この融のことが「大鏡」(基経伝)に出ている。――

陽成院下りさせ給ふべき陣定(公卿會議)にさぶらはせ給ふ融のおとど、左大臣にて、やむごとなくて、位につかせ給はむ御心ふかくて、「いかかは、近き皇胤を尋ねば、融らもはべるは」と言ひ出でたまへるを、この大臣(基経)こそ、「皇胤なれど、姓(源)賜はりて、ただ人にて仕へて、位につきたる例たしやはある」と申し出でたまへれば、さもある事なれば、この大臣の定めによりて、小松の帝(光孝)は位につかせたまへるなり。――

源融は嵯峨天皇の皇子である。彼はこの時六十をいくつか越していた。本気で皇位を望んだとは思えないが、陽成天皇の退位は望むところであったと思われる。ここに、

「皇胤ではあつても、姓を賜わつて臣下に降つて、位についた例があるか」

とあるが、このすぐあと、その例ができた。すなわち、光孝天皇のあとをついだ宇多天皇(光孝皇子)は、さきに源姓になって王侍従と云われた。陽成院み位の日、殿上人として、神社行幸に舞人をなさつたことがある。位についてから、陽成院(院の御所)を通過して行幸あ

ったところ、陽成院は、「当代はわが家人（家来）ではないか」と、とおっしゃった、と「大鏡」にある。

陽成院には皇子女が九人あった。（男子七人、女子二人）「つれづれ草」に、

元良親王、元旦の奏賀の声、甚だ殊勝にして、大極殿より鳥羽の作り道まで聞こえけるよし云々

とある。この元良親王は院の皇子である（母は藤原氏）。

わびぬれば今はた同じ難波なるみを尽くしても逢はむとぞ思ふ

これは親王の歌である。ところで釣殿の宮（光孝皇女）の若狭の御ごというひとを陽成院が召されたことがあるが、またのお召しがないので、歌をさしあげた、

かずならぬ身に置く宵の白玉は光みえさず（注 見えたかと思うとすぐ引込む）ものにぞありける

この歌をごらんになった院は、「あな、おもしろの歌よみや」とおっしゃった、と「大和物語」にある。このように歌に感ずることのあった院ではあるが、院の御製は一首しか伝えられていない。しかしその一首は「わびぬれば」の歌とおなじように、たれ知らぬものはない。

つくばねの峯より落つるみなの川恋ぞつもりて淵になりける

陽成院は八十二歳の長寿でこの世を去られた。それは村上天皇の天曆三年九月廿九日のことであった。再三、「大鏡」を持ち出すが、それによると、その四十九日の法事の御願文（大江朝綱作）に「釈迦如来の一年の兄」とあったとある。釈迦如来は八十歳で入滅したのに、院が一つ上の八十一歳でなくなられたことを云うのである。（実は八十二歳である。）花山院のことはずいぶん突っ込んで（しかし同情的に）描いている。「大鏡」ではあるが、陽成院乱行のことは一言も云っていない。そのことも、陽成院狂乱の風説を疑がわしめるものではなからうか。

ぼくは最初に「天皇にもっとも近い筈の摂関家の彼（兼実）がひどいことを云ったものだな、と思った」と云ったが、それは思いちがいであった。実は摂関家の人間だからこそ、「陽成・花山の狂」などと口走るのである。「陽成・花山の狂」といえば、自分がやましさを感ぜないですませるし、自分がいい子になれるからである。彼も摂関家の枠の中でしか感じ考えられない人間であった。

（昭和四十四年九月七日稿）

第四編
峠とうげと岬みさきと



足柄峠より相模平野を望む



相模，真鶴岬三つ石

第四編 峠と岬と

はじめに

「万葉集」防人の歌に

足柄の御坂た廻り 顧みず あれは越え行く 荒男も 立しや憚る 不破の関 越えて
 わは行く 馬の蹄 築紫の埜に 留りゐて あれは斎はむ 諸は 幸くと申す 帰り来ま
 でに

とある。この中に「足柄の御坂」とあり、「築紫の埜」とある。この一つの歌に、わが国土の特色がよくあらわされている。峠は坂と云われたことは、この「足柄の御坂」でわかる。碓氷峠は「碓日の坂」と云われた。この峠にせよ、埜（崎）または岬にせよ、我国には無数にあって、わが国土の性格を示すものである。峠という文字は和製漢字である。また、崎・岬はわれわれのミサキに該当するものではない。ところで、「たうげ」（峠）は「たむげ」に由来すると云われる。旅の無事を祈って神に「たむげ」をするからである。したがって「たうげ」は海上にもある。「土佐日記」に――

まことにやあらむ、海賊追ふと言へば、夜中ばかりより舟を出して漕ぎくるみちに、手

向けず、と、ころあり。楫とりして、幣たいまつらするに、ぬさの東へ散れば、楫とりの申してたてまつることは、「このぬさの散るかたに、御舟すみやかに漕がしめ給へ」と申したてまつる。

とある。この海の「たうげ」は岬に近いところだと考えられる。

一 「古事記」における

峠は坂と云われたことはすでに述べた。「古事記」にある「黄泉比良坂」も峠でなければならぬ。神避りし伊邪那美の命恋いしさに伊邪那岐の命は黄泉国に出むいた。よしと云うまで自分を見るな、と伊邪那美の命に止められたのに、伊邪那岐の命は待ちかねて、つい見てしまった。そこに見出されたのは、愛する人の醜いありさまであった。怒った伊邪那美の命は黄泉醜女や雷神どもをして伊邪那岐の命を追わしめる。

なほ追ひて黄泉比良坂の坂本に到りし時、その桃子三箇を取りて待ち撃てば、悉に逃げ返りき。……最後にその妹伊邪那美の命、身自ら追ひ来たりき。ここに手引の石をその黄泉比良坂に引き塞へて、その石の中に置きて事戸を度す時……その謂はゆる黄泉比良坂は今、出雲の国の伊賦夜坂と謂ふ。

この記事は倭建命の物語を考えあわせせる。――

それより入り幸いでまして、悉に荒ぶる蝦夷等を言向け、また山河の荒ぶる神等を平和して還り幸でます時、足柄の坂本に到りて、御糧食す処に、その坂の神、白き鹿に化りて来立ちき。ここにすなはちその咋ひ遣したまひし蒜の片端をもちて、待ち打ちたまへば、その目に中りてすなわち打ち殺したまひき。

とある。「黄泉比良坂の坂本」と「足柄の坂本」との類似だけから考えても、黄泉比良坂が峠であることはたしかである。桃の実や蒜で待ち打った、とあるのは、「たむけ」をしたことにはかなならぬ。足柄の記事につづいて、――

故、その坂に登り立ちて、三たび歎かして、「吾妻はや」と詔りたまひき。故、その国を号けて阿豆麻と謂ふ。

とある。これは遠く浦賀の岬の方を望んで、そこで入水した弟橘姫命への訣別のことばである。伊邪那岐の命は自分を追いかけて来たその妹に「事度」をわたした、すなわち離別を云いわたしたのである。ところで、黄泉比良坂の場合は、その坂は峠であるとともに、横穴式墳墓の羨道とも重なり合っているであろう。

その神避りし伊邪那美の神は出雲国と伯伎国との界の比婆の山に葬りき。

とあるから、そこから黄泉比良坂すなわち伊賦夜坂まで追いつ追われつしたわけである。「出

雲風土記」の意宇郡の条に、伊布夜社の語が出てゐる。また意宇郡を合併した八束郡に揖夜がある。

庶兄弟の八十神の迫害を遁れて、根の堅州国の須佐之男命のもとに身を寄せた大穴牟遲の神（大國主の神）は、須佐之男命の女須勢理毘売と親しくなつた。ところが須佐之男命の度重なる試鍊に堪えかねた大穴牟遲は、須佐之男命が頭のシラミ、実はムカデを取つてくれてゐるものと思つて、氣持よきそうに寝入つたすきを見て、彼女と手に手をとつて駈け落ちをす

る。——
ここにその神（須佐之男）の髪を握りて、その室の椽に結び著けて、五百引の石をその室の戸に取り塞へて、その妻須勢理毘売を負ひて、すなわちその大神の生大刀と生弓矢と、またその天の詔琴を取り持ちて逃げ出でます時、その天の詔琴、樹に払れて地動み鳴りき。故、その寝ませる大神聞き驚きて、その室を引き仆したまひき。然れども椽に結ひし髪を解かず間に、遠く逃げたまひき。故、ここに黄泉比良坂に追ひ至りて、遙に望けて、大穴牟遲の神を呼ばひて謂ひしく、「その汝が持てる生大刀・生弓矢をもちて、汝が庶兄弟をば、坂の御尾に追ひ伏せ、また河の瀬に追ひ撥ひて、おれ大國主の神となり、また宇都志國玉の神となりて、その我が女須勢理毘売を嫡妻として、宇迦の山の山本に底つ石

根に宮柱ふとしり、高天の原に氷椽^{ひざ}たかしりて居れ、この奴^{やつこ}。」といひき。——

「その天の詔琴樹にふれて地動み鳴りき」とあるのはすばらしい表現である。琴のひびきは同時に二人の胸のどよめきでもある。さてここにも「五百引の石」の出ていることに注意しよう。また「黄泉比良坂に至りて、遙^{はろばろ}に望^みけて」とあるのは、黄泉比良坂があきらかに峠であることを示している。そこに立って、家郷を出て行く若い二人に、その背後から、祝福のことばをおくって見送るのである。「坂の御尾に追ひ伏せ、また河の瀬に追ひ撥ひて」というのは、坂が峠であり、河の瀬が河の渡り場であることを知れば、つまりは交通の要衝を押えるということにほかならぬ。

さて、大国主の神は、出雲の御大^{みさき}の御前^{みさき}（美保の岬）にいらっしやった。すると、波の穂をわけて天の羅摩船^{かがみ}に乗りて、鵜（注・宜長は蛾（ヒムシ）とする）の皮を内剝^{うちはぎ}に剝^{はぎ}いて衣服^{きもの}にして帰り来る神があつた。それは少名毘古名^{すくなひこな}の神である。——

それより二柱の神相並ばしてこの国を作り堅めたまひき。然^さて後はその少名毘古名の神は常世国^{とこよのくに}に度^{わた}りましき。

少名毘古名の神を失つた大国主はさらに切に協力の相手を求めた。すると海を光^{てる}して依^より来る神があつた。——

その神の言^のりたまひしく、「よく我が前を治めば、吾能く共与^{とも}に相作り成さむ。若し然

らずは国成り難けむ。」とのりたまひき。ここに大国主の神曰ししく、「然らば治め奉る状は奈何にぞ。」とまをしたまへば、「吾をば倭の青垣の東の山の上に拝き奉れ。」と答へ言りたまひき。こは御諸の上に坐す神なり。

岬は外から来るものを、あるいは警戒し、あるいは迎え入れるところである。少名毘古名は、異国から帰った（帰り来る）ものであるうし、御諸の神は、異国からやってきた（依り来る）ものであるう。美保の岬は境港を抱き、近くに隠岐島を控えて、海上交通の便は山陰随一である。すでに国内を平定した大国主は、今は新知識を取り入れるのに積極的であった。そしてその勢力は強大なものになった。

家郷を出て他国に赴くには峠を越えねばならぬ。家郷の山河の見えるかぎりには他国に足を踏み入れたことにはならぬ。いわゆる「天降り」も家郷を出て異郷に入ることにほかならぬ以上、「天降り」の観念は、峠を上り下りする体験なしには生れなかつたであらう。防人の歌に――

大君の命かしこみ青雲の棚引く山を越よへえて来ぬかも
とある。これが「天降り」の原体験でなければならぬ。

故、ここに天日子番能邇々芸命に詔りたまひて、天の石位を離れ、天の八重たな雲を

押し分けて、稜威の道別き道別きて、天の浮橋にうきじまりそり立たして、竺紫の日向の高千穂のくじふる嶺に天降りまさしめき。……ここに詔りたまひしく、「此地は韓国に向ひ、笠沙の御前を真来通りて、朝日の直刺す国、夕日の日照る国なり。故、此地は甚吉き地。」と詔りたまひて、底つ石根に宮柱ふとしり、高天の原に氷椽たかしりて坐しき。——

この「天の浮橋」のイメージは、雲間に見える高い峠から抽象されていると考えられる。山は此方と彼方とを隔てるものである。その隔たれるものを結ぶものは峠である。峠は、いわば山にわたされた橋である。この「天降り」の道案内に立ったのは、国つ神の猿田毘古の神であった。神倭伊波礼毘古命（神武天皇）の征旅の途中、速吸の門で見つけた国つ神は「海道」をよく知っているというので、パイロットにされた。国つ神である猿田毘古は、山また山の陸道をよく知れるが故に一行を先導したのにちがいない。——「韓国に向ひ、笠沙の御前を真来通りて」とあるのは、書紀の記述との比較において説のあるところだが、ここでは問題にしない。「韓国」をそのまま生かすとすれば、それは朝鮮ではあるまい。韓国は広くは異国のことである。ここでは南につづく、奄美・沖繩諸島のことにしたほうがよい。笠沙の岬は薩摩半島の西南端にある。なぜここに笠沙の岬が出てくるのか。高千穂からみて、さいはての地ということでもあろうか。ミコトはやがてこの笠沙の岬で見つけた「麗はしき美人」と結婚する。彼女は大山津見の神の女、名は神阿多都比売、またの名は木花佐久良毘売

と謂うのであつた。神阿多都比売の名は地名の「阿多」に由つていと思われる。阿多は笠沙から程遠からぬところ（日置郡南端）にある。

以上思いつくままに書いてきたが、さて振りかえつてみると、意外にもそこに、はつきりした筋道がみとめられるのである。大国主の場合には、須佐之男命（根の堅州国）→黄泉比良坂（峠）→美保岬→少名毘古那神という展開が見られ、邇々芸命（にぎのみこと）にあっては、天照大神（高天の原）→高千穂嶺→笠沙岬→大山津見神という展開があつて、その展開の仕方はまったく同じである。そこで、高千穂嶺は日向へ出るのに越えられた大きな峠である、とのぼくの考えがたしかめられると思ふのである。

（附記） 十余年前、佐賀の友人（副島羊吉郎氏）のところに滞在して、その附近を歩きまわつたときのこと、山間のある部落（三谷）で、一青年が紙を漉いているのを見かけた。立ち寄つて、材料は何か、とときくと、「カゴ」だという。カゴ？と問いかえすと、コウソ楮のことだ、と云つた。ぼくには思ひ当ることがあつた。ニニギノミコトの天降りるとき、供奉せるものについて、「故（が）ここに天忍日命、天津彥命、天の石鞆を取り負ひ、頭槌の大刀を取り佩き、天の波士弓を取り持ち、天の真鹿兎矢を手挟み、御前に立ちて仕へ奉りき」とある。通説が、波士弓を櫛弓だ、としながら、真鹿矢を鹿の兎を射る矢だ、とするのは、釣り合いが取れない。鹿兎は楮だとすれば、釣り合いが取れる。

二 「平家物語」における

寿永元年九月九日〔玉葉〕はその前年の義和元年六月とするが、いかがか。信濃国更科郡横田河原（千曲川の河原）に越後の城長茂の大軍を破った木曾冠者義仲は、北陸へ進出、越後の国府に馬を停めた。平家は、小松三位中将維盛、越前三位通盛を大手の大將軍として七万余騎が、加賀と越中の境なる砥浪山へ向かう。また薩摩守忠度、三河守知度を搦手の大將軍として三万余騎が、能登越中の境なる志保山へ向かう。これを聞き知った義仲が五万余騎で長駆、砥浪山に着いたのは寿永二年五月十一日であった。

彼は軍勢を七手に分け、自身は砥浪山の北のはずれ羽丹生（埴生）に陣取った。叔父の十郎藏人行家は一万余騎で志保山へ向かった。義仲は平家七万騎を砥浪山中で停滞させ、そこで夜をむかえさせる策戦であった。それは凶に当たった。あたりが暗くなつた頃を見計って、木曾勢は一斉に攻撃をかけた。相手は逃げ場を失って、我先にと俱利迦羅谷へ飛び込むほかはなかった。

馬には人、人には馬、落ち重なり、さばかり深き谷一つを、平家の勢七万余騎でぞ埋めたりける。

と云うありさまで、

平家の大将維盛、通盛、希有の命生きて加賀国へ引き退く。七万余騎が中より僅かに二十余騎ぞ遁れたりける。

とある。「遁れた者二十余騎」は、むしろ「平家」の誇張であるが、そう云ってもおかしくないほどの大損害であったことはまちがいない。「玉葉」には、

官軍敗績、過半死了云々

とも

四万余騎の勢、甲冑を帯するの武士僅かに四、五騎許り、其外、過半死傷、其残りは皆悉く物の具を棄て、山林に交はる。

ともある。

翌くる十二日に、奥州の藤原秀衝ひでひらから義仲に竜蹄りゆうてい(馬)二匹が届けられた。義仲はこれを神馬として白山社に寄進した。秀衝は奥州に居りながら、その目は戦局の動きを確実に追っていたのである。さて義仲は、志保山へ向かった叔父行家のことが気になった。えりぬぎの二万余でそこへ馳せつけた。途中氷見湊ひみのみなとにかかったが、折節、潮満ちて、その深淺が分からない。鞍置馬くらおきうま十四ばかりを追い入れたところ、相違なく向かいの岸に着いた。みんなそれに続いた。氷見湊とあるのは、上庄川の河口のことであろう。行家は案のごとく苦戦してい

た。義仲勢は平家三万余騎の中へ駆け入り、火の出る程に攻め立て、ついに攻め落した。三河守知度はここで討死した。義仲は志保山を越えて、能登の小田中、親王の塚の前に陣を取った。志保は地凶に、志雄町、志雄川とある、その志雄のことであろう。志保山は宝達丘陵の峠であると考えられる。この志保山へ行くのに、氷見を経由するのは迂回すぎて信じられぬ、とは吉田東伍の地名辞書の云うところであり、「平家」注釈家またそれに従っている。しかし、騎馬で行く道の難易を考慮すれば、急がば廻れ、ということもある。

生き残った平家勢は、加賀の篠原（天の橋立にほど近い）に拠った。しかしこども義仲に攻められて、京都へ逃げ帰るほかはなかった。白髪を黒く染めた斎藤別当実盛は篠原で戦死した。「平家」は平家方のこの敗戦の総決算を、

去んぬる四月十七日、十万余騎にて都を立ちし事柄ことがらは、何に面おもてを向ふべし（これに対抗できるものがあ）とも見えざりに、今五月下旬に帰り上るには、其勢僅かに二万余。

と記している。

義仲は相手の動きをよく知っていた。叔父行家を志保山へ向かわせたのも、その一つのあらわれである。彼はまだ信濃にありながら、越前に火打城を持っていた。それは敵に内応する者があって、陥落するのだが、林六郎、富樫入道等は落ちのびて加賀に引き退いた。平家は加賀に越えて、林・富樫の城郭二箇所を焼き払う、とあることから、義仲が俱利迦羅峠の

彼方にも手足・耳目を持つていたことがわかる。これと反対なのが平家で、峠のこちらまでは勝ち進んできたが、峠の彼方はまるで無案内で、そのことが彼等の前進の足をにぶらせた。そのため砥浪山中に封じ込められたのであった。かの富士川対陣もそうであった。平家を敗走させた水鳥の羽音は、前途無案内な平家将兵の胸の動悸の音でもある。

舞台はかわつて、寿永二年閏十月一日、木曾勢は平家に大敗する。——平家は讃岐八(尾)島にありながら、山陽道八箇国、南海道六箇国、都合十四箇国を討ち取る。木曾左馬頭(義仲は京に入って左馬頭に任ぜられた。)はこれを聞いて、「安からぬ事なり」とて、やがて矢田判官代義清(足利・仁木、細川の祖)を大将とする七千余騎の討つ手を差し遣わす。彼等は備中水島(今の玉島)に舟を浮かべて八島へ攻め寄せるつもりであった。そこへ平家方の小舟が牒(交戦状)を届けてきた。それで、

源氏の舟五百余艘、干しあげたるを、をめき叫んで下ろしけり。

ということになった。「干しあげたる」とは、海岸に引き上げてあった、ということだろう。平家の大将は新中納言知盛、搦手の大将は能登守教経。教経の指図で、

千余艘は鱸網・舳網を組み合はせ、中にもや、ひを入れ、歩みの板を引き渡しければ、船の上は平々たり。

とある。千余艘を組み合わせて一大巨船としたようであるが、それでは動きが取れまい。数艘ずつ組み合わせ、合計千余艘ということであろう。ところで、

木曾方の大將軍矢田判官代義清主従七人、小舟に乗ってまっさきに進んで戦ふ程に、如何いかしたりけん、船踏み沈んで皆死にぬ。

と云う。急いでかき集め、敵船が来るというので急いで海に下ろした次第で、慎重な点検はしなかつたせいであろうか。ともあれ木曾方の用意不足は疑がわれぬ。平家は船に鞍置馬を積んでいた。陸につくと、それに乗って逃げる木曾勢を追いかけた。平家のやり方は、船自体の行動は若干不自由になるが、船の上での行動は随分自由になり、鞍置馬が積める、という利点もある。「源平盛衰記」は、これとは反対に、源氏が船を組み合わせて陸と島とをつなぎ、平地をつくった、と云っている。そのほうが、馬には強いが船に弱い源氏のやりそうなことだ、との説があるが、同意しがたい。そんなことで敵の本拠地・屋島に攻め寄せることができるのか。

水島の敗戦のあと、義仲は備中の万寿の荘に勢ぞろえして、屋島に押し寄せようとした。しかし、京都の留守に置かれた樋口次郎兼光からの使者があつて、行家が義仲をじゃまにして、あれこれ画策しているから、すぐに帰京せられたい、ということ、彼は京都にとつてかえした。平家は、大將軍には新中納言知盛、本三位中将重衡しげひら、其勢二万余騎、千余艘の舟で

播磨の地へ押し渡り、室山（室津）に陣を取る。行家は義仲と顔を合わせるのはバツが悪く、京へ入る義仲とすれちがいに、京を出て播磨へ下った。そして義仲と和解するための手土産にと、五百余騎で室山を攻めた。彼は多勢に取りこめられ、結局僅かに三十騎ばかりに討ちなされ、高砂から船に乗り、和泉の吹飯の浦に着き、それより河内の長野城にこもった。行家また剛勇の士である。

木曾義仲の生涯をながめると、大穴牟遲（大國主命）のそれと、大体において重なり合う。——義仲の父義賢は甥の悪源太義平に殺された。義仲は僅かに二歳であった。あやうく殺されるるところを斎藤別当実盛に助けられて、信濃木曾に送られて、中原兼遠に養育せられた。木曾はいわば根の堅州国であり、兼遠は須佐之男命である。義仲は三十歳になった。いくつもの峠を越えて北陸道を西へ進み、砥浪山の前に立った。ここは彼にとって、最大の難関であった。いわば黄泉比良坂であったが、そこをのりこえて勝利を決定的なものにした。横田河原の勝利を合わせ考えれば、まさに、敵を、山の御尾に追い伏せ、また河の瀬に追ひ撥つたのであった。そして京に入ってそこを支配したのだが、間もなく後白河法皇の院宣を奉ずる義経のために、京都を逃れ出なければならなかった。国譲りを余儀なくされたと云える。大穴牟遲と義仲とで、ずれているのは、大穴牟遲にとって美保の岬による来る者は、まれび

とであり、彼の協力者であった。義仲にとっては、水島の岬、室山の岬にやって来た者は、彼の敵であった、ということである。もっとも彼もあとで、平家と和し、それと協力して東国勢に当ることを策したこともあった。

彼は腹背に敵を控え、さらに後白河法皇から見離された。彼の乳母子今井四郎兼平は、十善の帝王に向ひ参らせて、如何でか御合戦候べき

とて、義仲に「降人」を勧めるが彼は肯じない。結局彼は、栗津の松原で自害して果てた。その末期に当って今井四郎にもらしたことは、

日ごろは何とも覚えぬ鎧が今日は重う成つたるぞや。
それは倭建命の当芸野での、

吾が心、恒は虚より翔り行かむと念ひつ。然るに今吾が足、え歩まず

ということばとともに、あわれ深い英雄のことばである。それは「ニーベルンゲン」のジークフリートを、さらにはゲーテの「ゲッツ」を思わせる。——大穴牟遲の御子建御名方は、ひとり国譲りを肯せず抵抗をこころみだが力及ばず、科野（信濃）の州羽（諏訪）まで逃げた。義仲は故郷の信濃には帰れなかった。とにかく、木曾義仲は、大穴牟遲・健御名方の裔である。

ここまで書いてきて、巴ともえについて一言もしなかったのに気づいた。前に、中原兼遠を須佐之男命に比したが、「源平盛衰記」は、巴は兼遠の女むすめで、今井四郎、樋口次郎の妹だ、と云う。そうだとすると、巴は、ちょうど須勢理毘売に相当するわけで、符節がうまく合うのだが、「盛衰記」の云うことは信用できない。「平家」は、巴を、義仲の最後の近づいたときにはじめて持ち出す。

木曾殿は、信濃より巴・山吹とて二人の便女びんを具せられたり。

と云うのがそれである。巴は、

「色白く髪長く、容顔まことに勝すぐれ」

ていた。その上、「一人当千の兵つはもの」であった。彼女は、義仲と最後を共にする覚悟でいたが、おのれは、とうとう、女なれば何地いずちへも落ちゆけ。義仲は討死せんと思ふ也。若し人手に懸からば自害をせんずれば、木曾殿の最後の軍いくさに、女を具せられたりけりなど言はれん事も然るべからず。

と、きびしく云われて、止むなく、東国の方へ落ちて行ったのである。——倭建命の場合も、弟橘毘売命おとたちばなひめのみことは、走水はしりみずの海での遭難のときに、突如立ちあらわれる。その辞世の歌に

さねさし 模武さかむの小野に 燃ゆる火の 火中はに立ちて 問ひし君はも

とあって、それ以前から命みこととともにあったとわかるのである。弟橘毘売は、

妾、御子に易りて海の中に入らむ

と云って、波の上に下りる。倭建命が足柄の坂の上に立って「吾妻はや」と嘆いたことは前記した。英雄にとって彼の愛憐のころは訣別によってのみ示されねばならぬのか。

ぼくは義仲に心ひかれるまま、三度木曾路をたずねている。鳥居峠の、草に蔽われた旧道を歩いたこともある。昭和三十四年の夏、王滝（御獄山登山口）の雨の朝、重そうな荷を背負った、モンペ姿の美しいひとを見た。ぼくは同行の若い諸君をかえりみて、「まさに巴御前だね」と云った。彼等は返事もなく、立ちすくんでいた。

三 「太平記」における

「太平記」には「平家物語」以上に、山坂の露に濡れ、岬の浪を浴びたものが多い。その中で名和長年を扱ふのは、大穴牟遲おほなむぢ（大國主命）との似通いを思ったからである。

鮫うなぎを欺いて隠岐島から稲羽いなぼ（因幡）の氣多の岬へ渡ったところ、欺かれたと知った鮫のために赤裸にされた上、八十神やそに欺かれて、痛み苦しんで泣き伏している兎うさぎを、大穴牟遲がいたわる、

という説話と、隠岐を脱出して来られた後醍醐天皇を名和長年がお迎え申しあげたことは、かなり重なり合うところがある。

元弘三年三月二十三日の夜の宵の紛まぎれに、主上は、六条少将ちのぶりのみなど（千種）忠顯ひとりを召し具して、ひそかに隠岐の御所を出られた。千波湊ちのなみへと、ころざすが、皆目道がわからない。とある人家に立ち寄ってきくと、その家のあやしげな男が、主上を背負って千波湊まで案内した。その男は湊中を走りまわって、伯耆へ漕ぎもどる商人船を見つけ出して、それに主上を託した。建武一統の日に、その男を国中尋ねたが、名のり出るものはないなかつた。

さて、御船のあとを隠岐判官清高の船が追いかけてきた。船頭は主上と忠顕を船底に隠して危難をまぬかれた。御船は伯耆の名和湊に着いた。「此辺には名和又太郎長年と申す者こそ、其身さして名有る武士にては候はねども、家富み、一族広うして、心がさ有る者にて候へ」と、道行く人に教えられて、忠顕は、「御憑たみあるべき由」を長年に申し入れた。長年は折節一族を集めて酒を飲んでいた。この申し入れに案じ煩わづらう気色けしきで、何とも返答ができない。舎弟小太郎長重の、利よりも名を重んずべきだ、との進言で、長年はじめ一族みな主上を迎えることに同意した。そして主上を奉じて船上山に拠った。

「増鏡」には、御船の着いたところは、「伯耆国稻津浦」とあり、長年については、この国に名和又太郎といひて、あやしき民なれど、いと猛に富めるが、類ひろく、心もさかさかしく、むねむねしき者あり。かれがもとへ宣旨を遣したるに、いとかたじけなしと思ひて、とりあへず五百余騎の勢にて御迎へにまゐれり。

と云っている。「太平記」は、増鏡を取り入れながら、それに多少の小説的フィクションを加えているかと思われる。長年のことを「太平記」は「さして名有る武士にては候はねども」と云い、「増鏡」は、「あやしき民なれど」と云っている。ここが大事のところだとぼくは思っている。主上に忠勤をはげんでかわることなかつたものは、長年と似たりよつたりの階層であつたのである。

北畠親房は「神皇正統記」に、

次の年癸酉の春（元弘三年閏二月）、忍びて御船に奉りて（御船に召されて）隠岐を出で伯耆につかせ給ふ。その国に源長年と云ふ者あり。御方に参りて、船上と云ふ山寺に飯の宮をたててぞ住ませ奉りける。

と云っている。「源長年と云ふ者あり。」と云うのは、生死を共にする同志に対して、客観的な記述というよりも、何か冷やかなひびきを感じられる。親房は正成についても、

河内国に、楠正成と云ふ者ありき。

と、よそよそしい云い方をしているのである。自分の子のことを、「顕家卿」などと云っている彼の目からは、正成・長年などは、「増鏡」の云うように「あやしき民」であったのである。また「太平記」の記事にもとる。

長年は近郷近在から、兵糧米を買い集めた。それは五千余石に上った。そのあと家中の財宝悉く人民百姓にわけ与えて、おのれの館に火をかけ、百五十騎にて船上山の皇居を警固した。一步もあとへは引かぬ決意である。一族の名和七郎と云う者、白布五百反で旗をこしらえ、松葉を焼いてふすべて、それで近国の家々の紋を書き、この木、かしこの峯に立てた。その旗どもが峯の嵐にひるがえって、山中に大勢が充満しているように見え

た。——同じき二十九日、隠岐判官、佐々木弾正左衛門尉、其勢三千余騎で、南北より押

し寄せた。佐渡前司は八百余騎にて搦手からめてへ向かった。攻防をくりかえしているうちに、日はすでに暮れなんとした。その時しも俄かに天かき曇り、風雨烈しく、雷鳴は山を崩すが如くであった。そのためにひるむところを攻めたてられて、大手の寄手よせて千余騎は谷底へまくり落とされた。主上、船上に御座有り、と伝えきいて、国々の兵つわものどもの馳せ参ずること引きも切らず、四国九州の兵まで聞き伝えて馳せ参じた。

その時分、播磨の赤松入道ととしん円心（則村）は京都六波羅を攻めていた。それは楠正成が百萬騎の北条勢を千早城下に引きつけているからには京都は手うすにちがいないと見て、功を急いでのことである。ところが数箇度の合戦に敗れて、退いて八幡山崎に陣を取った。船上山では赤松に加勢するために、六条少将忠顕を頭の中將に成し、かれを大將軍とする軍勢を京都に差し向けることにした。伯耆を發した時分は僅か千余騎であったのが、北陸の勢馳せ加わって、程なく二十万七千余騎にふくれあがった。また主上第六の若宮（実は第四の聖護院の宮）が元弘の乱のはじめ、武家に囚らわれて但馬国に流されていたのを、其国の守護太田三郎左衛門尉が奉じて、近国の勢を催し、丹波の篠原に参会した。忠顕はひどく喜んで、錦の御旗を立て、この宮を上將軍と仰いだ。四月二日にそこを發つて、京都西山の峯堂みねのどうを御陣とした。――

合戦の様子はここでは述べない。ただ名和小次郎長生（長年弟）と児島備後三郎高德の奮闘の

あったことだけを云っておく。結局、忠顕は峯堂を捨てて、宮を御馬に乗せ、八幡へと落ちて行った。

鎌倉幕府はついに滅亡した。主上は船上山を御立ち有って、山陰を東へと御輿こしを向けられた。金持大和守、錦の御旗を捧持して左に候し、又太郎長年、帯剣の役にて右に副った。長年にとって、生涯の栄光の日であった。

ところが天下一統成った建武の日に、勅を承って兵部卿護良親王を中殿（清涼殿）鈴の間の辺に待ち受けて捕えたのは、伯耆守長年と結城判官親光である。このつらい役を仰せつかった彼等は、檢非違使でもあったのか。西園寺太政大臣公宗に、鎌倉幕府再興の陰謀の企て有りとして、これが逮捕に向かった中院中将定平に附き添ったのも、長年と親光であった（公宗は承久の日に鎌倉幕府に内応した公経のあとである）。

北条の余類を討ったあと鎌倉に在った高氏は、マクベスの本性をあらわして、京都に叛いた。それは建武二年のくれである。新田義貞とその弟脇屋義助を大将とする討つ手は箱根路の合戦に敗れて、足利勢に峠を越されてしまった。そのあとは、押されて後退するばかりであった。結局、勢多・宇治・大渡（山時と八幡との間）の線せんで、八十万騎の東国勢をむかえうつ

ことになった。勢多は名和長年、宇治は楠正成、山崎は脇屋義助、そして大渡は総大将の新田義貞がそれぞれ守備に当った。東国勢の主力にぶつかつた大渡まず破れ、ついで山崎が破られた。勢多を固めていた長年は、山崎の陣破れ、主上、はや東坂本へ落ちさせ給う、と書いて、すぐにも坂本へ参ろうと思つたが、いや、そうではない、今一度内裏へ参つて様子を確かめた上で、と思ひ直して、三百余騎で正月十日（建武四年・延元元年）の日暮れほどに京へもどつた。今日は悪日だ、ということ、高氏はまだ都へ入らなかつたが、四国西国の兵ども数万騎が京白河に充満してゐた。彼等は、名和の帆掛船の笠符かさじるし（これは「伯耆巻」によると、主上から賜つた紋所である）を見て襲いかかつた。長年の勢は、次第々々に討たれて百騎ばかりになつたが、彼は遂に討たれなかつた。内裏へ参つて馬より下り、胄かぶとを脱ぎ、南庭みなまつに跪く。彼の日に映じたものは、乱暴浪藉の跡であつた。

「長年つくづく是を見て、さしも勇める夷心あまにも、哀れの色や増さりけん、泪なみだを両眼あまに余して、鎧よろいの袖をぞぬらしける。」

それから彼は、東坂本へと参つたのであつた。——結城判官親光は高氏をねらわんものと、都に止まつた。ある禅僧をたのんで、「降参仕るべき由」を申し入れたが、思う通りにならず、高氏の差し向けたものどもと戦つて討死した。

北畠顯家ひきいる奥州勢の参加に力を得た官軍は、高氏を一旦京都から追い落とすことに

成功した。しかし彼は九州で勢力をもりかえして西上した。その兵船は摂津和田岬へ押し寄せた。そして、星は落つ、悲風湊河。主上は再び山門に臨幸。高氏は京へ入って東寺に駐屯した。延元元年七月十三日、新田左中將義貞は討ち残された一族四十三人を引き具して皇居に参る。

今日の軍に於ては、尊氏がこもつて候東寺の中へ箭一つ射入れ候はでは罷り帰るまじきにて候

と申して御前を退出した。義貞一行のあとに長年が従っていた。それを見ていた女童部は、このごろ天下に結城・伯耆・楠・千種頭中將、三木一草と云はれて、飽くまで朝恩に誇つたる人々なりしが、三人は討死して、伯耆守一人残つたることよとささやいた。これを耳にした長年は、

さては長年が今まで討死せぬことを、人皆云ふ甲斐なしと云ふ沙汰すればこそ、女童部までかやうに云ふらめ。今日の合戦に御方、もし打ち負けば、一人なりとも引き留まつて討死せんものを。

と独り言した。案の定、彼はその日の合戦に討ち死にした。

長年は二百余騎にて、大宮（二条大宮）にて返へし合はせ、我とうしろの関をとぎして、一人も残らず死してけり。

とある。自ら死をえらんだのである。それは正成の最後を思わせる。

「其勢次第に滅びて、あとは僅かに七十三騎にぞ成りにける。此勢にても打ち破って落ち、は、落つべかりけるを、楠、京を出でしより、世の中のこと、今は是迄こゝまでと思ふ所存ありければ」とて、正成はじめ一族自決して果てたのであった。

「世の中のこと、今は是迄」とは、いわゆる絶望の言ではない。絶望というならば、「世の中のこと」への絶望であった。その死は、「世の中のこと」以上のもの實在することの証明であった。長年の耳に入った女、童部のささやきは、実は彼の内心のささやきであったであらう。——義貞は逃れて越前へ走った。

ぼくの感銘に堪えないのは、新田・名和の一族が肥後の菊池のところに集結していることである。正平十三年七月、大將軍筑後守頼尚・子息筑後新小貳忠資の従える六万余騎、杜渡つづりのわた

(筑後河の渡り)を前に当て、味坂あぢさかのしやう庄に陣を取る。これに対して菊池勢六千余騎は、高良山・柳坂・水繩山みななはに陣を取る。大將軍は先帝第六(実は第十六)の皇子征西將軍の宮(懷良親王)、これに従うは、洞院大納言、竹林院三位中将等々の月卿雲客、新田一族には、岩松相模守、世良田大膳大夫、田中彈正大弼ひつ、桃井左京亮等々。侍大將は、菊池肥後守武光、子息肥後次郎等々とある。その侍大將の中に、故伯耆守長年の次男名和伯耆權守長秋、三男修理亮の名が見出されるのである。その書きぶりで見ると、新田一族は客分のようにであり、名和は侍大將

として菊池の組織の中にあつたと思われる。この合戦で、大将宮は三所まで深手を負われ、それを庇かばおうとして、月卿雲客のほとんどが討たれた、とある。(その討たれた公卿の中に、北畠源中納言、春日大納言がある。親房の三男顕能と、二男顕信のこととしか思われぬ。しかし彼等は、「太平記」そのものに於いても、このあとに顔を出しているのだから、これは「太平記」のあやまりであろう。) 頼山陽の「筑後河を下る」の詩はこの合戦を詠みこんでいる。ところで新田一族の中に、義貞の子息等の名は見えない。彼等は、父義貞が越前藤島に屍を晒さらしたあとも、東国に在ってたえず画策していたのである。例えば——義貞の三男武蔵守義宗は、正平七年閏二月二十五日、先朝第二の宮上野親王(宗良親王、信濃の宮とも云われる)を大将として碓氷(笛吹の字が宛てられている)峠に拠つて、高氏の軍勢と相對した。高氏は峯にひるがえる錦の御旗を見たのであつた。激戦の日も夜になつて、兩陣それぞれ引き退いた。ところが

陣々に篝かがりを焼きたるに、將軍(高氏)の御陣を見渡せば、四方五、六里に及んで、銀漢(天の川)高くすめる夜に、星を列つらぬるが如くなり。笛吹峠を願れば、月に消え行く螢火ほたるびの山陰に残るに異らず

というありさまであつた。義宗はその暁、越後へ落ちて行つた。將軍宮は、信濃へ退去されたと思われる。また、義貞の次男左兵衛佐義興が武蔵国矢口の渡りで、畠山入道道誓の手の者のだまし討ちにあつたのは、今、記した菊池、小貳合戦のあつた年の十月十日のことであ

る。

新田を主力とする東国の宮方の中心は、宗良親王であり、菊池を主力とする西国の中心は、懐良親王であった。楠と北畠とは、それぞれ、その本拠地の河内(東条)と伊勢(多気)とを固守して東西から吉野を防護していた。倭建命は、西の方、熊曾建を伐ち、その帰るさ、出雲建を討って、大和に帰還した栄光の日のあと、東方の平定に出向き、そこで受難と没落の生を描いた。西の懐良親王と東の宗良親王は、まさに倭建命の分身である。

さて中央と東・西の三つの中心は、幾山河、幾潮路を隔てながら、音信があつた。宗良親王の「李花集」に、

建徳二年九月二十日、鎮西より便宜に、中務卿(懐良親王)とことわりのある歌があり、

同年十二月到来して後に便宜に、かくぞ申しつかはし侍りし

という宗良親王の返歌があることで、そのことの一端に触れることができる。「便宜に」と、あつさり云つてあるが、それは、隠岐から伯耆まで、主上を乗せてはしつた、かの商人船の類であろうか。八幡船の来寇になやまされた明が、懐良親王にその制止を泣訴したのは、この建徳二年の前々年、正平二十四年のことである。

(昭和四十五年四月九日稿)

附 編

ここに附録する二篇はちょうど三十年前の執筆にかかる。当時内閣情報部で机を並べていた成瀬正勝（筆名・雅川滉）氏（戦後、東大教授）の幹旋で、雑誌「新潮」に寄せたものである。記憶の底に沈んでいたものを、磯貝保博君が、国会図書館で探索し写し取ってくれた。いま読みかえしてみても不快の感はない。（昭和四十五年七月九日記）

附編一 民族生活の体験と内心の表現

——近古に於ける国民文学に關聯せしめて——

一

「年にそへ日にそへては、物の道理をのみ思いつづけて、老のねざめをもなぐさめつつ、いとど年もかたぶきまかるままには、世の中も久しくみて侍れば、昔よりうつりまかる道理もあはれにおぼえて」

と「愚管抄」の作者、慈円（一一五五—一二三五）は、本書執筆のやみがたき動機を告白しておる。池面のさざなみのごとき生活は、時代の推移とともにながれくだる激流となり、やがて大の波瀾となつたのである。個人の生は、この大きな時代の動揺に浮きただよわされて、その心をとどむべきすべを失い、末法濁世まつほうじよくせのなげきは、ようやくにして實際の生活感情となつたのである。

人生は、個人生活の片々たる交渉と集合とではなくして、それをこえ、それを押しながすところのものとして直感せられ、「世の中」というもののうちにある自己を見出さざるをえ

ないのである。この自己を超ゆるところの世の中のごきうつりゆくさまを、自己の内心によつて把握しえないとき、そこに味わるる、自己分裂の感情は、この世を末法の世として、自己と世との不調和感をいいあらわすのである。しかしながら、一旦調和の失われたる世の中のありさまを目に見、心にあじわい、それにたえて、このおしうつり動揺する人生をそのままにうけとつて、しかも、そのうちに会得せられる道理を、人生の道理として、みだれる世を統ぶべき原理をそのうちに求めようとしたのが、「愚管抄」の作者、慈円であった。この作者は、王朝末期から鎌倉にかけての民族生活をつぶさにあじわい、その自己の実際の体験をもとにして、この民族生活を全体として描こうとして筆をとつたのである。

王朝末期から鎌倉・室町の時代、およそ十二世紀末葉から十六世紀中葉までの約四百年間は、過去の要素を総合しつつ、そこに新しい要素を加えて新文化創造の民族的苦悶をあじわつたのである。百鍊抄承暦二年（一〇七七）五月二五日の条に

諸卿定申大宋国貢物事、錦唐黄等也。此事已為_レ朝家之大事、唐朝与_レ日本、和親久絶、不_レ貢_二朝物_一、近日頻有_二此事_一、人以成_二狐疑_一

とあつて、長い間閉鎖せられた生活のうちにねむれるもののおどろきと、やがてひらかれる国際関係の波瀾に接しようとする徴候とを示しておる。これより約一世紀余ののち、内に、そしてやがては外に、民族の生は急迫の勢を加えきつた事実については、ここにのべ

るまでもない。そして遙かにとんで天文十二年（一五四三）に、ポルトガル商船の鉄砲を伝えたるころから、ここに全く新しい文化に接したのであるけれど、これはあまり長い間のことではなかった。そして再びわが民族は、とざされた世界にとじこめられ、沈滞と頹廢の生におちいらねばならなかったのである。

鎌倉から室町に及ぶ時代は、ルネサンスの時代である。復古の時代であると同時に前進の時代である。プログレシヴの方向とともに、レグレッシヴの方向をとったのであった。文化は交通によって、生のはげしき交流とたたかいたことによって成長進展する。この縦横の生の連絡、それは、それを一つの精神に統べおさめるところの、生の拠点あつてはじめて可能である。この縦横に脈絡し、不断に進展すべき民族の生が、その拠点を求めようとしたのが王政復古の運動であり、それは、建武中興としてひとたびはあらわれたが、それがやがて表面から消え失せたとともに、民族の精神はその不動の拠点をかためることができなくて、そのために、遂にかぎられた世界の構築にふけて、自己の安心をその上に維持しようとしたのである。

この時代の、かかる民族生活の波瀾起伏を記録した文献はおびただしく、それはそれらを内心にすべおさめるところの、大きな精神によって表現せられるならば、そこに真実の国民文学は描かれるであろう。国民文学の素材、エレメントはみちみちておる。しかしながら、いまわれわれがただちにこの時代の民族生活の体験を直接にあじわうがためには、そこに明滅起伏したもろもろの事件の外的記録に満足することはできない。そして、その民族の生を内面的に、すなわち、自己の内心の体験として表現したものによらねばならない。この生の告白は、必然的に自らのことばによって、即ち国語によって表現せられることを要求する。「愚管抄」の作者が、本書を仮名文によってしたためることについて

偏ひとえに仮名にて書きつくるとは是も道理を思ひて書ける也。先是をかくかかんと思ひ寄ることとは物知れる事なき人の科とがなり

と、「先是をかくかかんと思ひよる事」をしりぞけたのは、真にあふるる生の体験を告白するには、外的技巧にたよっては出来ない、ただちに、直接に、自分のことばによっていいあらわさずにはおれないからである。また、道元が

近代の禪僧、頌を作り、法語を書かんがために文筆をこのむ、是れ便すなわち非なり。頌につく

らずとも心に思はんことを書出し、文筆ととのはずとも法門をかくべきなり（懷瑛「隨聞記」）

と内心の直接の表現をすすめているのは緊張せる、彼の生の必然の要求であつた。

われわれは、かかる自己の生の直接の表現によつて、民族の生の内面にふれなければならぬ。それにはいわゆる国文学の埒内をこえるので、「平家物語」とか、「方丈記」とか、「徒然草」とかにのみかかわつておるべきではない。そしてわれわれは、今日に生きてわれらの生を統ぶべき力あることばを求めるときに、親鸞や道元の著作にゆかねばならないのである。彼等のことばは当時の人々の心に、直接訴えたことばであり、彼等の心を指導し、そこに光明を投じたことばであつた。親鸞は人に知られざる九十年の生涯を、名もなき人々と共におくつた。彼は「唯信抄文意」のあとがきに、

ゐなかのひとびとの、文字のころもしらぬあさましき愚痴きはまりなきゆへに、やすくころへさせんとて、おなじことをたびたびとりかへしとりかへしかきつたり。ころあらんひとは、おかしくおもふべし。あざけりをなすべし。しかれどもおほかたのそしりをかへりみず、ひとすぢにおろかなるものをころえさせんとてしるせるなり。

と云つておる。これは、彼八十五歳のときのものである。彼は「南都北嶺の由々しき学匠」のごとく、人生を概念的に思議せんとしたのではなくして、一個の生ける人間として、人生

そのものうちにあるところの自己を、自己をそのうちに撰取しておるところの全人生を味ったのである。そしてそのところは自分と同じき他の民衆との、同信同朋の生活をおくらしめたのであって、彼のかきのこしたものは、民族精神のめざめの一つのいちじるしき徴証である。

親鸞とともに、民族精神の内的沈潜を示すものに、道元の「正法眼藏」がある。それは、微妙の国語の表現力を駆使せしめて、人生の固定概念化をやぶり、生の機微を端的にとらえしむるところのものである。そしてこの兩人のいとなみは、民族生活の底にかくれているものであった、そこに永久の価値をとどめておるけれども。いま、われわれがこれをよみあじわうときには、彼等のしりぞけたところの人生の局分化、概念化の人為のさかしたくらみをしりぞけて、わが民族生活そのものの全体的な真実の開展のために、表面に立つか、底にひそむか、そんなことを問うのいとまもなく、わが身をなげ出してたたかうべきである。これらの生活の外的模倣に墮すべきではない。これが、今日のわが民族生活の要求である。しかし、こう簡単にいってしまつては、何のことかわからぬかもしれぬ。

三

われわれが国民文学の真実の伝統を求め、当時の民族生活の内心の直接的表現にふれるた

めには、更にすすんで和歌をよむのほかはない。それは、後鳥羽院を中心とする倒幕運動にはじまり、建武中興をクライマックスとして後につづくところの、かなしく、雄々しきますらおのころざしをこめた和歌である。後鳥羽院をはじめたてまつり、後鳥羽院に忠誠の志をささげた源実朝の歌や、「吉野朝の悲歌」に、そのかなしく雄々しき大和民族の三世をつらぬく志は、あますことなく歌いこめられておる。そしてこれらの御製や歌は、当時やかましく、かつ今日国文学者によって丹念に研究せられている和歌の流派などをこえて、永久の生命を今日につたえているものである。歌は、人生を痛感した者がこころざしを述べるものであって、専門歌人の技巧からは、歌の生命は出て来ない、という性質をもつ。「吉野朝の悲歌」が、川田順氏によってくわしくしらべられ、その文学的価値が世に知られるに至ったことは、自分にとってかぎりなきよろこびであって、同氏の幕末志士の歌の研究とともに、不朽の功績と思う。これら勤王の士のうたは、それが専門歌人のものにあらざるの故をもつて、従来文学史家のかえりみぬところであった。そして彼等は、歌をその流派に分類して瑣末の技巧の分析にのみつとめていたのであった。しかしそこには真実の歌はなかつた。整理分類に堪えぬのが人生であり、生命である。それをこえて悲痛の生はあらわれるのである。西行法師は、国民詩人としてあまりに有名である。しかしながら実朝の歌をよめば、西行のは、うわついておって、少しも心にふれぬのである。吉野朝の悲歌の、素朴にして真実こも

れる歌をよめば、当時何流の有名大家のものは、ただ一箇の文字のもてあそびだ。これら真実の歌と、その歌人の生活と、それをとりまく社会の情態とがもつとくわしく研究され、生き生きと一般の心によみがえる必要がある。国民文学の代表のごとき「太平記」なども頗る退屈のもので、僕は以前からの癖で、正成湊川戦死のあとは、何か興味索然としてよむ気がしない。こんな子供っぽいことでは学者にはなれないが、事実である。しかしながら、そこにところどころ、全体の冗漫をやぶって、生きた直接的なことばがある。その部分がひろく愛誦せられて、後世の国民精神をよびおこしたのである。紙幅つき、まとまらぬままにて。

(雑誌「新潮」昭和十五年十一月号)

附編 二 回帰と前進と

一

去年の秋、我々は紀元二千六百年を奉祝したのであるが、あの当時、東京市内に立看板が
到るところに立てられて、数日間だけ、特に奉祝の気分を差許されたかの感を抱かせられ
た。「歴史の巨大な一瞬だ！」とかいう文句がそこには書かれてあったが、生硬で威圧的な
印象を与えて、我々の心持をこわばらせたものであった。

街々にはみこしがかつき出され、地上をよろめき歩いておったが、目のさめるような活気
はなかった。奉祝提灯のやわらかい光のみがなつかしいおちついた気分を我々に与えてくれ
るばかり。宮城前の祭場附近には、無数の青人草が風になびくように群れておった。散乱し
ておったものが、よるべをもとめて吸いよせられるかの如くで、僕は民族のところにふれて
あついものを感じたのである。戦争中、というのでお祭気分は遠慮せられた。それは、酒
の分量が少いとか、みこしのかけごえがおとなしいとかいうだけの、おもてに現われたこと
ばかりでなくして、精神的にも形ばかりの、というように思われた。奉祝前後の立看板が

区画したものが心のうちにも出来ておったのである。僕は之がたまらなくなさげなく思われ
た。

戦争中だから云々というのではなくて、戦争と奉祝とが何故一つとなつてわきあがらない
のであろうか、わきあがらせないのであろうか。これはいわゆるおまつり気分を十分に發揮
せしめよ、と云おうというのではない。戦時中というので昔どおりのみこしのかげごえが、
みすぼらしく街々にきこえ、つつましく、というよりも、何かひっそりとお祝っているよ
うでいけないと思つた。何故たたかいとまつりが一つにとけた、新しい祭典の形式が生れな
かつたのであろうか。その間の数日間、白昼公然と飲酒が許されたとかいい、而かもそれ
にもかかわらず、ヨッパライが目立たなかつたといつてよろこぶような記事がのつておつ
た。そんなことを嬉しがるよりも、あの時、民族の一大陶醉と歓喜とが地上にみなぎりあふ
れなかつたか。神に供えまつるトヨミキとノリトといくさうたどが、二十世紀の今日に神代
の昔さながらの総合劇として新しく醸造され、演出されなかつたか。

歴史への回帰と今日の前進と、それが一つにむすびつく、というよりも、歴史がくまなく
今日に復活して前進しなければならぬ。

すべてわかたれてあるもの、それをいま、一つにせねばならない。歴史と現実と、神話と科学と、個人と国家と、民族と世界と、物質と精神と、戦争と平和と、それらはすべて根元において一つとならねばならない。表面の概念の差別に執して真実の生を忘却してはならない。わかたれてあるもの一つをひろって生を局分し、自己の安心をそこに託するとき安易をすてよ。わかたれてあるものすべてを言向け和し、一つならしむる悲痛に生きねばならない。「われを死ねとやおもほすらむ」となげかせられたヤマトタケルノミコトのかなしみよ、いまの世によみがえれ！

ドイツ民族の今日の精神をインスパイヤしておるものは、古代ゲルマン神話である。そこには神族も、魔族も、共に相うって滅尽するの悲劇がある。一切の差別、あらゆる対立はそこに消え失せて、あとにのこるのは形なき生命である。無である。無とは生命である。之のみが北欧のあらし自然の暴威、周囲民族の脅迫から自己の運命をきりひらかしめた彼等のものであった。生は、精神は、苦痛から生まれ、苦痛によってのみ育つのである。大和民族の生の歴史の、その環境のおだやかさをいう必要はない。それは、今日のわが民族のくるしみをあじわい知らぬもの^{ごと}のしれ言に外ならない。世界の動乱、人類の悲哀、そのあらゆるゆ

らぎ、些少のうごきも、あますところなくすべてわれわれにむかつてながれあつまつておる。この生のあらしのなかにたつてたたかつておるのである、いまの日本は。これがわが民族の、同時に歴史でもあつた。太平のねむりにふけておつたときもないではない。しかしながら、それは世界のたたかいたたかわずしてやぶれておつた、という事實にすぎない。われわれは、一切をなげすめて、ただ生命のみをひっさげて新しく出發せねばならない。出征しなければならぬ。そこばくの歴史の遺産にたよることも、それをおそれることも無用である。これのみが、わが栄光ある歴史をうけつぎ、くりひろげる根元の力である。歴史にかえれ、ということは何かあるものをつかまえ、それにたよることでは断じてあつてはならない。むしろ現実の物質的条件のすべてをふりすて、捨身することではなくてはならない。生きんがために死するのである。われわれは歴史をおもうとき、つねに死を思うのである。

それなのに、ドイツ民族の勝利は高度国防国家のそれであり、それをつくるのが、今日の世界の大勢であるかという。何というなさけないことであらうか。そしてなけなしの金を、少しでも多くとりたいたか、やりたくないとかいってさわいでおるありさまは！ 執着のものがあつて、捨身がまるでない。この卑小の精神であつた、二千六百年の奉祝を卑小のものにしたのは。高度というなら、なんじの精神を、この上なく高度ならしめよ。わが民族は、すでにとおい過去において、八紘こくを掩おほいて宇いよとせむ、との高き精神のステイトメントをもつて

おる。これは、永遠の平和をおもうものの、永久のたたかいの布告であつた。この宣言の、今日民族のむねによみがえり來つたのは、神意の啓示である。それが人間の口にうつされて物質のはかなきかきあつめの上に散発せられるであらうならば、それは神意をおそれぬものといわねばならない。いま、何が生み出だされつつあるか、何が死によつて生かされつつあるか。死のかげに生の儉安がむさぼられてはならない。一切が死に、そして一切が生きねばならない。それが今日あるであらうか、このことが、どうしてもわがむねに思いあたらないのである。いまは、何かを物質の上にあたらしくつくるべきときではない。あらゆる物質を燃えつくすほのおとなつて地上に光あらしむることだ。その光は、いまだちに八紘のすみずみにまであまねく射透るであらう。

三

眞実の生命はその始源を希求す、とはダンテのいったことかと思う。外から附加されたものは、わが生をゆたかにすることなくして、むやみに分裂せしめるのである。外から附加されたもの、それらが歴史の遺産となつて今日のわが生を阻害するとき、それらをふりすて、本来の生にかえろうとするのである。本居宣長の事業がその一つであつた。そこに生命は恢復せられてとどこおりなき前進の行程をとるのである。与えられたものの若干に満足す

ることなくしてながきくらしみ、本来の生にかえろうとするのは、つよい精神である。死のくるしみを負うて、たたかいすまれたヤマトタケルノミコトのたましいは、白鳥となって天上を飛翔し、生のふるさとをしたわれたのである。地上にはらばって現実の満足をあさるものには、死の苦痛もなし、生への希求もない。

近くは明治維新以来、わが民族は死の脅威とたたかかってそこに自らの生をひらいてきた。しかしながら、そこにえられた成果の上によくやく安心してそれを維持しようとするに到って、そこに見えざる死が、その内部にひそんできたのである。外面の満足は、生の敵である。これとたたかつたのが、早くは北村透谷であった。多少の外からもたらされた物質にすでに安んじようとする時代の精神に対して、「空の空なるものとのたたかい」をたたかつた。それは永久に停止することなきたたかいである。そのはげしさのために、彼は若くして自らの生を断つに到つたのである。そして外からの力に対して歴史の「内からの声」に耳をかたむけ、それにことばを与えたのは、岡倉天心であった。民族をあげてのたたかいはげしくたたかわれたのである。しかるに歴史はようやく失われ、現実にはえられた条件の上にねむらんことを欲した。そこに冷やかな概念が支配して、生は背後におしやられ、歴史は現実と訣別し、神話は科学によって軽蔑され、国家は個人に分解し、民族は「世界」のうちで解消し、本来一つなるべき生命は若干の概念に分散して、その抜目なき按配が知性とかいうもの

の役目となった。かくして内部からの崩壊が急速にすすんで行った。之に堪えられず、之に反撥して出て来たのが、今日に及ぶ民族の行動である。しかしながら、この行動を内に統^すぶるところの生の凝集が熟しておらない。そのために、多少のいきぎれが感じられて遺憾である。二千六百年を奉祝する国民の心と戦争を遂行しつつあるそれが、真に一つとならなかったのは、それがためである。国民は光をのぞみ、心をあたためるとき気持をもって、奉祝前後、宮城前につどい来たつたのである。本当のよるべがそこにあると信じておるからである。之は一般国民を外にみてこう観察するといふのではなくして、あの時の自分の心持ちからしていふのである。この精神の中心が現実のあらゆるところに行きとどき、はりつめていたならば、戦時にふさわしいお祭、とかいって、国民の奉祝のところに特にワクをつくつてととのえようとする必要はなかつたのではないかと思う。歴史と現実とが相合して、そこに民族の未曾有の感情の爆発と、その爆発力に廻転せられる疾風のごとき前進とがあつたのではないか。このことを此の上なき痛恨事と思ひ今日まだ何ら本当のもの——それは自分にさえはつきりわからないが——が、まだあらわれておらぬことを思つて、われいかにすべきか、と心燃ゆるのである、歴史と現実とのいみじき再会のために。

(雑誌「新潮」昭和十六年四月号)

(寄稿)

わが生涯のともしび (黒上正一郎先生の思い出)

佐賀大学教授 副島羊吉郎

ま え が き

副島さんに、黒上正一郎先生の思い出の記を寄せていただいた理由は、「はしがき」にも一言しておいた。ぼく自身は先生を直接には知らない。ぼくが一高に入った昭和五年の春には、先生は徳島に帰臥して病を養っておられた。その年の九月廿二、三日ごろの小雨そぼふる日に、たしか高木尚一兄(ぼくの一年上)であったと思うが、先生御逝去のことを記した水色の紙を、寮の事務所の壁に貼っているところを見かけたおぼえがある。ところで、ぼくの身近かな方で、高木兄以上に黒上先生を知っているのは、副島さんただ一人である。副島さんは昭和五年春に東京高師(数学専攻)を出て、すぐに福島県郡山の安積^{あさか}中学に赴任した。副島さんの歌集「うめもどき抄」(桑原編)は、徳島眉山の麓に病み臥し給う師のことを気かけながら、みちのくへ下っていくときの歌ではじまっている。先生を中心に高師信和会をつくった副島さんのことは、先輩の田所広泰兄(副島さんの文章の中にも出てくる)からきかされていたが、じかにお逢いしたのはかなりおくれて、昭和八年の夏であった。一高昭信会の合宿を猪苗代湖畔のあるお寺でしたときに、副島さんは自分の下宿での読書会に集まる十数名の生徒を引きつれて来り会し、いっしょに磐梯山に登った。副島さんが昭和九年の春に安積中学を辞して東京文理科大学(心理学専攻)に進んだこと、また昭和十二年の秋に神戸の女学校から東京府立第七高女に転ぜられたこと

は、副島さんとぼくとの間の往来を頻繁にした。交友ここに三十有余年、ぼくは副島さんの恩顧を蒙るのみであった。ぼくの書くどんなものにも、副島さんはたゞちに反応を示された。それには、「感銘した」とか「感激した」とかいうことばがつきものであった。ぼくは副島さんの温い、しかし身に泌みる激励を感じた。それが、ぼくのいふにふい筆を駆り立てるのであった。副島さんの熱烈な求道精進の生——それが黒上先生との出会いをも可能にした——は、ぼくの軽薄卑俗な雑文にも、何らかの取柄をみつけて、撰取して捨てないのであろう。おおけなけれど、ぼくはこの小著を副島さんとの共著であると思つてゐる。その気持を形の上にもあらわしたいということもあって、副島さんの寄稿を要請したのである。今年の元日をぼくは佐賀の副島さんのところで迎えた。よく晴れた、おだやかな日であった。いっしょに附近を歩きまわった。身にしみるのは温い日射だけではなかった。そのときの駄句——

元朝あづまや小豆あづま雑煮あづまのめづらしき

元日や南天多き友の里

(桑原 暁一記)

(寄稿) わが生涯のともしび (黒上正一郎先生の思い出)

佐賀大学教授 副島 羊吉郎

桑原暁一兄の「続日本精神史鈔」が発刊されることを、私は心から喜ぶ者の一人である。桑原兄とは若い頃から交友を重ねてきたので、この著書が生れるに至った「精神的背景」について、請われるままに私の知る範囲内のことを述べてみたいと思う。桑原兄の精神的背景は、私のそれと一致するところが多く、共通の師、いまは亡き黒上正一郎先生や、梅木紹男さんのことにどうしても触れないわけにはいかない。それで私自身の若いころの事から書き出さしていただくことにした。中学時代の私は、海軍兵学校への進学を望んでいた。それは、当時の郷土(佐賀)の軍国熱の影響もあったのであろうが、一つは家が貧乏で大学に進めなかったのと、もう一つは、国を護るために、若い命を惜しげもなく捨てる青年士官の生き方がこの上もなく美しいものに思えたからである。しかし、この志望は身長不足のために挫折させられた。そこで、失望を変更して、別に選んだのが、授業料がなく学資給与制のあった高等師範であった。

こうして、私は大正十五年四月、東京高等師範の理科一部(数学)の学生になったのである。ところが、その学園は、当時の師範系学校の気風そのまま、青年のくせに悟りすましたような顔付の学生が多く、また数学科の教官も、知名の学者ではあったが、人間的潤いがなくて、私は馴染めなかったの

で、けっして愉快なところではなかった。

しかし、六月頃に開かれたベスタロッツの何かを記念するための講演会で、講師は教育学の乙竹岩蔵教授ではなかったかと思うが「ベスタロッツが、窓の外を裸足で歩いて行く孤児を見かねて、自分の靴を窓から投げ与えた」という話を聞いて、いたく感動したことを覚えてゐる。この話が私の胸に突きささって、それ以来私は、自分の前途にはのきな希望を見出したように思う。そして、何か美しい心、美しい生き方を求める方に心が動いて、専門の数学からは段々遠ざかつて行つた。郷土の先輩で実業家の大倉邦彦氏を訪れたのも、その頃であつた。大倉氏は、後に大倉精神文化研究所を設立されたが、当時は目黒の自宅の講堂で精神文化研究の集会などを催しておられた。また高師では、同じクラスの友人数名と会を作つて、松村介石のキリスト教講演を聞きに行つたりしていたが、これらの友人は、間もなく左翼に走り、最後は学園から姿を消してしまつた。彼等は「日本を知る為には、まず世界を知るべきだ」「親孝行というのは、ブルジョアがプロレタリアを搾取するために考へ出した謀略だ」など言い出したが、私はどうしてもそれを信ずることが出来なかつた。

さて私は昭和三年三月、高師二年の春休みを利用して、四国八十八ヶ所順礼を思い立つた。これは高松市に住んでいた義兄の奨めに従つたのだが、そのむねを大倉さんにお話すると、四国に行くなら徳島に黒上正一郎という、聖徳太子の偉い研究家がいるから、是非訪ねるように、と紹介状を書いてくださった。それが機縁となつて、黒上先生との邂逅となり、私の生涯に大きなともし火が点火されること

になった。

ご年配の大倉さんと若い青年学徒の黒上先生とが、どうして知り合われたかは知るよしもないが、おそらくお二人が一高の瑞穂会に關係があられたためであろうと思われる。黒上先生は、大倉さんが研究所というような建物に金を注ぎ込まれることに対しては批判的で、建物なんかより、三井甲之先生のよるな方に一切おまかせになる方がよいのだが、とっておられたことを思い出す。

二

私が徳島市船場町二丁目の黒上家の玄関に立った時は、菅笠に金剛杖、白の手甲、脚絆という巡礼姿であった。すぐ先生のお母さんらしい方が出てこられたが、私の姿を怪しむこともなく(四国では大概そうだが)、快く招じ入れて、二階に通してくださいました。このお母さんという方は、小柄な方で、言葉の丁寧な優しいお人柄であった。お家の御職業は何であったか知らないが、(桑原注・藍問屋であつたとうかどっている)黒光りのする大きな材木を使った、古い商家風な造りで、内庭の広いお宅であった。

二階で待つ間もなく黒上先生が現われた。先生は両の手を袖に突込んだまま、どこからかすーっと出て来て、私の前にべたりと座られた。先生は背が高く(百七十種位か)、骨格の大きい瘦せ型で、その時二十八才だった筈だが、頭髮は薄く半ば禿げ上っていたのが印象に残った。お顔は、彫りの深い顔だちであるが、武骨な感じではなく、どちらかといえば女性的な優しさが現われていたように思う。先生の眼は大きく澄んでおられて、声は清く透き通るような、オクターブの高い声であった。

先生は、挨拶もそこそこに、すぐに三井先生の「明治天皇御集研究」の素晴らしいことについて話し出

された。その時は、この著書の発行される二ヶ月程前のことで、黒上先生は雑誌「日本及日本人」に三井先生が連載されたものの切り抜きを綴じて持っておられ、それで私にお話くださった。私には三井さんのお名前も、その執筆にかかる御集研究も、全く初耳であったが、先生のお話を聞いているうちに、知らず知らず引き込まれて行った。最も感動をうけたのは、黒上先生が、つぎの二首の明治天皇御製を読み上げられた時で、そのときの感動は今でも忘れられない。

薄暮眺望（明治三十七年）

家なしと思ふかたにもともしびの影みえそめて日はくれにけり

山家燈（明治四十一年）

ともしびのたかきところにもゆるかなかの山べにも人はすむらむ

私はかつて故郷の河の橋の上に立って幾度か眺めた、暮れ行く山々の景色をまざまざと眼に浮べて、感極まった。私はその時はじめて和歌の素晴しさを、自分の肌で感じ取ることができた。小学校国語読本にも御製は十首位出ているが、それまでこのような感動を受けたことはなかった。これが私の和歌との出会いとなった。

ところで、私は先生のお宅を二、三時間でお暇する積りでいたが、先生は、明日鳴門の近くの撫養に病氣静養中の梅木紹男さんに君を紹介するからと、しきり止められるので、お言葉に甘えることとした。

三

翌日黒上先生につれられて、撫養に梅木さんをお訪ねした。お宅の階段を上って行くと、背の高い偉丈夫が突っ立っていて、ニコニコしながら階段を上っていく私たちを見下しておられた。それが梅木さんであった。角張った敵しい顔に、大きな眼が人懐っこく輝いていた。白の毛糸のスポーツシャツの襟を立てて、その上に丹前を着ておられたので、一層大きく見えたのかもしれないが、体の小さい私などは、一見して圧倒されそうな気がしたが、その人柄の全体から受ける暖い感じに、強く魅きつけられた。

この梅木紹男さんは、黒上先生が兄弟以上に親しくされていた無二の親友で、黒上先生を語る場合どうしても欠かせない方なので、ここで少し書いておきたい。

黒上先生と梅木さんの間は別に親類関係はなく、ただ、小学校が同窓で先生の方が一年か上であったときいている。しかし、何か家庭間に特別な関係があったらしく、先生のお母さんは、梅木さんの生立ちや家庭の内情などについて詳しく知っておられた。私が伺ったことをまとめると、梅木さんは、小学校時代から抜群の成績で、徳島中学四年から一高文科に進まれたが、一高でもいつもトップで通された。そのうえスポーツを生まれ、中学時代は弓道をたしなみ、一高では野球部に入り、一塁を守り、後に主将となった。野球部の練習は毎日晩くまでつづけられる。それでいて学業の成績は、いつも抜群であったという。私は、梅木さんに、その秘訣をお尋ねしたことがあったが、梅木さんは、「教室で一度聞いたことは忘れない」とてれくさそうにいつておられた。これだけのことなら、ここに記すまでもない

市外西川果鴨町宮下

一六二二

近藤氏方

割鳥羊吉郎様

本郷巴西片竹ナ番地イナハ
朝風堂 黒上正一郎

割鳥えつ使りとお浄して今眼登の藝まき
おはえま方一詮二詮胎た二夫一申すこは七也
りせせぬ大乳と相助けて其に使命を全ふす一
候。いとおま方大又もつ噂々大坊れつつとみ下せ
今は同じ都にゐるのでございませう、其に懸念命
進みませう。梅本様おふかし大又のナ上せ
供はれ居られませう、いふく申上たいことお
りま方が拜眉つゝ即と期し上ませう、
奉忍と大おませしかころさ箇のいためにさ、か
まぢいむ
みべのこもりしみ文こりがしわが眼底のあつきとく
お様文略

黒上正一郎先生の手紙

のだが、梅木さんという人は、それを鼻にかけることが全くなかった。一高では当時成績の順番を教務室の前に貼り出したそうだが、梅木さんは、それを自分から見に行くことはなく、いつも友人が知らせていたということである。

また、野球についてつぎのような逸話が残っている。一高が某大学と戦って敗れた時、相手の応援団は選手を囲んで、大乱舞をはじめた。それを見かねた一高応援団の中から「野球では負けたが、頭で来い、頭でなら負けないぞ」と叫ぶ声があった。それを聞いた梅木さんは寮に帰ってから「野球では負けたが、頭で来いとは何事であるか。野球に対しては飽く迄野球で行くべきだ。こんなこというようでは、一高精神も地に墮ちた」とひどく憤慨されたという。なお、一高の野球戦が映画になったことがあったが、当時はまだ映画が珍しい時代であったから、ほとんどの選手が自分

の英姿を見に出かけたが、梅木さんは、遂に見に行かなかつたそうである。こん風であったから、梅木

さんは一高生の間で特別人望があつたらしい。梅木さんが言うことならば皆が受け入れたと言われている。梅木さんは学生のみならず、教官からも尊敬されていた、と黒上先生は語っておられた。黒上先生は、「自分は思想を三井さんから、信仰を近角常観師から、友情を梅木君から学んだ」と、よく言っておられた。お二人の友情の具体的内容について、私は直接には知らないが、黒上先生の詠まれた和歌によって、それをうかがい知ることができる。先生の、梅木さんが病気で徳島に帰ってこられるのを、一日千秋の思いで待たれた時の歌がある。

小松島根井山のもと舟入らばいかにすがしく君おもひまさむ

そのあたり夕さりくれば浜にでてかしこきみことわがききまつらむ

今日もかも汽船の笛はきこゆれど君がきまさむその日はしらず

鳴門瀉がた小松の生ふる大岩にくたくる波を何とみまさむ

その日まで二十日あまりはあるとふにこころとほくもおもほゆるかも

この潮風にやすらひまさばみからだもよろしくまさんとひたにまちをり（人生と表現、大正十年）
「この潮風にやすらひまさば」とあるのは、私が訪れた撫養の海岸の家のことであろう、この家は黒上家のもので、先生が梅木さんに提供されていたのである。黒上先生は、よく友情の大切なことを語られ、特に教師は自ら友情の体験を持つ必要があることを強調しておられた方であった。私は、その年（昭和三年）の八月下旬に、再び、招かれるままに徳島と撫養を訪れ、そして翌年（昭和四年）の四月、三度目の訪問をした。

それは、梅木さんが、私が高松の義兄の家に立寄るのを待ち構えて、是非来るようにと封書を届けてくださったからであった。そのお手紙には、つぎのような和歌が添えられてあった。梅木さんの和歌は珍しいと思うので、ここに書きとめて紹介しておきたい。

君と吾と偏ひとへに心通ひ合ふこと感ぜられ更に君思ふ

深き契結ばれて行く吾等こそ共に力を協せて行かめ

鳴門灘この潮流る上つ辺に君はあらむかこの潮上に

彼の山を越えて彼方に雲重く重なる彼方に君ますらんか

この頃は少しよきまま砂浜を歩みて海の風を吸ひをり

よき心持に歩みてあればこのままに都に出でて働らかむと思ふ

吾が道は打ち砕かれぬさあれその砕けし岩の上歩みて行かむ

吾国の教育のため力尽さんと共に誓ひし心たがはじ

去年こぞの春は君来ませしをなつかしくかへりみするも一年すぎぬ

この年も会ひ度き心の止みがてに暇をつくりて君よ来ませな

ところが、この三度目にお会した時、梅木さんは私の眼の前で大咯血をして倒れ、そのまま永遠の眠りにつかれてしまったのである。私にとっては言語に絶する驚きであり、悲しみであった。代れるものなら、この優れた人材のために代ってあげたいと思ったことであった。その時は黒上先生もお母さんも不在で、そばにいたのは、私とお手伝のおばさんだけであった。その日は暖い日で、梅木さんは気分

もよかったので、久し振りにお風呂にはいられたのだが、それがいけなかったのである。これは昭和四年四月十二日のことであつた。行年二十八才。病臥八年、東大哲学科に在学中であつた。梅木さんの棺には、花が一杯つめられ、お棺の蓋には、義父に当たる方の手で、「嗚呼悲しい哉」と黒痕あざやかに書かれた。その字が今も私の眼にしみついている。

思えば梅木さんとは僅か一年の交りに過ぎなかつたが、その間に、五通の封書と四枚の葉書をいただいている。私にとって永久に忘れられない人である。梅木さんは、家庭的には幸福ではなかつたときく。どういふ事情であつたか知らないが、梅木家の養子となられた。しかし養母とも死別され、養父とはあまりしつくり行かなかつたらしい。そういう環境が然らしめたのか、またはそういう環境にも拘らずそうであつたのかはわからないが、梅木さんは、小学時代は勿論、中学時代もいつもお母様(養母)が裁逢しておられるそばに、机を待ってきては勉強をされた、黒上先生のお母様は、「梅木さんの産みのお母様は、よく出来た人であつた」と褒めておられた。そうすると、梅木さんのあのお人柄は、主としてこのお母様からうけついただと思われてはならない。梅木さんには、上野の音楽学校出の婚約者がいた。しかし、この人は、梅木さんの病気が長引くと共に自然と遠ざかっていき、後には寄りつかた、ということである。このことも梅木さんの心を痛ませことであらう、と思われる。

医学が今のように進歩しておれば、梅木さんもきっと回復なさつたことであらうが、その頃の医学には見切りをつけられたのか、ドイツから医学書を取り寄せて自分で読んでおられた。

無二の親友であられた黒上先生が、この梅木さんの死をどれほど悲しまれたかは、想像にあまりある

ことであつた。あとで、なおそのことに触れたいと思う。

この梅木さんの追悼会が、昭和四年秋頃、一高昭信会（黒上先生を中心にしてつくられたもの）主催で行なわれた。場所は当時、文京区の本郷にあつた一高の校内であつたように思う。私が学んでいた東京高等師範にも、黒上先生を中心とする「信和会」という会があつて、その信和会を代表して、私も追悼文を読ませていただいたことを記憶しておる。その時、三井甲之先生は、長詩「梅木紹男兄のみ霊に」をよまれ、列席者に深い感銘を与えた。

梅木紹男兄のみ霊に

「いつか御目にかかり

御口づからなる御言葉承はりたし」と、

今年一月一日賀状にしろして

たよりせられにし友よ。

最近の君の写真

心の友とともにうつしにし君の写真の

たくましきその君の姿よ

四月九日撫養岡崎よりの六人のよせがきの

はがきの君の文字、力づよき

君の文字よ

いかにして君はこの世を去り

この世に君の姿は消え失せしか。

しかしながら君のいのちは、

君の友らのいのちにつながり

祖国のいのちを

内にささへて

ひろがりゆかむ。

まことのいのちは

細胞と細胞とのアヒダに

星と星とのアヒダに

生命と生命とのアヒダに

つながりて

永劫に

流転せむ。

生命と生命との間のみちをふみてゆく

同信のはらからよ、

ともに手をつなはずや

われらがともに手をつなぐとき

その一端は

この世を去りし

君のいのちに

つながる故に

われらともに

宗教儀礼タナスエノミチにより

ともに手をつなぎ

亡き友のいのちを

たなすゑの律動に感触せむ。

梅木紹男君

君のみ霊よ

今時空をこえて

現しく

われらに來れ！

追悼の詩といえ、梅木さんが自ら書かれた「依田君の死を悼む長歌」がある。これは一高瑞穂会の機関誌「朝風」三十三号(昭和四年一月十五日発行)に出ている。その編集兼発行者は、驚いたことに黒上先生になっている。長いのでその一部の紹介にとどめる。

兄弟よ、つひに逝きしか はらからよ

吾等一度も君と会はず

また一日も語らざりき。

さあれ吾は吾が友黒上氏により

また文によりて、君と親しかりき

君逝きます時、君は国を憂へ

国に尽さんと述べまししか。

若人よ、君よ。

地火燃ゆる浅間の麓に

君は生まれ、君は育ちし。

その火の山の氣を負ひて

若人君は

大和男の児とぞ思はれし。

熱き血溢るる彼の胸は

大き抱負に未来を描きて

精進と努力を惜しまざりし。

ざるを君は現実のキャンパスに

荒き二三の筆すじを残せしままに

力強き美しの原画を

冷たく固き骨の中に抱きて

永遠に静かなる土の下

その身を埋みかくれましき。(以下略)

このなくなられた依田貞三という人は、私も一、二回その姿を見かけたことがあった。霞んだような眼をした豪快な風^{ぼう}手の人で、将来を属望されていたという。「一生かかってもマルクシズムを克服してやる」といつていたと、黒上先生から伺ったことがあった。

四

話は前に戻るが、はじめて私が黒上先生と梅木さんにお会いしてのち、私はお二人に別れて、四国遍路に旅立った。当時のお遍路さんは、必ず安いお遍路宿に泊るしきたりになっていた。精進料理^{のふ}に蚤^{のみ}つきの煎餅ぶとんの木賃宿^{きちんやど}である。室戸や足摺岬^{あしずり}を巡って、愛媛県の今治まで、二週間ばかり歩いたが、山の尾根を歩いたり、菜の花やげんげの花の中を通ったり、村の入口で接待の餅を貰ったりして、気楽

な楽しい旅であった。しかし家には思いがけぬ悲報が待っていた。

胸の病気で療養中の弟が急逝したのである。弟は、私が丁度雨の中を、笠を傾けながら、足摺岬あしずりみさきへと歩いていたその日に亡くなったのである。その路は、人家とて一軒もなく、行けども行けども両側に椿の花咲く淋しい長い路であった。私にとって唯一人の弟の死は、堪えられぬ程の悲しみであった。こうした悲しみを胸にひめて、再び私が上京したのは、四月の末であった。私の下宿には、黒上先生からのお葉書が待っていた。

「御弟君様俄然がぜん御逝去の御こと真に胸うたれました。幼くして亡くなられいたしましたしさを思ひ、何とも申上ることばありません……」

引きつづいて朝風寮から御上京の知らせが届いた。

「……大兄と相助けて共に使命を全うすべく念じています。今は同じ都にいますのでございます。共に懸命に進ませう。

弟君を失ひまししみころを国のみためにささげますらむ

み心のこもりしみ文よみかへしわが眼底のあつきをおぼえぬ」

先生の私信をここに紹介するのは、われわれに下さったお手紙が、教育上から見ても非常に重要な意味をもつと思つたからである。先生は文中で、われわれを「大兄」と呼ばれ、いつも「相助けて」「共に進もう」という態度で通された。これは、黒上先生が研究を進めておられた聖徳太子の御言葉にある「我必ずしも聖ならず、彼必ずしも愚ならず」「共に凡夫のみ」の思想に基づくものであるが、それ

はまた、親鸞の「弟子一人持たず候」という言葉や、吉田松陰の「一緒に学ぼう」という態度にも通ずるもので、日本の優れた教育者に共通する教師道のあらわれと思うのである。

私などは理科系の学生であったので、教科書以外は、小説をはじめ何も読んでおらなかった。そのため黒上先生との対話においても、いつも文科的教養の貧困さを痛感させられたものであるが、黒上先生から、「その方が却っていいのです。ろくでもない小説なんか読まない方がよいのです。」といわれて、安心してまっしぐらに先生の胸の中にとびこんで行ったのであった。一方、高師の中では、この秋、一年下の広瀬勝雄、仲好夫、吉田昇君たちと松月会（その夜が明月であったので）を結成したが、これは翌年、信和会と改称して、佐久間安三郎、久保田弘、川口廷の三君を加え、黒上先生の筆になる「東京高師信和会趣意書」をいただき、昭和四年五月に新しい発足をした。会員はほとんど数学科の学生であったが、心理学の田中寛一、武政太郎の両先生が顧問になって下さった。これも黒上先生のお力添えによるものであった。先生から信和会にいただいた和歌がある。

おほまへに共にちかひしまこともてをしへの道につかへまつらん

もろともにたすけあひつつますらがともにたてにしねがひつらぬかん

会の活動は、毎週一回例会を開いて、御製拝誦と共に、先生の講義をうかがうことであつたが、発会後間もなく、先生は梅木さんの埋葬のために西下されたし、秋頃ようやく会が軌道にのりかけた時には、先生がまたお体をこわされ、十二月に帰郷されて再び御上京されることなく、こうしたことで、信和会は、充実した運営が行なわれなまま終ってしまつたのである。

そうになったについては、弁解がましいことにはなるが、信和会は数学専攻の学生の集りであったため、指導者なしには、とうてい聖徳太子についての自主的研究を進め得なかったからでもあった。

昭和初期の日本の知識階層の人々の中ではマルクス・レーニン主義が全盛で、聖徳太子に興味を持って勉強するなどという雰囲気はみられなかった。黒上先生が学生に聖徳太子のお話をされようとしていると聞いた某知名の士は、先生の為を考えて、「極力中止方を勧告したようである。しかしながら先生は、断乎としてこれを拒否され、敢然として、一高と高師の両学内で「聖徳太子の信仰思想について」の課外講義を実行されたのであった。太子のお教えは人生の真理で万古に通ずるものである、現代が乱世であればある程愈々説く必要がある、という強い信念から、「一人でも多く人があれば私はやります」といわれ、頭が下ったことを覚えていいる。

前述の通り先生の講義の回数は少なかったが、われわれは、先生からいただくお手紙によって、また先生が好んでなされた散歩の道すがら、そしてまた先生の下宿、本郷森川町の桜館において、数々の得難い教えを受けることができた。先生が語られるのは、主として太子のお言葉や明治天皇御製についてであったが、先生の生々しい感動がこもっていたので、われわれの心に強くひびいたのである。今でも「和を以って貴しと為す」「共に凡夫のみ」「群生と苦楽をともにせん」という太子のお言葉などが、私の耳底にはつきりと残っている。ここに、私がいただいたお手紙の一部を紹介しておきたい。

「現代はあまり何ごとも制度や形式を先にたてすぎる弊害があるように考えます。『事大小となく

人を得て必ず治まる』と太子は仰せられました。が、制度政策は勿論大切ですが、その意義あるか否かは、これを運用する人の問題であり、それは即ち人の心の問題であると存じます。それ故に教育のことも、実際の制度や運用を勿論常に考ふべきですが、そのもとづく所の教育者の精神と生活が根本であると思ひます」

黒上先生が研究されるご態度は、普通の学者と異なる独特なものであった。三経義疏の難解な箇所遭遇されると、床の間にかけていた太子の画像の前にひれ伏して、香を焚き永い祈念を捧げられるのが習わしであった。そうした祈念によって疑問が解けたことが屢々あると語っておられた。先生は、祈念することによって、太子の精神に溶け込み、その真髄にふれられたのである。精神科学において、偉大な精神の奥秘を窺めるには、このような謙虚な態度を必要とするのであらう。

先生から伺ったお話の中で、先生が小学生のとき、国語の時間に、「どうしてこんな拙い文を読ませるのですか」と教師に言つて、大変叱られたというお話があった。先生はいわゆる優等生ではなかったらしいが、ことばに対しては、幼少から優れた感覚を持つておられたようである。成績といえば、商業学校ではピリに近かつたとか。おそらく商業の科目には興味が湧かなかつたのであらう。

先生がいつ頃から、どういふ動機で、聖徳太子の研究に入られたのか、私ははっきり知らない。先生の御著作によると、京都の井上右近氏の指導を受けられたことは事実である。しかし井上氏との初対面は、つぎの和歌

あひまつりしその日は空はうすぐもり大比叡がねはほのにけむりし（大正九年六月）

をよまれた時のようで、この時は二十一歳位である。ところが、先生は、同じ年の九月に、つぎの詩を作っておられる。

磯長しなが参籠

(一)

御墓山の茂木がもと

御廟のまへに虫なきしきる

しづかなる夜半なりき

おほまへの砂地にぬかづきまつり

念ひまつる太子のみ言

恋慕渴仰つきざる思ひの

わが胸ぬちにみちたりしか

(二)

陵のおほまへに燈をともし

憲章を誦しまつり夜は更けぬ

久遠劫よりこの世まで

あはれみましますおほみめぐみよ

念ひまつる我等がこころは

和国の教主聖徳皇と

この一語にきはめしめらるるか

(三)

非海彼本とのたまひし

祖国憶念と

共にこれ凡夫とおほせましし

内的平等感と

それを統べしむる婦命三宝の原理を示したまひし

十七憲章の和の、また片岡山のみうたの

悲痛なることばのリズムよ

いま胸のうちに生きしめらるる

(四)

その夜ひろげし憲章のすりぶみは

君がたまひしそれなりしか

そのみこころにつらなりまつる

そはまた通ふ 古への名もなき民の

「日月輝を失ひて天地既に崩れぬべし

今より以後誰をか恃まんや」とふ

悲痛なる言葉よ

ああその不思議の開展よ、(大正九年九月)

この詩を読みながら感じられることは、この時まで既に数年にわたる太子についての研究歴があったように思われてならないことである。また、私が先生に初めてお目にかかった頃、「十年間太子を研究された方」ときいていた。先生はその時二十八歳であったから、逆算すると、商業を出られた十八歳の頃から、太子の研究を始められたことになる。その動機についても不明であるが、三井先生主宰の「人生と表現」誌が媒介になったのではないかと思われる。先生は「一時は、河上肇の弟子になるかと思ったこともあった」ということであった。しかし、マルクシズムに対しては、「確かに資本主義の問題点は指摘しているが、それはマルクシズムでは解決されない」という意見であった。

先生がお書きになる文字は、大きくて、力強く、特徴のある字で、原稿を書かれる時には、ガシガシ耳に障るような音を立てて書かれるのが癖であった。先生は

「字が拙いと言って手紙を人に頼んではならない、恥しいということがそもそも間違っている、誠心さへこめて書けば、それでよい」

というお考えを持っていて、それをお母さんにもすすめておられたようである。

黒上先生の下宿の桜館という宿は、東大正門の前近くにあった。古い木造二階建の旅館兼業の下宿屋で、ここには、歌人の尾山篤二郎氏もいたようである。一高の連中は、この宿が学校から近いので、よく桜館を訪ねていた。私はそこで数人の友と初対面した。

昭和三年の五月であったろうか、ある夕方先生の部屋にお邪魔していると、ミシミシと廊下を力強く踏み鳴らしながら近づいてくる人物があった。部屋の前までくると、「田所です。入ってようございませるか」と、きびきびした張りのある声が出た。先生が障子を開けられると、そこに一人の高生が立っていた。口を一文字に結び、右肩を高めにして、落ちつき払った颯爽たる姿であった。まだ新しい制服に、帽子を片手に持ったその青年を見て、私はこれはただ者でないな、という印象を受けた。これが一高昭信会の中心人物となった田所広泰兄であった。その日は、ボートの練習の帰りということであった。

これが縁となって田所兄と親しく交わるようになり、以後十四、五年間知遇を辱かたじけなうするに至った。田所兄は、黒上先生の御遺志を多くの後輩に伝えた稀有の指導者としての天性を持っていた。同兄については、最近その遺稿集「憂国の光と影」が国民文化研究会によって出版されたので、精しいことはそれにゆずりたいが、ただ、私が終戦一年前の昭和十九年二月に、四国の今治で田所兄から貰った最後の手紙の一部をここに紹介しておく。

「……小生なほ未就職、官廳では陸軍との磨擦をおそれて採用してくれません。徴用をおそれてお

りますが、しかし何よりも戦争の推移が気にかかります。どうも我々の言ひ且つおそれていた通りになつてきまして、今更楽観論などどこに行つたとて吐く人はなく、一年前とは非常な違ひであります。これは、僕らは、楽観論が、実は信念から出たものでなく、計量と予定とから出たものであるからして、それに基いた政策は一切放擲せねばならぬといふことを申したのでした。……(後略)』さて、田所兄と出会つた昭和三年ごろ、私は、田所兄と親しくしていた一高昭信会の河野稔兄(この方も昭和七年一月に、一高在学のまま早逝された有為の方であつた)ともお会いしたことがあつた。その時河野兄は何と思われたのか、急に明治天皇御製集をバラバラめくつて、つぎのお歌を読みあげた。

蝶(明治三十九年)

咲きつづく花より花にあくがれて蝶も夢みるひまやなからむ

そして河野兄は、私に向つて、教育者という者は、このような生徒への思いやりの心を持つことが大切と思う、と語つたのを覚えてゐる。

一高の友は、先生の下宿によく寮歌をうたいながらやってきたが、先生もまた寮歌が大好きであつた。先生は昔の一高生は盛んに寮歌をうたつたもので、夕方は全部の寮生が本郷の通りに出てうたうので、やかましくて仕方がなかつたそうだと言つて、最近は一高生が寮歌をうたわなくなつたと嘆いておられた。

桜館の近くに「求道学舎」というのがあつて、毎日曜日、近角常観師が歎異抄の講話をしておられた。黒上先生は、信仰は近角さんから教えられた、といわれていたように、その信仰を高く評価され、

われわれにもその著書を読むことをすすめられた。私も近角さんのものは、「人生と信仰」はじめ、かなり読んだほか、歎異抄の講話も何回となく聴講した。近角さんは、いつも自分の懺悔話を繰り返しておられたが、その講話を何度聴いても、聴き飽きなかったのは、本当の信仰があったからであろうと思う。

黒上先生は、われわれに「善知識同行にはしたしみ近づけ」という親鸞上人の言葉を引いて、優れた人の門を叩くことをすすめられた。九大の河村幹雄博士についても、その門を叩くことをすすめられた。私が河村先生を始めてお訪ねしたのは、昭和四年八月であった。そして翌五年の夏も、また邪魔したが、その年の冬休みには高師信和会の広瀬、仲の両君と河村先生の斯道塾を訪れ、四泊五日、先生の御指導を仰いで、三十一日に帰った。その時の御講義は、トーマス・ヒューズの「トム・ブラウンズのスクールデイ」やチャールス・ワグナーの「シンプル・ライフ」についてであった。先生は、英語が達者で、一高時代は、新聞の号外なども片端から英訳されていたという程だから、テキストは、いつも英文をプリントしたものを使用されていた。

六

さて、この辺で黒上先生の活動について総括的に振り返って見たい。私は先生から約一年半の間に、十三通のお手紙をいただいているが、それをたよりに当時を顧みると、先生は、私をはじめてお目にかかった年の昭和三年五月には上京されて、七月頃まで在京しておられた。この頃までは、一高瑞穂会の「朝風寮」におられた。このころは、先生が瑞穂会の会誌「朝風」の編集者になっておられたことは前

述の通りである。黒上先生は、夏休みには、いつも徳島の御実家に帰られたので、私は八月末、二度目の徳島訪問をした。先生のお母様が、毎食お膳につけて下さった鳴門のわかめの味は、今でも忘れられない美味しいものであった。

その年の十月四日頃上京されて、先生は朝風寮を引揚げて、桜館に移られたようである。一高や高師の学生の訪問が頻繁になってきたので、独自の運動を展開なさろうとするためであったのだろう。しかし、この時は二十日間位で、また徳島に帰られたが、帰路は甲府に廻って、三井甲之先生のお宅に立ち寄られた。黒上先生は三井先生について、五百年に一人位しか現れぬような実に偉い思想家である、といつも語っておられた。

その頃いただいたお手紙には、時々「文筆が思うように進まぬ」と書いておられた。これは、「国語と国文学」の昭和四年二月号と三月号に、「聖徳太子の人生宗教と国民精神」を書いておられたその百枚程の原稿のことではなかったかと思われる。この外、先生は、それ以前のものと考えられるが、「教育思潮研究」第一巻第二号に「教育思想家としての伝教大師」(百二十枚位)を寄せておられる。かくて黒上先生は、その年の十一月末には、再び上京された。先生は、いつも紋付と袴はかまに赤ちゃけた小さいバスケットをさげて、飄々ひょうたとして歩いておられたが、そのお姿は、井上右近氏が黒上先生について詠まれた和歌に、よく表されていると思う。すなわち、

バスケットさげつつわが家にちかづきます人ありじつとながめつ(大正十年十一月)

言うまでもないことであるが先生がこうして上京される時、どこからも旅費や日当が出るわけもな

く、講義に対する謝礼も鑑び一文出ることにはなかつた。一切先生の自辨であつた。われわれがそのことを気の毒がると

「私は聖徳太子のみ教えを聴いていただくだけで満足です」

と答えられるのが常であつた、そのお言葉に、われわれはただ胸打たれ返す言葉もなかつたのであつた。

昭和四年になると、三月はじめ黒上先生は、一高の田所兄らと、水戸の大洗海岸に旅行しておられる。

「今大平洋海岸に来て岩うつ波のとどろきを聞きつつ、はるかに大兄達を偲びて健康を祈上ます」と書かれた水戸常磐神社の絵葉書が、今も私の手元に残っている。その後一行は三月下旬に河内磯長しながの聖徳太子廟に詣でた後、撫養ひやに梅木さんを見舞われた。その時の写真（先生、梅木さん、田所、河野、新井、市川君）が前述の三井さんの詩「梅木紹男兄のみ靈に」の中に出てくる写真である。これは私も一枚貰もらっている。（桑原注、そのお写真は副島兄から提供されたが映像がひどく暗いので、ここには出さなかつた。）田所兄らは、四月の九日か十日にお暇しているが、私は入れ替りに、撫養に行き、思いがけなくも、梅木さんの臨終に立合うことになつた。つまり梅木さんは田所兄らと別れてから、二、三日後に昇天されたのである。

黒上先生がどれ程梅木さんの死を悼まれたか、思うだに胸痛むことである。ここに当時の先生の和歌の数首を選んで御心中を偲んで見よう。

ひさしくも亡きはらからのしたはれしその山河をみればかなしも

熊山の土あたらしき奥津城に涙おのづからわきいづるかな

うつしよに君なきあとはいかにして我世に生きんと思ひし日もあり

兄このかみも弟もなければもろともに助けあはんとねがひしものを

国のため末はなりなむよき人を身に代へてもと祈りぬ我は

うつしよのかなしき思ひのらずともうなづき笑ましし君が心はも

さまざまの苦を荷ひつつ国をうれひ友をはぐくみしますらを君はも

いたましきさだめに堪へてつよかりし君がいのちを思ふもかなしき

先生はこのような深い悲しみを胸に秘めながら、五月はじめには上京され、五月五日に一高昭信会、同じく十一日には高師の信和会を発足させ、引きつづいて、両会の指導を開始された。そして、その席の暖まる間もなく、五月の末には梅木さんの御遺骨埋葬のため東京駅を立たれた。われわれは、駅頭まで先生を見送り、銘々追悼歌を献上した。先生は去り行く列車の車窓から身を乗り出して、いつまでもこちらを見詰めておられた。後では、これがわれわれ相互の見送りのときのエチケットになったようである。

先生は、その後、七月初めに一寸上京された。八月末には、昭信会が徳島県の「田岐海岸」で、第一

回の合宿を行なっている。先生も参加されたことは言うまでもない。私はこの合宿が終ってから徳島に四度目の訪問をした。

秋が来て先生が上京されると、著書の執筆と、両会の指導に大活躍を始められた。信和会が小石川の戸塚町に信和寮を持ち佐久間、広瀬、仲、副島の四人が入ったのもこの時である。しかし、先生はあまりの過労から遂に病魔に侵され、再起不可能となってしまった。私が最後にいただいたお手紙は、昭和五年一月十三日付のもので、先生のお母様が代筆されたものであるが、その終りに、先生はつぎのよう書き足しておられる。

「……今はるかに兄等のみ上を偲び、御なつかしさにたへませぬ。みうたいく度もくりかへしをります。ことしは更に心して共に国のため、道のためになりまつらしめたまへと祈願いたします。ただならぬ世にこそわれらのつとめも大きく又かかる時にこそ聖王の大きみをしへもあらはれませしと信じをります。兄にもこの上御身御大切に。郷里の夜更けて信和寮の燈火を偲び真に感慨無量であります……（以下略）」

これが先生の私への最後の御言葉となったのである。

以上、先生からいただいたお手紙によって、先生の足跡を辿って見たが、思えば先生は、昭和三年四月から昭和四年の秋にかけて、約一年半の間、文字通り身命を賭して奮闘せられたのである。この間私がいいただいたお手紙だけでも三十三通に上り、多い月は六通にもなっている。これは私だけでなく、他

の少なからぬ友人にも出されたのであろうから、お手紙だけでも、大変な御勞苦であつたらうと想像される。

その上、先生はもともと蒲柳の質で、朝風寮時代から血痰を吐いておられたときいている。胃腸も弱く、よくお腹がグーグー鳴っていたが、先生がお腹をさすると、びっくりするような大きなゲップが出た。また先生は、非常に律義なところがあつた。たとえば、三井先生を初めて訪ねた時、出された布団も敷かれず、蚊帳をかぶつたまま一夜を過ぎたとか。三井先生は「そういうところが黒上君のいいところだ」と誉めておられたそうだが、その一徹な律義が、お体を痛める一つの原因になつたのではないかとも思われる。

私は昭和五年三月、佐久間、久保田の両君と共に高師を卒業して、福島県郡山の安積中学に数学教師として奉職することになった。その年の五月、一高昭信会の諸兄の力によって先生の著書が、謄写刷ではあるが、世に出た。これは大きな喜びであつた。先生も病床でどんなにか喜ばれたことであらう。ところが、夏も過ぎて秋風が立つ頃、九月十八日に、郡山の私の手元に「センセイマッタクゼツボウ」という電報が、田所兄から届いた。そして先生は、二十一日に遂に永眠されてしまったのである。

われわれの信和会は、基礎の固まらぬまま翌年（昭和六年）三月、中堅の広瀬、仲、吉田君らが卒業した後、後継者がなかつたため、自然消滅となつた。先生に対しては、まことに申訳ないことである。しかし、地位も名誉も金銭も、さては恋さえも顧みず、ひたすら聖王のみ教のために捧げられた先生の聖く美しい三十年の御生涯は、私の生涯のともし、火として輝いている。黒上先生のみ教のしらべは、四

十年経た今日でも、先生のお歳を越えることさらに三十年の齡よばいを重ねた今の私の胸の中にも、脈打っているのである。

最後に一言したい。桑原兄は九十歳の長寿を完うされた母堂に捧げるために、「ちいさきともし火」という小冊子を四年間にわたって、八巻まで書きつづけた。これは先の「日本精神史鈔」に収められている。この「ちいさきともし火」は、私自身にとってもまた、先生亡き後の小さからぬ「ともし火」であった。この「ともし火」は今までも私の進むべき道を照らしてくれたし、これからも照らしてくれるであらう。

(昭和四十五年四月)

附記・黒上先生が一高瑞穂会に深く関係されていたことは副島さんの文によって明らかである。この会は一高教授沼波武夫氏の創設したものである。黒上先生は梅木さんを介してこの会を知ったのであらう。田所広泰兄等をはじめ瑞穂会の例会で黒上先生の講義を聴き、あとでそれから離れて昭信会をつくったものと考えられる。(桑原 暁一記)

著者略歴

昭和五年四月第一高等学校（文科）に入
学、一高昭信会（本書発行の国民文化研
究会の母胎）の会員となる。

昭和十一年三月東京大学国文学科卒業。

現在、東京都立千歳高等学校教諭。著書
に「日本精神史鈔」（国文研叢書 No.2）が
ある。

鈔 精神史 日本 続

国文研叢書 No. 11

昭和四十五年十二月二十五日 発行

頒価 七〇〇円

著者 桑原 曉 一

発行所 社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

東京都中央区銀座七―一〇―一八 柳瀬ビル

電話（五七二）一五二六―七

振替 東京六〇五〇七番

印刷所 奥村印刷株式会社

東京都千代田区西神田一―一―四

